



魔法使い
シヤオ

秋華

プロローグ

人は進化する。。。
人は、より良い自分とするために進化する。。。
人は、その中で争う。。。
そして人は、何かを壊し、新しい何かを作り出す。。。
そしてまた人は、争う。。。
その繰り返しの中、人は進化する。。。
しかしやがては、人は自らを滅する。。。
歴史は繰り返す。。。
人は繰り返す。。。
全ての人を滅する力を手にして、そして滅ぶ。。。
神は考えた。。。
人に、過剰な力を与えてはいけない。。。
しかし人は、より良い自分とする為に進化する。。。
そこで神は、更に考えた。。。
初めからある程度の力を人に与えては。。。と。。。
そうする事で、過剰な力を手にする流れを絶つ事を。。。
人は空を飛べないから、飛ぶ方法を考える。。。
ならば、飛ぶ方法を最初から与える。。。
闇の中に光が無いから、光を作る。。。
ならば、光を最初から与える。。。
高速な移動を求めるから、それも与える。。。

世界を滅ぼした、全世界を巻き込んだ戦争。。。
その戦争によって、人類のほとんどが死に絶えた。。。
その時、神は全てをリセットし、人に力を与えた。。。
その力は人に、空を自由に飛ぶ事を許した。
その力は人に、自由に輝きをもたらす事を許した。
その力は人に、高速での移動を可能にした。
その力を人は、魔法と呼ぶ。。。

神が、人の住むこの地球をリセットしたと言われる「アルマゲドン」より、数千年。。。
それでも人々は、争いを、戦争をやめる事ができなかった。
神に与えられたその力を、戦いの道具として使っていた。
アルマゲドンの直後、残された僅かな人々。
その人々は、今後戦争を起こさないと誓った。
しかしその思いは、世代を重ねるごとに風化する。
そして今、人類は混沌の時代の真っ直中。
その昔、戦国時代と呼ばれる時代と類似する。
天下統一を掲げ、世界統一を目指し、ごく僅かの人々によって、全世界が動いていた。
今世界は数百の国に分かれている。
正確には、数百の国が作り上げられた。
その国々は、全ての陸地を埋め尽くし、全ての陸地がどこかの国に属する。
新たな土地を求めても、もう存在しない。
そんな中、理想を掲げる人々が、理想国家建国の為に、ある国の領土を奪う行動にでた。

国を大きくしたい人々が、近隣の国を奪う事を始めた。
そこから憎しみが生まれ、戦いが戦いを呼び、混沌の時代へと突入したのだ。
それを愁いた1人の少年がいた。
名を「シャナクル」と言う。
シャナクルは、生まれながらに強大な魔力を持っていた。
そして若干10歳の時には、世界最高と言われるほどの魔法使いに成長していた。
シャナクルは、その強大な魔力を力に、11歳の時ブリリア国の王として名を轟かせる。
そして全国統一という目標を掲げ、戦いの無い世界を目指した。
近隣国に攻め入り、刃向かう者は容赦なく殺し、破壊する。
人々は恐怖する。
一部の者は取り入り、一部は志同じと同調する。
そして多くの敵を作った。
そんな中で、この日最西にあるローラシア大国に攻め入った。
ローラシア大国は、全国でも5本の指に入る大国で、魔法軍事大国でもあった。
シャナクルは自ら最前線に立ち、ローラシア大国を圧倒する。
しかし、ローラシア大国は陥落寸前で、ターゲットをシャナクル1人にしぼり、反撃した。
そして、ローラシア大国の全てと引き替えに、シャナクルを滅する。。。

トキヨウへ

今日も、いつもと同じ霧の中にいる。

アイは、今日もいつもと同じ時間に起き、そしていつもと同じ場所で、神に祈りを捧げる。

肌には、突き刺さるような寒さが痛い。

太陽が森の方から顔を出す時間までには、まだいく時がある。

アイにとっては、それがいつも自分が見る景色。

そして感じる寒さ。

四季のほとんどない、人類発祥の地と言われる、トキヨウと言われる地。

しかしこの地は、今では人の住む事の出来る地としては、北の限界地。

これ以上北の地は、寒さで人が普通に生活するには無理のある地。

今この地球に住む人々は、そのほとんどが、赤道と呼ばれる帯状の場所に集中する。

それより南北に離れると、寒さで生活は苦しくなる。

理由は、黒い霧。

黒い霧は、赤道を離れた地で、太陽からの光と熱を遮断する。

それは赤道から離れば離れるほど濃くなり、最南北の地では、太陽を見ることもできない。

トキヨウは、そんな帯よりやや北に離れた地にあり、人が住むにはやや辛い場所にあった。

ただ、人類発祥の地と言うことで、僅か数千人の人々がココにとどまり、生活をしていた。

祈りを終えたアイは、閉じていた目を開ける。

そろそろ太陽が、森の方から顔をだすはずだ。

そんな時、アイはいつもと何かが違う、違和感を得た。

アイ (なんだろう？何かがいつもと違う感じ。。。)

綺麗で大きな目をパチパチと瞬かせて辺りをうかがう。

アイ (なんだか、少し暗いような。。。あっ！)

辺りを見回していたアイは、あることに気がついた。

この世界では、ある時に黒い霧が、赤道上にも多く出る事がある。

それは、多くの人々の命が失われた時にでる。

何故このような現象が起こるかはわからない。

黒い霧の存在理由もわからない。

一説には、神が戦いを拒絶していて、それを人々に掲示していると言われている。

また一説には、多くの魔力がはじけ、それらがそうさせているとも。

なにせよ、多くの命が、黒い霧をほぼ全国に発生させている。

アイ 「また、多くの命が失われたんだね。。。」

アイは大きな黒い瞳に涙を浮かべ、その目を閉じてもう一度祈りを捧げた。

黒い霧は少しずつ晴れてきた。

それと同時に森の方から、今日もいつもと変わらない太陽が姿を現す。

その光は、アイの綺麗な顔立ち、そして長い黒髪を照らした。

先ほど流した頬をつたう涙がキラキラ光る。

アイの顔は、その光を浴びて笑顔に変わった。

アイ 「よし！今日も一日がんばろう！」

そう言ってアイは、祈りを捧げていた神木の前で立ち上がった。

その神木は、人類がこの地より生まれた時、最初の人々が植えたとされていて、数千年そこにあるとされている大きな木だ。

その高さは、てっぺんが見えないくらいに高い。

祈りを終えたアイは神木を見上げ、すぐに神木に背を向ける。

グッと拳を握り、顔を引き締め、ゆっくりと町の方へ歩き出す。

その時、アイは今日2度目の違和感を得た。

アイ (あれ?なんだろう。また何かが違うような。。。)

次の瞬間、すぐにその違和感の原因に気がついた。

左手、森の方の太陽の光が、何時にもまして明るい。

アイはそちらを見る。

すると太陽のかなり上の方、もう1つの太陽が輝いていた。

いや、正確には、大きな光の固まりが、ドンドン大きくなってこちらに近づいてくる。

一瞬の出来事。

驚きと眩しさでアイは、目を閉じ右手を顔の前にかざす。

大きな爆発音が辺りに響く。

アイ 「きゃっ！」

足下が揺れ、アイはその場に倒れた。

音と揺れは、すぐに収まった。

アイ (何が?)

アイは、驚きで閉じていた目をゆっくりと開け、音のした森の方を見る。

低い位置にある太陽の光を、砂埃が遮っている。

砂埃はゆっくりとまわりに広がり、太陽の光がその輝きを取り戻してゆく。

やがて砂埃は重力に引かれ落ちてゆき、太陽は元の輝きになった。

アイ (何かが落ちた?)

そう考えたアイは立ち上がり、森の方へと走り出した。

恐怖もあったが、アイは好奇心が大きく勝っていたようで、全力で走っていた。

アイ (何だろ何だろ。隕石かな?それでいて中から宇宙人が!格好いい宇宙人だったらいいなあ~)

変であり得ない思いを胸に抱きながら、アイは全力で走り続けた。

ほどなくして、アイは森を少し入った所、その現場にたどり着いた。

辺りの木々は、一点を中心に外側に倒れていた。

アイ 「なんじゃこりゃ~!!」

アイは今まで使った事の無いような言葉を発して驚いた。

目の前には大きなクレータ。

半径10mはあろうか。

そしてその中心には、何かが存在した。

アイ (人?)

アイはすぐにそれが人である事に気がついた。

アイ (うわあ~ホントに宇宙人!)

アイは躊躇無く、その宇宙人らしき人に駆け寄った。

アイ 「酷い！」

アイの目に映るその人は少年のようで、頭から血を流し、その着ている大きめ服は、ボロボロに破れ裂けていた。

アイは迷い無く、その少年の額に手を当てる。

目を閉じ、精神を集中する。

体の中の、魔力と呼ばれる生命力が、アイの手のひらに集まってくる。

そして手に、オーラと呼ばれる白い光が輝く。

オーラがゆっくりと少年を包む。

アイ (くっ!かなり酷い傷。。。)

アイは更に集中し魔力を高める。

アイ（これ以上は、私もやばいかも～）
それでもアイは、魔力を高め続けた。

アイは目を覚ました。いつも見る自分の部屋の天井が見える。

アイ（あれ？ココは。。。）

ミサ「アイ。良かった～目が覚めたみたいね。」

いつもよく聞く、親友ミサの大きな声がアイの横から聞こえた。

アイ「ミサ？あれ？私。。。確か。。。あれれ？」

アイは混乱しているようで、ベッドに横になったまま、ミサを見た。

ミサ「あんた大丈夫？なんかボロボロの少年に、治癒魔法を限界まで使って倒れてたらしいじゃない。」

毎日見る親友の顔は笑顔で、気さくな正確がそのまま出ているそれは、アイを安心させた。

アイ「そうだ！！あの子大丈夫？なんか空から降ってきて、ボロボロで血がドクドクで。」

ミサの顔を見て落ち着いたかに見えたアイだったが、少年の事を思い出し、ミサに言い寄った。

ミサ「アイ！！落ち着きなさいよ。大丈夫。あの子、あんたが頑張ったおかげで、なんとか命は助かったみたいよ。」

ミサはアイの言葉に笑顔を崩す事もなく、優しい声で応えた。

アイ「そう。良かった。。。」

その後、ミサが何か言っていたようだったが、安心したアイは、再び目を閉じ眠りについた。

ミサ「アイ？流石に疲れてるか。」（目を覚ました事、おじさんにいってくるか。）

ミサはそう言って、アイの部屋から出ていった。

沈黙

アイが少年を見つけた次の日の朝、アイと少年、そしてアイの父は食卓を囲っていた。

アイの父は、小さいトキョウの町の長で、トキョウ国、国と言うにはあまりにも小さいこの国の王である。

それでも、北に広がる広大な土地を全て治めるれっきとした王であった。

名を「アキラ」と言う。

アキラ「で、聞きたいのだけど、君はいったいどうして森の中に？この町の人じゃ無いようだけど。」

アイの治癒魔法と、その後この国の治癒魔法使いの手によって、すっかり回復した少年に尋ねた。

少年「。。。」

アキラの問いに、少年は何かを考えているようだったが、何も応えなかった。

アイ「君、なんだか凄い光の固まりに包まれて、森に落ちてきたんだよ？」

アキラ「何？そうなのか？それでまああのクレータってわけか。」

アイ「うん。もうすごい音と地響きで、とにかく凄かったんだから！」

アイはそこまでアキラに話すと、ゆっくりと少年の方に顔を向ける。

アイ「でもまあ、死ななくて良かったね。」

アイは会心の笑みで、少年を見た。

少年は少し照れているようだったが、表情を変えずに少し頷いた。

アイ「君、名前？なんて言うの？」

笑顔のまま話しかけるアイに、少年はまた少し照れたように、口を開いた。

少年「なまえ。。。」

アイ「うん。そう。な・ま・え！あっ！私はアイ！よろしくね。」

アキラ「私はアキラだ。で、君の名前は？」

少年はチラッとアキラの方を見た後、すぐにアイを見てこたえた。

少年「シャ。。。」

少年はそこまで応えたと、すぐに口を噤む。

アイ「シャ？シャって名前なの？」

少年「いや、シャ、オ。シャオ。」

アイ「シャオって名前ね。よろしくね。シャオ！」

アイは嬉しそうに、シャオの手を取った。

アキラ「シャオ君か。この辺りでは珍しい名前だね。少し西に行けば、そんな名前もあったかな？」

アキラはそう言いながら、顎ひげをさわり、少し考えるような仕草をした。

アイ「へえ～じゃあシャオは、西の方から来たの？」

アイはシャオの手をとったまま、シャオの顔をのぞき込んだ。

シャオは先ほどよりもわかる位に照れていた。

シャオ「うん。。。まあ、そんな感じ。。。」

シャオは、アイから視線をそらし、なんとなく天井を見ていた。

シャオ「あ、これ、食べても良い？」

シャオはテーブルに並べられた料理を見て、少し控えめに言った。

アキラ「ああ、そうだね。昨日から何も食べてないからね。お腹もすいただろう。遠慮なく食べてくれ。」

アイ「そうだね。とりあえず料理が冷めちゃう！って、もうさめてるう～？」

アイはそう言うと、シャオの手をつかんでいた手を離し、勢いよく料理を食べ始めた。

アキラ「おいアイ！いただきますを言ってから食べなさい。」

アキラの言葉に、アイは少し肩をすくめて「いただきます！」と言って、再び食べ始めた。

シャオ「いただきます！」

シャオは少し遠慮したような声でそう言うと、ゆっくりと料理を食べ始めた。

それを見て、アキラも「いただきます！」と言って、料理に箸をのぼした。

勢いよく食べるアイの目の前の料理は、これでもかといわんばかりに、一気にその姿を消していく。

そして数分で、その全てが綺麗に無くなった。

アイ「ごちそうさま！で、シャオ。なんか凄い大きな服、しかも王様でも着ないようなゴージャスなの着てたけど、もしかして王子だとか？」

料理を食べ終えたアイは、満面の笑みでシャオに訪ねた。

アキラ「こらアイ。シャオ君はまだ食事中だ。もう少し待ちなさい。」

アキラの声も、好奇心旺盛なアイの耳には届いていなかったようで、アイは満面の笑みでシャオを見つめ続けた。

シャオ「いや、たぶん違う。。。と思う。。。」

アイの笑顔攻撃に、シャオは無表情のまま、それでも少し照れたようにこたえた。

アイ「え？覚えて無いの？もしかして記憶喪失？」

シャオ「そう、なの、かな。。。」

シャオは覚えていた。

しかしそれを話さなかった。

シャオと言う名も偽名だった。

シャオは、本当の名を「シャナクル」と言う。

それはブリリア国の国王の名。

ローラシア大国との戦争で、シャナクルは追いつめられた。

ローラシア聖騎士団の命を懸けた攻撃に、その命を奪われそうになった。

シャナクルの魔力は底をつき、味方の援護も無い。

そこで最後の最後に、高度な魔法により、聖騎士団の結界を破り此処まで自らを飛ばし、逃げて来たのだ。

その魔法は、シャナクルを目にとらえる事のできないくらい早いスピードで、その場を離脱する魔法。おそらく攻撃していた側から見れば、シャナクルは、魔法の攻撃により消し飛んで死んだように見えたはずだ。

それほど高度な魔法。

しかしその反動に、一時的に自らの魔力を無くす。

そう、今シャナクルは魔法が使えない。

そして、シャナクルには敵が多い。

もし、ブリリア国王だとわかると、どうなるかわからない。

そういった事から、シャオは本当の事を隠していた。

食事を終えた3人は、その後も昨日の出来事を話し、シャオに色々と訪ねたが、シャオは歳以外の自分の事は話さなかった。

アキラ「光が森の方に見えて、飛んできたか。。。」

アイ「そうなの。太陽が2つになったかと思っちゃったよ。」

アキラ「それだと、東の方角から飛んできた事になるな。西の人ではなかったかな？」

アキラの言葉に、少し体を堅くしたシャオだったが、何もこたえなかった。

アキラ「それに昨日は黒い霧が濃かった。きっと東で大きな戦争でもあったんじゃないかな。」

アイ「それでやられた国の王子を逃がそうとして、魔法でこの地に飛ばしてたりして～」

冗談で言っていた親子の会話だったが、確信に近い話に、シャオはただ黙っているだけだった。

アイ「記憶喪失みたいだし、きっと頭も混乱してるんだよ。」

アキラ「そうだな。思い出したらおいおい話してもらえればいいから、しばらくは家にいなさい。」

アキラには、冗談で話していた会話が、どうも冗談ではないような気がしていた。

石碑

シャオがこのトキョウに来てから、1週間がたっていた。

1週間とは、太陽が出て沈むサイクルを1日とし、それを7つ合わせて1週間とする。

1週間で13回合わせて、1月。1月を4回、そして元旦と呼ばれる1日を合わせて1年としていた。

今日は新歴2006年1月2週の1日目。2006年1月8日とされる日。

アイとシャオは歳が同じ12歳であった事もあり、少し仲良くなっていた。

そして今日も、アイとシャオ、そしてアイの親友ミサをつれて、町へ出ている。

ミサ「アイ～そろそろ魔法学校に顔だしなよ～格好いい彼氏みつけてデートしていたい気持ちもわかるけどさあ～」

ミサはニヤニヤしながら、アイの顔をのぞき込んだ。

アイ「あっ！バカ！何言ってるのよこの人。お父さんからシャオの事頼まれてるだけだよ～」

アイは顔を赤くしながら、ミサを軽くたたいた。

アイ「でも、学校もそろそろ出ないとまずいよねえ～よし！これから行こうかな！」

アイはそう言って、シャオに体を向ける。

アイ「これから魔法学校を案内してあげるから、一緒に行こう？」

アイはシャオの手を取ると、半ば無理矢理シャオを引っ張る。

シャオ「わかったから、ひっぱらないでよ。」

こうして3人は、魔法学校へ足を向けた。

しばらく歩くと、小さい子供から、結構歳をとっている人までが集まっている広場に来た。

魔法学校といっても、行くも行かないも自由。

ただ、学校と言う名の広場で、魔法上級者が、ボランティアで人々に魔法を教えているだけの集まりだった。

学校に着いたアイは、顔見知りの仲間達に挨拶する。

アイ「シュータ先生！こんにちは！」

集まりの中でも、一際大きな魔力を操って剣を振るう者に声をかけた。

シュータ「アイ殿、お久しぶりでございます。」

振るっていた剣を止め、端正な顔立ちの男は、アイにこたえた。

ミサ「先生～つれてきましたよ～もう、アイったら彼氏にぞっこんで～」

ミサはそう言って、シャオを見た。

アイは恥ずかしそうに、上目遣いでミサをにらんだ。

シュータ「君は確か。。。森で倒れていた少年だね。」

シュータは少しずつシャオに話ながら近づいた。

シャオ「え？ああ、まあ、そうだけだ。。。」

シャオは興味なさそうに、どこを見てもなく空を見ながらこたえた。

シュータはシャオの生意気そうな対応を気にもとめず、「君も、魔法、勉強していくかね？」と訪ねたが、

シャオはただ「いい。」と応えて、アイの方に歩いていった。

シャオ「アイ！」

シャオがアイを呼ぶと、ミサとじゃれ合っていたアイは、小走りにシャオに近づいた。

アイ「どうしたの？一緒に勉強していく？」

そう言うアイにシャオは更に近づき、耳を貸せというように、手の平を上下させた。

そして小さな声でアイに尋ねた。

シャオ「アイ？あのおっさんが先生か？って事はこの国ではトップクラスの魔法使いだよな？」

小さな声で尋ねられ、アイも小さな声で応える。

アイ「そうだよ。たぶんお父さんの次くらいに凄い人だよ。」

それを聞いたシャオは少し鼻で笑った。

シャオ（西は魔法後進国が多いって聞いてたけど、これは思っていた以上だな。）

アイ「どうしたのシャオ？あの人のおかげで、この町が守られてるって行っても過言じゃないくらいだよ。」

シャオ「ふ～ん。」（こりゃ、もう少し魔力が回復すれば、此処は簡単に俺様のもんだな。）
そう言って黙っているシャオに、アイは話を続けた。

アイ「それに、シャオの怪我を治してくれたのもシュータ先生だよ。」

シャオ「げっ！マジ？」

シャオは何か驚いているようで、それでいて何か嫌そうだった。

シャオ「おまえじゃなかったのかよ。俺様でっきり。。。」

アイ「私だけじゃ無理だった。それでその後シュータ先生が治したんだよ。」

シャオ「。。。」

シャオは、シャナクルとして数多くの人を殺してきた。

しかしそれは、大儀を成す為には必要だと考えていたからだ。

たとえ親兄弟でも、刃向かう者は容赦なく殺してきた。

それなのにどういうわけか、今シャオは、今までの考えが漠然と間違いではなかったかという感覚を抱いていた。

理由はわからなかった。

シャオ「どうしたんだ俺？なんだか俺様らしくねえな。。。」

アイ「どうしたの？何か思いだしたとか？」

期待半分不安半分と言った顔で、アイが顔を近づけてくる。

シャオ「いや、なんだかつかれちゃった。今日は帰るは！」

アイ「あっ！うん。じゃあ私も帰るから。」

アイはそう言うと、シュータに一声かけ、そしてシャオと共に家に帰った。

次の日、シャオはアイに引っ張り出され、朝早くから神木の前に来ていた。

朝と言っても、まだ太陽も出ていない時間だ。

シャオ「すごえな。。。これが神木。。。」

シャオは、幼き頃より勉強は人一倍してきた。

それは世界を治める人間は、世界を知らなければならないと考えていたからだ。

その中で、神木についての知識も持っていた。

しかし実際見ると、それは予想以上の大きさであったのだ。

そして、僅かではあるが、魔力の存在も感じていた。

アイ「そりゃ、神様の木だからね。この木がある限り、世界は必ず平和に向かうんだって。」

アイは自分の自慢でもするように、神木の事を話した。

しかしアイの顔が急に曇る。

アイ「でも。。。今は駄目だね。。。平和なのはトキョウのまわりだけ。。。」

今にも泣き出しそうなアイの表情が、シャオの目に映った。

シャオ「でも、この戦いは無駄にはならないよ。きっと誰かが世界統一を果たして、そして平和が来る。」

シャオは確信から、力強い声でアイに言葉を投げた。

アイ「でも、たくさんの人々が死んで、死んで、その後に平和なんてあるのかな？大切な人々がいなくなって、憎しみがのこって。。。」

やや感情的になりかけたアイだったが、そこまで話すと俯いて口を噤んだ。

シャオ「人間は、バカな奴ばかりじゃない。バカがいなくなれば、きっと大丈夫だ。」

シャオのつぶやきに、アイが顔を上げ、今度は感情的にシャオに詰め寄る。

アイ「でも、私のお母さんはバカじゃないのに死んだんだよ！この戦争のせいで！それにたとえバカでも。。。」

アイの母は、トキョウの人間ではなかった。

名を「マリア」という。

トキョウは、地球上で一番大きな大陸、中央大陸の最東にあり、大海を挟んで東にあるのが、東の大陸である。

マリアは、東の大陸の生まれだった。

トキョウは、人類発祥の地という事もあり、いろいろなところから移り住む人々が多い。

人口約3000人の住人。

そのうち1000人は、移住者だった。

マリアもその内の1人。

この地を好み、この地に来たマリアは、当時王でもなんでも無かったアキラと恋に落ち、結婚した。

その後アイが生まれる頃、人々の要望で、アキラが王になった。

アキラとマリアは、それはもう人々の為に頑張った。

マリアは東の地出身でもあり、アキラ以上の魔法使いであった。

人々に、生活に必要な魔法、中でもこの寒い地で生きてゆくために役に立つ魔法を伝えた。

そんな毎日を送る中、所々しか無かった争いが、全世界規模で始まった。

そう、シャナクルがブリリア国王になった頃。

当然マリアの母国、東の大陸の中心からやや西にあるマジオルカ国も、戦いの地に含まれた。

それを聞いたマリアは、母国の親戚や友人の為に、母国に赴いた。

大切な人々の力になる為に。大切な人々を守る為に。

しかし小国だったマジオルカは、マリアが到着してまもなく、全てを失った。

マリアの付き人だけがこの地に戻って来たのが、半年ほど前。

マリアの死を聞かされたアイは、その日一日中泣いた。

結局自分に今できる事も無く、その日以来毎日神木にお祈りする事を始めたのだ。

アイの目は、潤んでいた。

いや、その出てくる涙は、ドンドンその量を増やしていた。

シャオはただ黙っていた。

アイ「東の。。。あの戦争が無ければ。。。」

アイのその言葉に、シャオは一瞬ドキとした。

そう、シャオの起こした戦争。

東の大陸の戦争となると、シャオの起こした戦争が関わっていると言っても過言ではなかった。

その後アイとシャオは黙ったまま、ただ神木に祈りを捧げた。

その時間は、いつもよりもはるかに長い時間となった。

2人が目を開けたのは、既に太陽がまぶしく感じる時間だった。

祈りながらも泣いていたアイだったが、顔にはもう涙はなかった。

アイ「帰ろう！」

アイがそう笑顔で言って町の方に歩き出すと、シャオも無言で立ち上がった。

その時シャオの目に、ある物が映った。

シャオ「あれ！何？」

シャオはその目に映る物、石碑を見たままアイに尋ねた。

振り返ったアイは、シャオが見るものにすぐに気づき、少し笑みを浮かべてこたえた。

アイ「ああ、それ。最初の人達が作った石碑だよ。何が書いてあるか、私には読めないけど。」
アイの言うとおり、石碑には何かが書かれていた。

今の言葉ではない文字で、今ではこの地で読めるものはいなかった。

アイ「なんでも平和の誓いが書かれてるって話だけど。」

アイの言葉を受け、シャオは独り言のようにしゃべり出す。

シャオ「平和の誓い。我々は戦争の愚かさを知っている。だから二度と戦争はしない。戦争は愚かな行為だ。バカな行為だ。。。」

シャオがそこまで言ったところで、アイが口をはさんでくる。

アイ「シャオ！読めるの！？」

アイの言葉に少し振り返り頷くと、更に次を読み始める。

シャオ「人を殺してはいけない。町を破壊してもいけない。森を焼いてもいけない。全ては我々人類の為。その想いを忘れない為に、ここにこの木が存在する。我が子孫達よ。この木を見て思い出してほしい。戦争の愚かさを。そして約束してほしい。人は人と争わない事を。何故なら君たちは皆、我々の息子であり娘であるのだから。」

シャオが読み終わるとアイは又、俯いて泣いていた。

シャオはただ、それを見ていた。

魔法

シャオがトキョウに来て、既に2週間が過ぎていた。

このところは、アイが学校で魔法を勉強し、それをシャオがただ見ているだけの日が続いていた。

朝のお祈りにシャオが同行したのは、あの日一回きりだった。

シャオは、自分が変わりそうで、怖くてアイの誘いを断っていた。

今日もシャオは、アイが魔法を使うところを、ただ黙って見ていた。

しかしどうにも成長しないアイを見ていて、苛立っていた。

その苛立ちがどうしても押さえられず、シャオはアイに声をかけた。

シャオ「おいアイ！おまえちっとも成長してねえ〜ぞ！」

木陰で木にもたれ、腕を頭の後ろでくんだまま、シャオは言った。

アイ「なによ〜これでも去年より少しはうまくなってるんだから〜」

ちょっと頬を膨らませ、シャオを見た。

シャオ「いや、そりゃ1年もやれば少しは成長するだろうけど、おまえならもっとできるはずだぞ。」

そう言うシャオの言葉に、少しほめられた感じがしたのか、アイは少し笑顔になった。

それでも少し棘のある喋りで、シャオに言い返す。

アイ「でもできないんだもん！なかなか難しいよねえ〜」

アイの言葉に、シャオはため息をつき、ゆっくりと立ち上がり、アイの方に歩いていった。

シャオ「俺が、少し教えてやろうか？たぶんおまえが今やってる事を続けるよりましだと思うから。」

シャオはこの2週間で、かなりの魔力を回復していた。

おそらくは、シュータやアキラ以上にはなっていた。

アイ「シャオ？もしかして結構魔法使いちゃったりするわけ？」

この2週間、シャオとアイはかなり話をしてきた。

石碑の文字が読めた事などからも、記憶が戻っているらしい事は、アイにはわかっていた。

それでも、これまで一度も魔法を使わなかったシャオに、魔法が使えるイメージは無かった。

シャオの事に関して、本人が話してくれる事を待っていた。

シャオ「おまえ仮にも、俺の命を救った魔法使いだろ？その程度なわけないじゃねえか。」

アイの質問には素直にはこたえず、アイの能力について話を続けた。

アイ「それじゃ、ちょっと教えてもらおうかなあ〜」

シャオの気持ちを感じたのか、笑顔でアイは応えた。

2人は学校から出ると、家の庭に向かった。

家と言っても、一応王様の家。

家と言うよりは屋敷と呼べる立派なものだ。

それでも他の国の王宮とくらべると、やはり家と呼ぶにふさわしい程度の物だった。

普通の家庭よりは広い、でもそれほど広くない庭に着くと、シャオは早速アイに魔法の事を話し始めた。

シャオ「アイ！おまえ剣を振るう時、なんで黒の魔力使ってるんだ？」

この世界の魔法には、2つの視点から、2つの魔法に分けられる。

よって合計4つに分けられる事になる。

1つは黒魔術と白魔術、1つは内魔法と外魔法だ。

これらを合わせて、内の黒魔術だとか、外の白魔術という風に分ける。

黒魔術と白魔術との違いは、黒の魔力を使うか、白の魔力を使うかによる。

黒の魔力とは、人間以外の生命エネルギー、その多くは草木から集められる生命エネルギーを黒の魔力と言う。

黒魔術は、周りにある木々や動物の数に干渉されるので、魔力が常に一定ではないが、上限が無い。要するに、どこまでも強力な魔法が可能になる。

そして白の魔力とは、人間の生命エネルギー、自分自身の生命エネルギーを、白の魔力と言う。

白魔術は黒魔術とは逆に安定しているが、自分の魔力の大きさでその力が決まる。

次に内魔法と外魔法の違いは、魔力を体内で使うか、それとも体外で使うかによる。

内魔法は、基本的に自分の能力をパワーアップする魔法である。

外魔法はそれ以外となる。

そして、人々は育ちや生まれた場所、血筋等で得手不得手が存在した。

アイ「だって、剣って人を攻撃する為の道具でしょ？攻撃は黒って、常識なんじゃないの？」
確かにアイの言う事は、この世界に概念として存在していた。

しかし、それが不得手な場合は、白を使うのも常識であり、更にはそれは攻撃魔法に対する概念でもあった。

ただ、この中央大陸は魔法後進であり、先の概念のみが存在していた。

シャオ「アイ。おまえは黒は苦手だろ？まあ、攻撃魔法自体、おまえには似合わないし、剣も然り。それでも護身の為に少しは剣も必要だ。傷つけるだけが剣じゃないって考えで、剣を白で使ってみるんだ。」

アイ「何？どういう事？」

アイは、シャオの言った言葉の意味を全く理解できず、素直にシャオに聞いた。

シャオ「アイは白、そして外でその魔力を操る事に優れていると思える。だからまず、白のオーラで自分の体と剣を包んでみな。」

オーラとは、目に見える魔力の事である。

白の魔力、黒の魔力と言われる所以は、そのオーラの色により分けられていた。

シャオの言葉に、アイは素直に言われたとおりにする。

シャオ「で、そのオーラで周りの空気と一緒に体を動かすイメージで、剣を振ってみな。」

アイは言われたとおりに、剣を頭上から斜め下に振りかざした。

すると今まででは考えられないスピードで、しかも剣を持っていないかのごとく軽く、剣が左足の横まで移動する。

アイ「ええ～！！何？剣なんて持ってない感じ。しかも早い！」

アイは驚きの表情で、信じられない思いを声にだした。

シャオはその表情を見て、少しニヤッと笑うと、庭にある大きな岩を指さした。

シャオ「じゃあ次は、今の感覚であの岩を斬りつける。その時、剣で岩を切るのではなく、岩を二つに分けるイメージで切ってみな。」

シャオの指さす岩は、それほど大きなものでは無かったが、この地でその岩を切る事のできる者は、おそらくアキラとシュータだけであろう物だった。

アイ「ええ～！！切れるわけじゃないじゃん！！お父さんでもなんとか切れるくらいの大きさだよ！」

アイも流石にシャオの言葉に反抗した。

シャオ「大丈夫だ。信じる気持ちをもって切れば、おまえなら軽く切れるよ。」

シャオの笑顔に、アイはなんとなく信じてみたくなった。

シャオの顔から目をそらし、岩の前までゆっくりと歩く。

目を閉じ、剣を頭の上に上げ、ゆっくりと白のオーラを纏う。

空気が張り付くように感じられる。

オーラが剣を輝かせる。

シャオ「いけ！」

シャオのかけ声を合図に、目を見開き、アイは剣を振り下ろした。

次の瞬間、剣は2つに分かれた岩を通り過ぎ、地面へと到達していた。

アイは啞然と口を開け、驚きで言葉を発する事が出来なかった。

シャオ「ほらな。やっぱ俺の勘は当たったな。アイは外の白魔法使いだと思ったんだよねえ～ははは～」

シャオは腕を頭の後ろで組んで笑った。

アイ「ええ～！！勘かい！！」

アイは自分のツッコミに、自分でもおかしくなり、シャオと一緒に笑った。

シャオ（まあ白の魔力による剣は、岩よりも人の方が切れるんだけどな。。。）

シャオは心の中の想いを、アイには伝えなかった。

アイには似合わない。何となくそんな事を考えていた。

その後もシャオは、アイに魔法の概念を教えた。

黒の魔法は、潜在魔力の少ない人間が、それを補う為にある魔法である概念。

黒の魔力より、白の魔力の方が強い事。

東の大国では、白の外魔術師は貴重な事。

剣よりも、魔術師として、そして回復や治癒、防御の魔法に向いている事。

そしてそれらの魔法を教えた。

戦争の始まり

シャオが魔法を教え始めてから、アイの魔法使いとしての資質は、日に日に開花していった。防御魔法なら、おそらくアキラの攻撃魔法をしのげるまでに、治癒なら、死んでさえいなければ、回復させるだけの魔法を操れるようになっていた。

アイには、元々それくらいの素質はあったと、シャオはアキラに話し、自分の力だけではないと言っていた。

それを聞いたアキラは、今後起こり得る惨事を想定し、雄志軍に魔法を教える事をシャオにお願いした。

トキョウには、正式な騎士団や魔法部隊は存在しない。

ただ町で、魔法や剣に優れている人々が、雄志で集まっているだけの雄志軍だけが存在した。

戦争をした事の無い国なので、それも当然だった。

ただ此処最近、かなり近くの国で戦争が行われ、流石に対策が迫られていた。

アイの父であるアキラのお願いに、シャオは断る事ができず、明日からと言う事で教える事を了解した。

日は変わり、いよいよシャオが雄志軍に魔法を教える日が来た。

この日は朝から屋敷があわただしかった。

アイがお祈りから帰る頃には、アキラは町に出かける準備を終え、正に出かけるところだった。

アイ「お父さん、今日は早いね。何かあったの？」

いつもなら、アキラがまだ寝ている時間で、アイは少し驚いたものの笑顔で尋ねた。

アキラ「ああ。今から少し出る。詳しくは帰ってから話す。そうそう、シャオ君には、今日の魔法講習は中止だと伝えてくれ。」

アキラがそういうと、アイは黙って頷き、直後アキラは急いで出かけて行った。

昼になると、アイはシャオと共に、いつものように魔法を操っていた。

アイの魔法技術は、日に日に上達を見せていた。

更には、その魔力も心なしか上昇しているようだった。

時々うっすらと出ている黒い霧が、太陽の光を霞ませる風景も、シャオにとって見慣れた景色となっていた。

しかしその寒さには、あまり慣れていないようで、見ているだけのシャオにとっては、かなり辛かった。

休憩に入ったアイと並んで、庭にある木のベンチに腰掛け、暖かいお茶を飲んでいた。

昔からの友達だったかのように、今日も些細な話をしている。

シャオも世界統一の事は、どこか頭の隅に追いやっているようだった。

そんな時だった。

ミサが血相を変えて庭に走り込んできた。

息も荒く、かなり走ってきたようだった。

ミサ「大変だよアイ！！」

そう言ったミサだったが、荒い息にその後の言葉を詰まらせた。

アイ「どうしたの？そんな血相変えて～」

アイはいつもミサと話す時と同じように、笑顔で尋ねた。

しかしミサの顔は変わらず、深刻な何かを伝えるようだった。

シャオ「まあ、落ち着いて。何かあったの？」

シャオの問いに、ミサはやや息を整えると大きな声で叫んだ。

ミサ「南のインドアナ国の魔法部隊が攻めてきたんだよ～！！」

ミサの目から涙があふれ、その声はかかれていた。

アイ「え？」

ミサの言葉を聞いたアイの顔には、もう笑顔は無かった。啞然とした顔で、ただミサを見つめた。

ミサ「今、おじさんとシュータ先生が話をしてるけど、このままだとやばいよ〜！」

その言葉を聞いて、シャオは立ち上がった。

争いなど日常茶飯事な毎日を送っていたシャオだが、何か凄くいやな気持ちになった。

そして、助けなければとも思った。

シャオ「どこ？案内して！！アイも行くよ！」

シャオの言葉に、我に返ったのか、アイもしっかりした目でシャオに応えた。

ミサを先頭に、町の方に走った。

既に多く走っていたミサだったが、それでもかなりのスピードで町中をゆく。

走ってる時間は、とにかく長い時間を感じる。

早く、早く、みんな力の限り走った。

ほどなくすると、町の中央広場まで来た。

人々が集まっている。

よく見ると、人々は広場の中心を囲うように周りにいる。

その中心には、アキラとシュータ、そして見たことの無い人々が数十人、アキラ達と向かい合うように存在した。

ようやく広場についたシャオ達は、アキラ達に近づいて行く。

シャオはアキラ達の斜め後ろに立ち、向かい合う人々をにらんだ。

インディアの者「子供？子供を呼んでどうするつもりだ？ははは〜」

インディアの部隊長らしき人物が、そう言って笑った。

アキラ「おまえ達、どうして此処に。下がっていなさい。此処は危険だ。」

アキラは後ろを振り返らず、少し強い口調でアイ達に言う。

しかし、アイもシャオもその場を動かなかった。

部隊長「おとなしく我が国に下れば、別に何が変わるわけではない。まあ、少し金と人を出してもらっただけじゃねえか。」

ニヤニヤとした顔で、部隊長らしき男は話を続ける。

アキラ「此処は人類発祥の地。戦争をするために、人と金を出すことはできない。」

アキラは男をにらみつけたまま、はっきりとそうこたえた。

部隊長「なるべく実力行使はしたくなかったが、致し方ない。とりあえずおまえさんには死んでもらうかな。」

部隊長らしき男がそう言うと、後ろの者達に、黒の魔力があらゆる所から集まってくる。

町の木々からの魔力を使った、攻撃魔法がすぐに予想できた。

シャオ「アイ！！魔法防御を前方ミドルレンジに展開！！」

シャオのその声に、アイはとっさに、そしていつも練習していたとおりに、白の魔力を前方に放つ。

白い光の固まりが、アイからアキラの前に移動する。

それと時を同じくして、数十人の周りにあった黒の魔力がこちら側に移動してきた。

黒のエネルギーブラストと言う魔法だ。

魔力をそのままターゲットにぶつけ、人なら大きなダメージをくらう魔法だ。

それに流石に数十人からなるこの魔法をくらえば、普通ならひとたまりもない。

その魔力の固まりが、更にこちらに近づいてくる。

そしてそれがアキラの目の前に近づいたとき、その前に白の魔法防御が展開され、全ての黒を遮断した。

遮断された黒の魔力は、何事も無かったかのように、はじけて消えた。

シャオ「ふう。。。間に合ったな。」

シャオはそう言いながら、アキラの横に立った。

部隊長「なんだ？何が起こったんだ？もう一度だ！やれ！！」
再度放たれるエネルギーブラストだが、先ほどと同じく、こちらには届かない。

シャオ「そんなショボイ魔法が、届くかよ。おいおっさん！これは宣戦布告ととらえていいんだよな。」

そう言って、シャオは部隊長を笑顔でにらむ。

部隊長「だったらなんだ？少しくらい防御魔法ができて、問題ない。だったら別の手段をとるまでだ！」

少し後ずさりながら、部隊長は声を上げた。

すると後ろにいた数十人が、左右に分かれようと動き出す。

シャオ「魔矢！」

しかし分かれようと動き出した部隊数十人のひとりひとりに、シャオから放たれた魔法の矢が襲いかかる。

その数はひと目では数え切れない数だった。

魔法の矢、マジックミサイルと呼ばれるその魔法は、対象を絶対に外さないと言われる魔法だが、威力は最低レベルだ。

しかし術者の魔力によっては、その数は増え、威力も上がる。

シャオの魔力はまだ完全では無かったが、今のシャオの放つ矢でも、普通の人なら軽く殺傷するだけの威力があった。

そしてそれよりも驚きは、魔法を発動させるまでの時間。

ノータイムで魔法を発動させたシャオに、その場にいた全ての人々は驚いた。

そして次の瞬間には、そこにいた全てのインディアの者が地に伏していた。

これだけの魔法が使えれば、先ほどの相手の攻撃の再、攻撃させる前に相手を倒すことは可能だった。

ただそれをしていたら、魔力の激突による爆発がおこっていた可能性もある。

何故爆発を回避しようと思ったのか、シャオにはわからなかった。

いや、わからないフリをした。

シャオ（ちょっとアイの魔法を試してみたかったしな。）

シャオはそう考え、自分を納得させた。

マジックミサイルは、全て相手の心臓を貫き、生きている人は1人もいなかった。

二人の刺客

家に帰ったシャオとアイは、感情的に言葉をぶつけ合っていた。

シャオ「あそこでやらなければ、こっちがやられていただらう？」

アイ「でも、みんな殺す事ないじゃない！！人を殺す事はとにかくダメなの！！」

シャオ「だったらどうすりゃいいんだよ！！」

シャオは刃向かう者は全て排除する考えを持っている。

事実今まではそうしてきた。

アイは人の命を大切と考え、そしてどんな理由があっても殺す事を否定していた。

2人の思いは一致するところが無かった。

しかしアイの熱意に、最後はシャオが折れるところで話は終わった。

シャオ「ああもう。わかったよ。だけどな。自分の命がやばいのに、それを守る事はできねえからな！」

アイの瞳に浮かぶ涙を見ては、シャオも約束せずにはいられなかった。

シャオ（全く。ああ～俺どうしちまったんだ？くそっ！！）

王であったシャオは、自分に刃向かう1人の言葉に、耳を傾ける事は今まで無かった。

おそらく王であった1ヶ月前なら、シャオはアイを殺していただらう。

自分でもそうしていただろう事は理解していた。

しかしそれが出来なかった。

いや、そうする事はすでに、シャオの選択肢には存在しなかった。

その頃、大海の向こう東の大陸では、シャナクルの側近でナンバー2だったローランドが、ブリリア国王となっていた。

正確には、シャナクルが攻略したローラシア大国の国王となり、ブリリア国を吸収した形になっていた。

流石に自軍に多大な被害の出た戦争であったため、近隣国攻略も中断させていた。

ローランドは、戦力を整える為のしばしの休養の中、ローラシアの街のはずれ、湖の辺りを視察していた。

ローランド「この木はやけに大きな木ですね。神木？ですか？」

一見女性を思わせる長い黒髪、歳は20代後半といったところだろう。

その表情は優しさを感じさせる。

神木らしき大きな木の前で立ち止まったローランドは、その優しい顔に笑みを浮かべて案内の者に尋ねた。

木の大きさは、トキョウの神木に比べると、遙かに小さい物であったが、それでも周りの木と比べると倍以上の大きさだった。

案内の者「はい。この東の大陸に人が渡って来た際、此処に植えたと言われております。それを知る者は少ないですが。」

そう言いながら、木の脇の石碑を指さした。

石碑には、「平和を誓う」とだけ書かれていた。

ローランド「平和を誓う、か。。。早く平和な世界にしたいものだな。」

そう言ってローランドは、石碑に手をあて目をとじた。

しばらく何か考えていたのか、ローランドはその場を動かなかった。

案内の者は、だまったままその場に立っていた。

ローランドは感じていた。

神木から、微量ではあるが魔力があふれ出ている事を。

そしてその魔力の流れを感じていた。

ローランド（これは少し調べてみる必要があるようですね。）

少し太陽の位置が西に傾いた頃、ローランドはようやく目を開け、案内の者を見た。

ローランド「そろそろ戻りましょう。」

ローランドはそう言って、案内の者と共に、ローラシアの宮殿へと歩き出した。

インディア国の者達が来た日から、シャオは雄志軍とアイ、それにミサに魔法を教えていた。

そしてその日からまもなく、インディア国がチャイルド国に占領された話が入ってきていた。

このトキョウが、大きな戦場になるかもしれない観測は、もう現実問題として深刻だった。

インディア国がトキョウを傘下に治めたかったのも、チャイルド国の驚異からだった。

チャイルド国は、中央大陸の東では、一番の大国で、軍事力はかなりのものだった。

もちろん、東の大陸の国々と比べると弱小に属するが、トキョウと比べると遙かに強大だった。

トキョウと隣接する国は、現在チャイルド国とタイナン国の2つだった。

南西にチャイルド国、南東にタイナン国。

実質は、タイナン国は国と呼べるほどのものではなく、港町と言った感じだった。

タイナン国は、中央大陸最東にあり、東の大陸とを海でつないでいた。

時々、東の大陸との船が往復し、僅かな人々が行き来している。

ただどちらかと言うと、東の大陸へ向かう人々はいるものの、その逆はまずいなかった。

それがここ数週間は、中央大陸にやってくる人々の姿も増えてきていた。

そのせいか、東の大陸の情報も、僅かではあるが聞こえてきていた。

ブリリア国が無くなった事、シャナクル王が死んだと言われている事も、シャオの耳に入っていた。

シャオ（俺様の帰る場所は無いて事か。。。）

そうは思ったが、シャオは既に戻る気は無かった。

なぜだか放っておけない。

トキョウを放っておけない。

アイを放っておけない。

シャオ（人を殺さないって、アイと約束したしな。戻っても何もできない。）

とりあえず今は、東の大陸も落ち着いている。

それよりも此処トキョウの方が緊迫している。

だからとりあえず今は、此処で出来ることをやろうと思った。

シャオが魔法を教え始めてから1週間、雄志軍はある程度の形にはなってきた。

今まで間違った知識でやっていた事を、ただ方向修正するだけだったが、効果は靦面だった。

そこでシャオは驚いたのだが、東の大陸では圧倒的少数だった白魔法を得意とする者。

それがこの地では、全てがそうであった事だ。

白の魔力は、自分の中に元々あるものなので、扱いやすい事もみんなの成長の速度に繋がっていた。

雄志軍が形になって来たことで、軍のリーダーとしてシュータが選ばれていた。

この地では、唯一黒を得意とする人間だった。

雄志軍は、総勢30人程度、その上にシュータ、そしてアキラ。

形にはなったとは言え、その規模はチャイルド国の軍に比べても、かなり規模が小さい。

アキラとしては、抑止力になってくれればと思っていたが、その想いには到底足りなかった。

更に1週間が過ぎた。

連日各国の動きが、情報として入ってきている。

タイナン国も既にチャイルド国傘下に入ったと伝わってきた。

その際、タイナン国はわずか2人の使い手によって、攻略された事が人々を驚かせていた。

それも子供だと言うから、更にその驚きは大きかった。

今日もアイは、神木に祈りを捧げていた。

チャイルド国よりの使いが来たのは昨日、傘下に入るようにとの要請を伝えにきていた。

アキラがそれを断った事で、全面对決の日がすぐそこである事は必至。

そんな中でも、いや、そんな中だからこそ、アイはいつにもまして祈りを捧げていた。

太陽が森の方から頭を出す頃、アイはようやく目をあけた。

立ち上がり神木にふれる。

なんとなく手から力が入り込んでくる感じがして、心地良い。

シャオがこの地に来てから既に1ヶ月。

1年でもっとも寒い時期は過ぎていた。

と言っても、四季の変化はほとんどない地。

最高に寒い日々が、普通に寒い日々が変わる程度。

そんな空気を感じながら、アイは神木から手を離れた。

その時だった。

後ろから人の気配がして、ハッと後ろを振り返った。

アサミ「これが神木ね。あっ！私アサミっての。よろしく！」

振り返ったそこには、アサミと名乗る短髪で元気そうな少女と、そっくりで、でもおとなしそうな髪の長い少女が立っていた。

アサリ「わたくしはアサリと申します。よろしく申し上げます。」

アサミとは対照的な物言いで、アサリはニッコリとほほえんだ。

アイ「えっと。私はアイ。よ、よろしく。」

突然挨拶されたアイはビックリしたものの、とりあえず挨拶を返した。

それに2人の少女は、このトキョウでは見ない顔だった。

背丈はアイよりも小さく、少し年下に感じる2人だった。

アサミ「これが神木なんですよ？おっきいねえ～遠くからは見ていたけど、すご～い！！超感動！！」

アサミは胸の前で手のひらを組んで、目を輝かせた。

アイ「うん。最初の人たちが植えたんだって。2006年っていうのも、この木が植えられた時から数えられてるらしいよ。」

アイは聞かれてもいない事までも、少し自慢するように話した。

なんとなく自分よりも年下に感じる少女達に、自然と言葉は柔らかくなる。

それでも見ない顔がそこにある不自然さから、アイは少女達に尋ねた。

アイ「あなた達、この辺りでは見ない顔だけど、トキョウの人間じゃないよね？」

いつも町をウロウロしていたアイは、トキョウの人々の顔は、全て知っていた。

2人の少女が、トキョウの人間では無いことはわかっていたが、あえて尋ねた。

アサミ「あっ！私達？ちょっとチャイルドから偵察にね。」

そこまで話したアサミの言葉を遮るように、アサリが口をだす。

アサリ「えっとわたくし達、インディアナの街に住んでいるんです。でもチャイルド国に侵攻されて、それで此処まで逃げてきたんです。」

たたみかけるようにアサリは言った。

アサミ「そうそう、そんな感じ？それで此処は住みやすい所かなあ～って偵察にきたんだよ。」

アサミも無理に作ったような笑顔をアイに向けた。

アイは、少し気持ちの中で腑に落ちないところもあったが、その言葉を信じる事にした。

アイ「そうなんだ。辛かったでしょ？。。。」

少し悲しい顔で、2人を見た。

とりあえず2人には行く場所が無いと判断したアイは、2人を家に連れ帰る事にした。

2人も特に断る事はせず、アイについていった。

家につくと、少女達は少し驚いているようだった。

玄関より少し離れた門の所で立ちつくしている。

それはそうだ。

ついた先は、王の屋敷だったからだ。

アイ「家のおとうさん、一応この国の王って事になってるんだ～！でも気にしないで上がってね。王って感じじゃないから。」

アイはそう言って、2人を中へと促した。

すると丁度出かけるところだったのか、アキラが中から出てきた。

アキラ「おうアイ！今日は遅かったな。わしは今から出かけるが。。。」

そこまで話したアキラは、アイの少し後ろ、門の前に立つ、2人の少女に気がついた。

2人の少女は、笑顔でアキラを見つめた。

しかし次の瞬間、辺りの空気が張りつめた。

少女の1人アサミが、持っていた荷物から短い剣を取り出し、構えている。

そしてそこには黒の魔力が集まっていた。

振り返ったアイが見た少女達は、先ほどと全く違った雰囲気をかもし出す。

アサリの体にも白のオーラが包む。

明らかに私たちに向けられる殺意。

アイはとっさに魔法障壁を試みる。

しかしそれよりも早く、アサミはアイを通り過ぎ、一気にアキラに斬りかかった。

アキラは帯刀している剣を抜き防戦する。

アキラの剣と、アサミの短剣がぶつかる。

魔力がぶつかり、大きな光が辺りを照らした。

その光を目指して、今度はアサリの方から、白い魔力の固まりが飛んでゆく。

その大きさは、アイも巻き込む大きさで、アイとアキラに向かった。

エネルギーブラストは、アイとアキラを飲み込もうとする。

アサミは既にその場から離れていた。

日頃からのコンビネーションなのか。

その動きは早い。

アサリ「終わりです。」

アサミ「今回は楽だったね！！」

2人は目を合わせてお互いを讃えた。

だがその時だった。

白の魔力がアイとアキラにふれる寸前、その魔力は消失した。

何事もなかったような静寂が辺りを包む。

シャオ「何をやってるかと思えば。。。」

頭をかきながら、今起きましたと言わんばかりの眠そうな顔で、シャオが出てきた。

アサミ「何？どうしたの？」

アサリ「驚きですね。わたくしの魔法を無効化するなんて。凄いですね。」

アサミはビックリした顔で、アサリは笑顔を崩さず、驚きの言葉を述べた。

アサミ「アサリ～今何が起きたのか説明してくれる？」

驚きの表情そのままに、アサミはアサリに尋ねた。

アサリ「どうやらあちらの方が、わたくしの魔法に対して無効化魔法をぶつけたものだと考えられますが。。。いかがですか？」

途中までアサミに話した後、最後にはシャオを見てそう言った。

シャオは否定も肯定もせず、そのまま歩いてアイの前にでて2人の少女を見た。

アイ「この子達。今朝神木の所で会って。行くところがないみたいだからつれてきたんだけど。。。」

アイはまだ今の状況を受け入れられていなかったが、なんとかシャオにそれだけ説明した。

アキラ「君たちは何者だね？それだけの魔力、ただの子供では無いようだし、私の命を絶とうとしたようだが。」

アキラは冷静に、そして少し強い口調で2人に言葉を投げかける。

それを聞いた2人は、同じような顔に、同じような笑みを浮かべてこたえた。

アサミ「私たち、チャイルドの暗殺部隊なんだ〜」

アサリ「それですね。この国の王の命を奪うよう命令されましてですね。お伺いしたしだいです。」

2人はそんな言葉も、ごく普通の会話をするように言った。

アイ「こんな子供が。。。」

アイはショックだった。自分よりも幼い少女達が、戦争の道具として使われている。

それだけではない。

それが当たり前だと言わんばかりの2人の言葉に、アイはどうしようもない憤りを感じた。

アサミ「そりゃ私たちまだ10歳だけど、ほとんど生まれた時から鍛えられてるしね。」

アサリ「そうですね。大人でも私たち以上の使い手は、さほどおられなかったように思いますよ。」

そろそろ話は終わりだと言わんばかりに、アサミは剣を握る手に力を入れた。

アサリはアサミの後ろに立ち、白のオーラを纏い始めた。

シャオ「アイ！おまえはアキラと一緒にさがってな。魔法障壁を展開して、とりあえず守りに集中！オッケー？」

シャオはそう言いながら、何をするでもなく、ただ2人の少女を見ていた。

アイはシャオの言葉に頷くと、アキラと共に少し下がった。

アサミ「とりあえず、あんたを殺らないといけないみたいね。」

そう言うと短剣を正面に構えた。

それでもシャオはそのまま動かない。

アサミとアサリの魔力はその間も高まる。

アサミの体を黒のオーラが包む。

アサリも大きな白のオーラを纏う。

シャオ（黒の剣士と白の魔術師か。。。それにしても、魔力の流れに無駄が多いな。）

シャオは、フツと笑みを漏らした。

それを合図に、アサミがシャオに斬りかかった。

アサミ「何余裕みせてんのよ〜！！」

シャオはチラッとアサミを見ると、そちらに手をかざす。

まだシャオからは魔力は感じられない。

アサミの剣がシャオに近づく。

誰の目にも、もう回避は不可能だ。

終わりだ、アサミはそう思った。

しかし次の瞬間、シャオとアサミの間で爆発が起こる。

剣がシャオにふれるかふれないかのところで、その剣とともに、アサミは吹き飛ばされていた。

その体はアサリの方へと向かい、直後2人の少女は絡み合って倒れていた。

シャオ「遅い。でもおっかしいなあ〜もっと手加減したつもりだったのに。。。」

シャオの魔力は、既に回復していた。

それだけではない。

理由はわからなかったが、その魔力は以前よりも大きくなっていった。

シャオ（死線からの帰還で、魔力アップしたのか？）

倒れているアサミは、爆発によりかなりのダメージを受け、気を失っていた。

体じゅうの傷から、血が流れ出す。

なんとか立ち上がったアサリは、アサミに声をかけた。

アサリ「アサミ！大丈夫ですか？しっかりしてください！」

声をかけても反応しないアサミを見て、アサリの顔は今日始めて崩れた。

振り返りシャオをにらみつける。

その瞳には、少し光るものがあった。

アサリ「許しません！」

そう言うとアサリは、白の魔力を手のひらに集中させる。

しかしその光はすぐに消えてゆく。

いつの間にかシャオに後ろをとられ、魔力のコントロールを押しえつけられていた。

魔術発動前の無効化といった感じだった。

小さなナイフを首もとに突きつけ、シャオは言った。

シャオ「あんたらに勝ち目無いよ。さっさと降参しな。」

鋭い目で、アサリを見た。

アサリもシャオをにらみかえした。

シャオ「おいアイ！ちょっとそっちのがやばそうだ。このままだと俺そいつ殺しちまった事になるんじゃね？少し回復魔法でもかけてやれ！」

シャオの言葉に、アイは「うん！」と元気良く言って、アサミに駆け寄った。

その行動に、アサリは自分たちの負けを認めたのか、体の力が抜けその場に膝をついた。

アサリ「どうして？」

もう、アサリが何かする様子も殺気も無かった。

アサリ「どうしてわたくし達を殺さないのですか？あなた方を殺そうとしたのに。それに死にそうなわたくしの妹を助けようとしている。。。」

シャオ「そんなのしらねえ。あいつに聞いてくれ。」

シャオはそう応えると、ナイフを収めながらアイの方を見た。

しばらくすると、アイの魔法により回復したアサミが、意識を取り戻した。

すぐにシャオに襲いかかろうとしたが、それをアサリが止めた。

アサリ「アサミ！もう終わりよ。わたくし達の負けです。」

アサリがそう言うと、アサミは動きを止めた。

アサミ「どういうこと？」

何がなんだかわからないといった感じのアサミだったが、素直にそれに従った。

太陽が、かなり高くまで上った頃、全てを理解したアサミと共に、アサリは屋敷内から出ていこうと歩き出す。

アサリの話によれば、任務に失敗した自分たちは、チャイルド国にはもう戻れないという事だった。

それで、行くあてなく歩き出していた。

そんな2人に、アイは声をかけた。

アイ「行くあてないんだったら、家にいたら？」

アイの口から、そこにいる全てが信じられないと感じる台詞が発せられた。

シャオ「おい！」

アサミ「え？」

しばらくみんな呆然とした。

アサリ「わたくし達は、あなた方を先ほどまで殺そうとしていたのですよ。それにこれからだ

って。。。」

アサリの言う事ももっともだ。

家においていたら、いつ寝首をかかれても不思議ではない。

アイ「でも、もう殺すつもり無いんだよね？だったら良いじゃない。」

アイは満面の笑顔で、2人の少女を見た。

シャオ「おま、わかってんのか？ええ？」

シャオも驚きで言葉が出てこない。

アキラ「私は娘を信じている。アイがそういうなら、わしはかまわんが。」

アキラは、やれやれといった表情だったが、少し笑みを浮かべていた。

2人の少女は、顔を見合わせて、次の瞬間アイに抱きついていていた。

その表情は、年相応の無邪気な顔だった。

目には少し涙が浮かんでいた。

シャオ（やれやれ。とりあえず2人の部屋は、俺のとなりにするようにしておくか。。。それと、国境警備も強化しないとな。）

シャオは苦笑いを浮かべて、ただアイの顔をみていた。

その表情はとても嬉しそうだった。

修行

アサリとアサミに関しては特に問題も無く、平穏な日々が続いていた。

おそらくアサリとアサミの帰還を待っているのだろうか。

チャイルド国にも動きは無かった。

雄志軍で国境近辺を注視していたが、特に何も起こらない。

2人の少女もすっかりアイになつたようで、いつもアイの後ろにひっついていた。

雄志軍が国境にいるため、今は屋敷の庭で魔法の修行をしていた。

メンバーはアイとミサ、そして2人の少女だった。

シャオ「アサリ！！アサミ！！おまえ達のコンビネーションはなかなか凄いが、どうしてアサリが魔術師でアサミが剣士なんだ？」

シャオの疑問。

それは、ふたりのクラスが、どうしても逆に感じられたのだ。

シャオ「俺様を見たところ、アサリは白を内で使う事に優れている。外でもいいが、やっぱり内だ。それは剣士に向いている。魔力もかなり高いし、体の強化が一番ロスが少ない。そしてアサミ。黒を外で使うなら、剣より魔法だ。かなり使いこなせてはいるが、本来黒は、体のコントロールには向いていない。せめて内で使えれば別だけどな。」

シャオはそう言うと、その考え方、概念を2人に話した。

アイにも、「シャオの言うとおりにやってみなよ。」と言われ、とりあえず試してみた。

するとそれはピタリと当たっていたようで、2人の魔力は格段にパワーアップした。

「凄い。。。」みんな口々にそう呟いた。

そのパワーは、シャオを除いて、今までに見たことの無いような大きさだった。

そう、実は2人のクラスは、本人達がなんとなく決めたものだった。

いつも元気で動き回っていたアサミは、剣士が向いていると勝手に思っていた。

大人しく、そして魔力の大きかったアサリは、やはり魔法使いだと勝手に考えた。

アサミ「うわ～すごい～試してみたい～！！」

アサミは今まで感じたことの無い魔力に、それを使ってみたいと訴えた。

シャオ「あ～じゃあ、アイの魔法防御に向けて打ってみるか？」

シャオがそう言うと、「うん！」とアサミは大きく頷いた。

シャオはアイのそばに行き、アイに魔法防御するよう促した。

まもなくアイの前に、魔法防御が展開される。

一応もしもの為に、シャオもアイの横で準備した。

シャオ「よしいいぞ。打ってみろ！」

その声に、今か今かと待ちわびたアサミは、すぐにそちらにエネルギーブラストを放った。

その反応は、シャオほどではないにしても、かなりのスピードだった。

剣でスピードがかなり鍛えられていたようだ。

黒の魔力は、アイの魔法防御にぶつかった。

それでもその魔力を失わず、そこにとどまる。

かなりの威力だ。

以前インディア国の人達によるエネルギーブラストよりも、比較にならないくらい強い魔力。

その威力に、アイの魔力が押され始める。

アイもそれに対して、更に魔力を重ねた。

しばらくして、ようやく黒の魔力は消失した。

かなり成長を続けていたアイでも、かなり疲れていた。

でもシャオは、アサミの魔法よりも、アイの成長に驚いていた。

シャオ「凄い。。。」

その言葉は、みんなアサミへの言葉だととらえていた。

アイ「ホントに凄いよアサミちゃん！」

アサリ「凄いわアサミ。わたくしの魔法など、足下にも及ばないわ。」

ミサ「でもアイも凄いよねえ～余裕は無かったけど。私だけなんか取り残されてる感じ～」

流石に、普段アイと行動を共にしてきたミサは、アイの成長にも驚いていた。

そして自分だけが取り残されているような感覚に、少し寂しさも見えた。

そんなミサに、シャオは声をかけた。

シャオ「ミサは白を内で使うのが一番合ってる。でも、剣は全く合っていない。だから白を外で使う白魔術師の修行をしているけど。。。でも魔力も特に大きくない。それらを考えると、黒の魔術師になるのが本当は一番良いんだ。黒は魔力を補えるからね。少しやってみるか？」

ちょっと躊躇したミサだったが、「じゃあ、ちょっと試しにやってみようかなあ～」と、控えめに言ってこたえた。

しばらくはミサに付きっきりで、ミサにああだこうだと言っていたシャオだったが、大改革と言える結果は望めなかった。

それでもミサ自身、今までで一番しっくりくる感覚に、しばらく続ける事を決意した。

この日は、なにやらみんなやる気が大きかったようで、太陽が沈むまで続けた。

大戦の初動

アサリとアサミが、すっかりトキョウに馴染んで来た頃、チャイルド国の動きがあわただしくなってきた。

チャイルド国の西に位置するホンコール国が、その南に有る大国、カンセイ帝国との争いにより、その名を消していたからだ。

カンセイ帝国とチャイルド国が隣接する事になり、両者の争いは近い未来に起こり得るだろう。

一刻も早くチャイルド国は、トキョウを傘下に治めたいと考えていた。

更には、東の大陸からの移民が、チャイルド国の軍事力をアップさせていた事で、チャイルド国が好戦的になっていた。

そしてこの日、トキョウ最南端国境近辺に、数十人の使い手が集まっていた。

東の大陸より渡ってきた、自称大魔法使いの3人、「バレット」「ブルータス」「グーズリー」も含まれていた。

＊グーズリー＊「俺達は、あのブリリア国で無敵トリオと言われ、ブリリア国をリードしてきたんだぜ。」

＊バレット＊「そうだな。俺達にかかれば、こんな国、攻略に1ヶ月と必要ない。」

＊ブルータス＊「ブリリア国も、我々がいなくなって、すぐに滅亡だ。我々の力がわかるというもの。。。」

3人はそれぞれ、自分たちの自慢話をすると、チャイルド国の使い手達は、頼もしい3人に頷いた。一方トキョウの国境警備をした雄志軍の面々は、既にその動きをとらえており、一報はアキラに伝わっていた。

そしてアキラ、シュータと共に、シャオ、アイ、アサリ、アサミは、そちらに向かっていた。

トキョウ国の町は、国境に近く、さほど時間のかかる距離では無い。

ほどなくして6人は、雄志軍と合流した。

チャイルドの者達は、まだその場を動く気配はなかった。

あちらは、まだこちらに気づいてはいないようだ。

＊シャオ＊「どうするんだ？アキラ？」

シャオは、軽くピクニックにでも来てる感じで、気楽にアキラに尋ねた。

＊アキラ＊「うむ。とりあえずこちらの体制は整った。無駄かもしれないが、話をしてみるか。。。」

アキラはそう言うと、シャオ達を見回した。

＊アキラ＊「アイと雄志軍の方々は、ここで待機しておいてください。」

その言葉に、ちょっと不満があるようなアイだったが、大人しくそれに従った。

他の面々は、ゆっくりとチャイルド国の者達に近づいた。

かなり近づいたところで、相手もこちらに気がついたようだ。

ゆっくりと近づいてくる。

その距離は今までの倍の早さで縮まり、今、普通に話しても声の届く距離になった。

＊アキラ＊「私はトキョウの長、アキラだ。いったいどういった理由で、この国境に来ているのかな？」

アキラは相手を見て、既にその理由はわかっていたが、あえて尋ねた。

＊バレット＊「我々は、チャイルド国の精鋭部隊で、私が部隊長のバレットだ！」

バレットは、自分に酔っているかのごとく、さも偉そうに応えた。

＊ブルータス＊「でだ。トキョウのアキラ殿、チャイルドの傘下に入るつもりはないかとお尋ねしたい。」

少しすかした感じで、斜に構え腕を組んで、ブルータスが用件を言う。

グーズリー「ああ、力づくでもかまわんぜ。まあ貴様らに、勝てる確率など1%もないがな。」
グーズリーからは、今すぐ戦いをおっぱじめたい気持ちが、ビンビンと感じられた。

アキラ「我々は、そちらの軍門に下る考えは無い。戦いもできれば回避したい。」
3人の言葉に、冷静にアキラは応じた。

グーズリー「戦いたく無いだあ？そりゃ我ら3人は、東の大陸、ブリリア国の精鋭だった3人だ。やって勝てるはずもないからな。ははは〜」

グーズリーの言葉に、トキョウの面々はみな顔を引き締めた。
もしそれが本当なら、シャオはともかく、他の面子では勝負にならないのは明確だ。
力なら、アサリとアサミなら良い線はいくだろうが、それでも勝てそうに無い。
しかし次の瞬間、シャオは笑っていた。

シャオ「くっw」（俺、あんな奴らしらねえ〜し。たぶんこっちに来て、調子に乗ってるタダのバカだな。ありゃ。）

シャオだけは、既に相手の力量を見抜いていた。

シャオ（それでもまあ、アキラやシュータレベルは有るだろう。こっちじゃ貴重な戦力か。。。）

シャオは、チャイルドの面々に背を向け後ろに歩き出した。

アサミ「どうしたのシャオ？」

自分の横を通って下がるシャオに疑問を抱き、アサミはシャオに声をかける。
それでもシャオは足を止める事なく、後ろ手に手を振って、「アサリとアサミに任せる！おまえらだけで十分だ！ああ、殺すなよ！」

そう言うと、後ろに有った木にもたれて座り、腕を頭の後ろで組んだ。

その行為と言葉に腹を立てたのか、グーズリーがほえた。

グーズリー「なんだとキサマ！！」

その言葉と同時に、グーズリーの手には黒の魔力が集まる。

合わせて、バレットとブルータスも続いた。

後ろで見ていたチャイルドの面々は、とりあえずは静観の構えだ。

その中の1人が、アサリとアサミの存在に気がついていた。

名を「リュウ」と言う。

リュウは一応この部隊の長であり、黒魔術のレベルもそこそこ高い。

リュウ（あいつら。裏切っていたのか。しかしまあ、ここで死ぬ運命だ。でも。。。）

リュウは少し後ろを振り返り、1人に声をかけた。

それを聞いたその者は、ゆっくりと下がり、そして素早く死角からこの場を去った。

シャオだけはその行動に気がついていたが、別に気にも止めなかった。

グーズリー「死にさせえ〜」

その言葉と同時に、グーズリーの魔力は強力な電気を起こし、こちら側に向かってきた。

シャオ（おっ！ライトニングか。）

ライトニング。

この魔法は、魔力により大気に潜む風の因子を操作して、雷を作り出す。

風の因子を説明すると長くなるが、ようは電気が起きる要因をさす。

その威力は、外因に影響を受けるものの、エネルギーブラストよりも強力だ。

アサミが素早くマジックシールドを発動する。

そして簡単にライトニングを退けた。

グーズリー「なんだと！」

グーズリーの驚きの声に、バレットがファイヤーボール、ブルータスがアイスサンダーを発動した。

シャオ（バラエティーにとんでるねえ〜ファイヤに、コールドか。。。）

ファイヤーボール。

略してファイヤ。

魔力により、大気の電子運動を活性化させ温度を上げ、魔力をエネルギーに炎の玉を作り出す。

そしてアイスサンダー。

コールド系魔術の一種。

魔力により、空気中の水蒸気の電子運動を鈍化させ、凍った水蒸気をライトニングのように相手にぶつける魔法。

どちらも、外因に左右されるが、ライトニングと同等の威力を持った魔法だ。

更に、コールド系の魔術は、他より高い技術が要求される魔法である。

今度はアサミも攻撃魔法を発動していた。

エネルギーブラスト。

単純だが、ほぼノータイムで発動していて、スピードでは圧倒してた。

ファイヤとアイスサンダー、そしてエネルギーブラストは、マジックシールドの前でぶつかる。

一瞬全ての魔法が1つに固まったが、すぐに爆発した。

少しでも力の無い方に、その爆風は向かう。

爆風の全ては、あちら側、チャイルドの面々がいる方へと向かった。

人々の悲鳴が聞こえてくる。

爆風は辺りの木々を揺らし、葉を飛ばす。

アサミ「あっ！殺っちゃったかも～」

アサミの言うとおりの、その爆発は、普通の人がくらくと、100%命は無いくらいの大きさだった。

アサミは口の前に手をあてて、状況を見守る。

爆発による砂煙が、ゆっくりと晴れてくる。

するとそこには、たくさんの倒れた人々が見て取れる。

シャオ「大丈夫だろ。レベルは低いけど、魔法防御を展開していた。」

シャオの言うとおりの、後ろに待機していたチャイルドの一部の者が、とっさに魔法防御を展開していたようだ。

ただ、魔法防御とは魔法そのものを防ぐ為の魔法であり、これだけの爆発はほとんど防げない。

よって、やはりかなりのダメージを受けていた。

砂埃が全て晴れ、全てが目視できた。

チャイルドの全ての者が、そこに倒れていた。

動くものも数人いたが、大半がかなりの重傷で、身動きひとつできない状況のようだ。

シャオ「ちょっとやばいのもいるな。アキラとシュータは回復魔法使えたよな。死にそうなの頼む。俺様はアイを呼んでくる。」

シャオは立ち上がりながらそう言うと、背を向け歩き出した。

そのタイミングで、倒れて身動きひとつしていなかったリュウが、起きあがって向こうへかけだした。

リュウ「なんだ？あいつら弱いじゃねえか！」

ぶつぶつとそう言いながら、かなり早いスピードで戦場を離脱する。

しかしすぐにその動きを止めた。

アサリ「ごめんなさい。わたくし達の事、報告されると困るもので。」

そう言いながら、振りかざした剣は、鞘に収まったままだったが、一撃をくらったリュウは、凄い勢いでその場に倒れ伏した。

それでもリュウは、なんとか意識を保っており、顔を上げてアサリを睨む。

リュウ「おまえ達が裏切った事は、既に報告済みだ。。。」

そこまで言うと、意識を失った。

アサリ「どうしましょうか。。。」

アサリのつぶやきに、すぐに寄ってきたシャオが声をかけた。

シャオ「さっき、1人逃げていったのが見えたぞ。おまえ達、何か知られるとまずい事でもある

のか？」

シャオは全くわからないといった感じだった。

アサリ「ええ。わたくし達が裏切った事がばれたら、両親が、もしかすると。。。」
そこまで聞いて、シャオは理解した。

今までのシャオは、たとえ肉親であっても、大儀を成す為には簡単に犠牲にして生きてきた。
しかしトキョウに来て、その意味を理解できるようになっていた。

シャオ「それはまずいな。俺が王なら。。。いや、普通に考えると、両親は拷問か、死刑か。。。」

アサリと、シャオの後ろに来ていたアサミは、シャオの言葉を聞いて走り出した。

シャオ「ちょっと待て！！俺も行く！！」
シャオはそう言うと、集まってきていたアイやミサ、そして雄志軍の面々に手みじかに指示をだして、アサリとアサミの後を追った。

滅びの景色

シャオ、そしてアサリとアサミの3人は、既にチャイルド国領土内に入っていた。

森の中は黒い霧に包まれ、かなり暗く感じた。

そんな森を抜け、目の前に大きな河が広がっている所まで来た。

この河を渡れば、もうまもなくチャイルド国の首都、元はインディアナの街であった、チャイルドの街が見えてくる。

アサリの話しによると、チャイルドの首都は、元のチャイルドの街から、このインディアの街に移動したという話だ。

そして指揮系統もすべてこの街に移動し、元のチャイルドの街は、今ではインカの街と名を変えていた。

チャイルドの街に行くには、ここから少し西に行った所にある橋を渡り、それから少し東に戻る事になる。

しかし一刻を争う事態に、シャオは提案した。

シャオ「それだと時間がかかる。ここから渡る。飛ぶぞ！！」

シャオは2人を見て、両手を差し出した。

アサミ「えっ？飛ぶって、そんな事できるの？」

アサリ「聞いたことがありますね。上級の魔法使いは、空も飛ぶ事ができると。。。」

シャオ「ああ、だから俺の手を掴め。俺は飛べる。おまえら2人くらいなら、まあ持っていけるだろう。」

シャオはそう言うと、更に手をつきだした。

アサリとアサミは顔を見合わせると、すぐにシャオを見て、それぞれの手を握った。

シャオ「じゃあいくぞ。しっかり捕まっているよ。」

シャオがそう言うと、2人の手に力がこもる。

シャオの体を、黒のオーラが包む。

シャオが魔法を使うのを見る事は、2人にとって別に珍しい事ではない。

しかし、今までシャオが使ってきた魔法は、すべてノータイムで、そのオーラを見ることは無かった。

それが今日、シャオのオーラを初めて見た。

2人は驚いた。

シャオのオーラの強大さに。

少し今の状況を忘れそうになる。

そうしている間にも、オーラは更に大きくなり、そして急激に縮小した。

シャオ「行くぞ！！」

シャオの言葉に、状況を忘れかけていた2人は、改めてシャオの手を強く握った。

次の瞬間、3人の体は、河の上に有った。

そしてみるみる対岸に向かって進む。

そのスピードは、今まで走っていたスピードよりも速い。

走っていたスピードも決して遅くはない。

魔力を使って飛ぶように走っていたので、かなりの早さだ。

それよりも早いスピードに、アサリとアサミは、少し息が苦しくなった。

ほどなくして、対岸へとたどり着き、シャオはゆっくりと降下する。

まずは、アサリとアサミが、そしてシャオが地面に足をつけた。

アサリとアサミは「ふう〜」と息を吐くと、少し深呼吸した。

シャオ「飛べるから、このまま街まで行っても良かったが、これ以上は、なれていないおまえらにはきついだろ？」

少し笑みを浮かべて、シャオは2人を見ていた。

アサミ「そ、そうね。。。はぁ～死ぬかと思った。」

そういうアサミだったが、顔は既に笑顔で、息も整ってきていた。

息が完全に整うと、再び3人は走り始めた。

ここから南西に少し行ったところ、丘になっている所を越えれば、チャイルドの街だ。

なだらかな斜面を3人は駆け上る。

このまま行けば、シャオの考えでは、戦闘前に引いていった1人よりも先に街に入れるはずだ。

ここまでは警備する者にも出くわさなかったが、これからはおそらくいるだろう。

少し気を引き締めて、いや、シャオ以外は気を引き締めた。

丘の頂上が見えてきた。

もうまもなく街が見えてくる。

走る足は、少し軽くなったような気がした。

その時だった。丘の向こうで爆発音が聞こえる。

よく見ると、向こう側に何本もの煙の柱が見えた。

アサミ「何？」

アサミは不安そうな顔で声をだす。

同じように、アサリも少し表情を曇らせた。

3人は丘の上についた。

チャイルドの街が全て見える。

そこで3人は、ただ立ちつくした。

そこに見える景色は、もう街とは呼べない。

全てを破壊され、燃え尽くされた、滅びの景色だった。

必然の出会い

3人は街に入っていた。

街というよりは、街が有った場所という方がふさわしい。

倒れている人々の中に、息のある者は1人もいない。

既に太陽は西に沈もうとしている。

辺りを赤く照らす光は、倒れる人々が流す血を、より赤く見せていた。

3人がなんとか、アサリとアサミの両親の家が有ったと思われる所についた時には、太陽は沈み、辺りを闇が包んでいた。

かろうじて月の光が、状況を理解させる。

そこには、吹き飛ばされた家の残骸と、元は人であったと思われるもののみが、そこにあった。

アサミはただ泣いていた。

アサリはそれを抱きしめていた。

泣き声だけが、辺りに響く。

時々残骸の崩れる音が混じる。

月の光は、ただそれらを包む。

夢の中にいるような、そんな感じの時間。

ただただ、そんな時間が流れた。

どれくらいの時間が流れたのだろうか。

ようやくアサミは泣く事をやめていた。

誰が喋るともなく、何となく3人は歩き始めた。

どこを歩いても、同じような景色。

それは、同じ場所をグルグルと回っている感じさえする。

遠くに見える丘と月だけが、その方向を示す。

2人の少女の両親の行動範囲を歩いて探しているのだろうか。

シャオにはわからなかったが、ただ2人について歩いていた。

前を歩く2人が、あきらめて歩くのをやめたのは、月がかなり西に傾いた時だった。

それを見てシャオが声をかけた。

シャオ「とりあえず、戻ろう。」

その声を聞いた2人の少女は、少し涙を浮かべ、俯いたまま頷いた。

その時だった。

向こうに人の話声と、魔法による光が見えた。

その声と光はこちらに近づいてくる。

その者達は、まだこちらに気がついていないようだ。

シャオは何かいやな感じがした。

それに近づいて来る者の1人、馬にのっている者の魔力の強大さ。

ただ者ではない。

シャオはとっさに、アサリとアサミを引っ張って、瓦礫の影に隠れた。

尚もその者達は近づいてくる。

話してる内容も、はっきりわかるようになった。

シャオ達は息を潜めた。

近づくものは3人。

馬に乗っているのは男。

20歳くらいの美形の男。

光を発しているだけの魔法からも、何か強大な魔力を感じる。

そしてその両脇を歩く、不思議な雰囲気を持つ女と老人。

輝くような美しさを持つ長髪の若い女は、話しの中で出てくる名前から、どうやら「チューレン」と言うようだ。

そして70歳はかるく越えていそうな、白くて長いあごひげを持つ老人。

こちら名前は「タアスーシ」と判断できた。

タアスーシ「それにしても、こんなに派手にやっても良かったんですかな？ヒサヨシ殿。」

タアスーシが、馬に乗る男に話しかけていた。

ヒサヨシ「まあなあ～ちょっと派手やけど、これでわしらカンセイの力は見せつけたやろ。東に対抗できる力をはよ手に入れる為にはしゃ～ないんちゃうか？」

聞き慣れない言葉に、シャオは小さな声で、アサリに尋ねる。

シャオ「聞き慣れない言葉だな。誰だかわかるか？」

シャオに尋ねられたアサリだったが、その人物は知らなかったようで、ただ首を振った。

もちろんアサミにもわからず、同じく首を振る。

チューレン「それでもこんな事は、今回限りでおやめください。ヒサヨシ様は、人々を平和に向かわせる者。人々に憎しみを植え付けてはなりません。」

ヒサヨシ「おう！わかつとるわ。まあ出来る限りはな。それにしても、みんな殺してもおたなあ～ははは～」

辺りにヒサヨシの笑い声が響いた。

が、すぐにその笑い声はピタッと止まった。

そして視線をこちらに向け、「誰や？」と一言、こちらに言葉をかけてきた。

シャオはすぐに、こちらの状況に気がついた。

アサリは剣を握って白のオーラに体を包み、アサミは黒のオーラを両手に集めていた。

ヒサヨシ「おっ！まだ生き残りがおったんかいな。」

ヒサヨシの顔には笑みが有った。

アサミ「あんたがこれ、やったの？あんたがお父さんお母さんを殺したの？」

アサミは一目でわかるほどの殺気で、ヒサヨシをにらみつける。

アサリも横で同じだ。

シャオも2人の横に立ち、ヒサヨシを見た。

ヒサヨシ「生き残りではないみたいやね。そうか。君らの両親がこの街にすんどったんか。そら悪かったな。堪忍してや。」

ヒサヨシは、謝罪と言うよりは、ただ言葉を伝えただけだった。

その態度を見て、アサリとアサミは、押さえていた感情を爆発させた。

アサリとアサミ「殺す！」

その言葉と同時に、アサリはヒサヨシに襲いかかる。

角度を変えて、アサミがエネルギーブラストを放った。

2つの光は一気にヒサヨシに近づく。

ただの使い手なら、もう回避は不可能なショートレンジだ。

しかし次の瞬間には、アサリはこちらに跳ね返され、アサミの魔法は一気にかき消された。

シャオ（強い。2人とはレベルが違いすぎる。）

そう思ったシャオは、素早く2人の前に立つ。

シャオ「おまえらには無理だ！下がってろ！！」

シャオはそう言うと、黒の魔力を集める。

シャオ（ちっ！この辺りは生命反応が薄い。黒は無理か。）

そう判断すると、今度は白の魔力を高めた。

シャオ（こっちもきついな。此処まででかなり魔力が消耗している。それにこの相手。勝てない。）

それでもシャオは白のオーラを纏ったまま、ヒサヨシをにらみつけた。

ヒサヨシ「う〜ん。なかなかの魔力やな。でもなんか本調子やないみたいやね。そやけど向かってくるんやったら、相手するで。」

そう言うヒサヨシの顔は、先ほどからかわらず、ずっと笑顔のままだ。

シャオ（ここは引いて再戦するのが吉。本調子なら勝てない相手じゃない。はず。ただ、ここで簡単に引かせてくれるか。。。）

シャオとヒサヨシは見合ったまま、後ろでは立ち上がったアサリとアサミがヒサヨシをにらみつけている。

チューレンとタアスーシはただ静観していた。

アサミとアサリが再び魔力を高めながら、シャオをはさむように前にでて横に並ぶ。

それを見てヒサヨシも魔力を高めた。

少しの時間が流れる。

何かきっかけがあれば、全てが動きそうだ。

辺りは既に少し明るくなっている。

太陽が出るのはもうまもなく。

静かな時の流れ。

それぞれの魔力はピーク。

太陽が頭を出し、シャオ達の後ろからヒサヨシの顔を照らした。

それを合図に、アサリがヒサヨシに向かう。

しかしそれはすぐに止められた。

シャオがアサリの腕をつかみ自分に引き寄せる。

アサミはエネルギーブラストを放つ。

その魔力は小さい。

それに合わせて、ヒサヨシの強大なファイヤーボールがこちらに向かってくる。

それはエネルギーブラストとぶつかって、すぐに爆発した。

消失しなかった炎の玉と爆風は、全てこちらに向かってきた。

シャオはアサミを抱き寄せて、直後空を飛んだ。

此処へ来る時に、河を渡る為に使った魔法「飛翔」。

シャオはこのタイミングを待っていた。

シャオは爆風と炎の玉を背に受け、2人の少女を抱きしめ、高速でその場を離脱した。

ヒサヨシ「おっ！すげえな。あの魔力で飛翔かあ〜あいつメッチャ強いな。」

ヒサヨシは笑顔を変える事なく、なんとなく嬉しそうに、ただその状況を見ていた。

タアスーシ「良かったんですかな？逃がしたら、今度は万全の状況で向かってくるかもしれませんで。」

タアスーシは特に感情も無く、むしろ嬉しそうにヒサヨシに言った。

チューレン「それにしても、この中央大陸に、あれほどの使い手がいたのが驚きですね。」

チューレンも笑顔で言う。

ヒサヨシ「そやな。今度会うのが楽しみや。」

ヒサヨシはそう言うのと馬を促し、チューレンとタアスーシと共に、西の方へとこの場を後にした。

シャオは何とか河向こう、トキョウの方まで飛んできた。

白のオーラ、白の鎧とも言われる魔力で背中をガードしていたものの、炎の玉を受けたシャオは、かなりのダメージを受けていた。

魔力もほとんどつき、体力も限界だったが、なんとかアサリとアサミを抱えて森を進んだ。

太陽は既に真上、眠気もかなりきつい。

もうろうとする中、それでも森を進んだ。

どこからかアイの声が聞こえた。

夢と現実の区別がつかない。

目の前が暗くなる。

シャオの意識が残っていたのはそこまでだった。

ゆっくりと流れる時

次の日、シャオが目を覚めたのは、自分の部屋のベッドの上だった。

体の疲れもすっかりとれている。

窓からは太陽の光が入ってきていた。

シャオはゆっくりと体を起こすと、昨日の事を思い出していた。

シャオ (ちょっと無理しすぎたな。)

シャオは少し苦笑いを浮かべた。

シャオ (それにしても、ヒサヨシとか言う奴。かなりの使い手だった。他の2人も、おそらくかなりの使い手だ。全く魔力を、いや存在感すら感じられない不思議な2人。でも、何か強さを感じさせられる。もしかすると、あの街の全ては、あの3人だけでやった事かもしれない。)

シャオはその後もしばらく、ベッドの上で昨日の事を整理していた。

アサリとアサミの事。

チャイルドの街の事。

そして今後の事。

かなりの時間が流れ、これ以上考えても堂々巡りだと感じたシャオは、とりあえず起きる事にした。

部屋から出たシャオは、となりの部屋が気になり、ノックしてみた。

反応が無かったので、少しドアを開けて覗いてみたが、そこにはアサリとアサミの姿は無かった。

その時後ろから声がした。

アイ 「大丈夫？ ああ2人も大丈夫だよ。それにしても、シャオがあんなになるなんて信じられなかったけど。ああ、お腹空いてるでしょ？ 準備出来てるから。」

アイの言葉に「ああ。」と応えたシャオは、促されるまま1人食事をとった。

その後アイに呼ばれて、屋敷の中にある会議室に、アイと共に向かった。

会議室に入ると、そこにはアキラとシュータ、アサリとアサミ、そしてリュウが、大きなテーブルを囲って座っていた。

アキラ 「シャオ君、大丈夫か？」

アキラがそう尋ねると、シャオ黙って頷いた。

アキラ 「そうか。今、今後の事と今の状況を話していた所だ。まあ座ってくれ。」

アキラに促されるまま、シャオとアイは席についた。

アキラ 「話は2人からだいたい聞いた。2人の事もね。」

アキラはアサリとアサミに目を向けてそう言うと、少し元気の無い2人が俯いてそこに座っていた。

アサリとアサミは、インカの街、少し前まではチャイルドの街と言われた街のはずれで生まれた。

生まれながらに魔力の高かった2人は、当時のチャイルドの王の命令で、幼き頃より魔法教育を受けていた。

2人の両親も、その事により豊かな生活が約束された。

戦争で2人が活躍するたびに、両親の生活は更に向上する。

2人はそれが嬉しく、なんの疑問も持たないまま、ただ命令に従って人を殺してきた。

常にチャイルドの中核と行動を共にする2人。

その流れで、最近両親と共に新しいチャイルドの街、元のインディアの街に住居を移した。

その後タイナンを2人で攻略する。

タイナンの街は、国と呼べるほどの大きなものではなく、王とその側近を殺す事で、その任務は終了した。

その際、街の人々も何人か殺していたが、2人にはいつもの事で、なんとも思わなかった。

それが今回、自分の両親が殺され、そして酷く悲しんだ自分たち。

その事で、自分たちのしてきた事が、とても罪深い行為だったと理解して、複雑で更に悲しい気持ち

になっていた。

会議は、シャオが参加したことで、アサリとアサミの事をシャオに聞かせた後、もう一度現在の状況整理が行われた。

アキラ「全ての話しと状況を整理すると、この中央大陸の東半分は、ここトキョウ以外は、全てカンセイ帝国の傘下に入った事になる。東の大陸は、半分以上はローラシア大国の傘下で、全てがその傘下に入るだろうと予想されている。そしていずれは、中央大陸に進出するという噂だ。」

アキラはそこまで話すと、一旦言葉を切って、みんなを見回した。

最後に目があつたリュウが、口を開ける。

リュウ「既に私の使えていたチャイルド国は存在しないわけだ。よって私はあなた方と敵対する理由もない。今、魔法の牢に入れられている私の部下も同じだ。」

屋敷から少し離れた所に、シャオは魔法の牢を作っていた。

アイに、殺しはダメと言われ、だったら捕らえておく牢が必要だと考えたからだ。

その牢は、魔力を吸収する特殊な壁で部屋が作られ、シャオほどの上級の魔法使いで無ければ出ることが叶わない魔法の牢だった。

アキラ「そうだな。この会議が終われば事情を説明して、全ての人を解放しよう。そしてもし我々への協力を望むものがいたら、この街にとどまってくれてもかまわない。まあ、アサリとアサミの事が無ければ、そのまま解放するつもりだったからな。」

アキラがそう言うと、リュウは「感謝します。」とだけ言った。

アキラ「では話を続ける。」

そう言ってアキラは、また話を続けた。

アキラ「話によれば、チャイルドはおそらく、ヒサヨシと言う者と他2人によって滅ぼされた。おそらくはカンセイの者で、それもかなり上の位に位置する人物であると判断できる。そして今後、その者達と我々は敵対するかもしれないし、そうでなくても何か関わりを持ってくる事が予想される。しかし敵対するとなると、今の我々トキョウの戦力では、相手にならないだろう。」

その後もアキラは、1人延々と話を続けた。

現在トキョウの戦力は、世界一と言われるシャオ。その実力はかなり見えてきてはいるが、他の者にはまだ世界一の使い手だとは理解されていない。

そして次にアサリとアサミ。その実力は周知されているが、東の大陸の使い手と比べると中級レベルか。

魔力だけならかなり上位だが、まだまだ実戦経験が足りない。

次にアキラとシュータ。東の大陸では、平民レベルとは言わないが、軍ならおそらく最下層。

そしてアイ。

白魔術師としては中級レベルだが、戦力としては使えない。

此処にとどまると言っているリュウ。その力はわからないが、おそらくはアキラやシュータと変わらないレベルだ。

牢に捕らえられている口の達者なあの3人は、シャオの見たところ、これもリュウと同レベル。

その他は雄志軍の者よりも下に見えた。

アキラ「戦力になりそうなのはこのくらいだ。正直まともにやり合って我々が勝てる可能性はない。来れば話し合いでの解決、場合によってはカンセイの傘下に入る事も考えなくてはならないかもしれない。」

アキラがそこまで言うと、部屋の中が少しざわついた。

それに応えるようにアキラが話を続ける。

アキラ「いや、基本的にはそのつもりはない。しかし、最悪の場合は考えなければならないと言うことだ。」

アキラの言うことは間違っていない。

何故なら、チャイルドの街をあのよう状況にできてしまうヒサヨシ達の力。
それがここトキョウで行われてしまったらと考えると、傘下に入る事で、少なくとも民の命は助けられる。
民を思えばこそその判断である事は、みんな理解していた。
それからしばらくして会議は終了した。
結局は、今できる事は少ないと判断した。
とりあえずは相手の様子を見る事と、自分たちの力を高める事、それだけだった。

チャイルドの街が焼き尽くされた日から、既に1ヶ月がたっていた。
少しシャオやアイ、アサミとアサリの身長が伸びているように見える。
あの後、チャイルドから来た者達も此処にとどまり、雄志軍の一員となっていた。
そしてシャオの指導の元、全ての使い手達は、日々己を高めていた。
中でもアイの成長はすさまじかった。
シュータの意外な才能も開花していた。
シュータは黒の魔法剣士で、白の魔法も使える事は既にわかっていたが、それを同時に使える才能を持っていた。
それをうまく組み合わせる事で、以前の倍以上の魔力を使える強力な使い手となっていた。
アサリとアサミも実戦形式の特訓で、魔力にふさわしい使い手に成長している。
リュウの力も思った以上だった。
ミサも黒の魔法を使い始めて、それなりに面白い成長を遂げていた。
攻撃魔法は相変わらず弱いものの、器用あらゆる魔法を覚えていた。
ただ、口の達者な3人は相変わらず、アキラもさほどの成長は無かった。
シャオ自身は、また以前よりも少し魔力が高まっている感覚を感じていた。
今日も学校と呼ばれる広場で、シャオ達は魔法の練習や、剣を振るったりしていた。
実戦形式の練習で、怪我をする者もいたが、成長には必要だとみんな積極的に参加している。
剣を交える金属音と、魔法の爆発音が、広場に響く。
魔法の方が使えると言われたアサミは、時々流れるような美しい動きで剣を振るう。
性格的に、魔法ばかりでは飽きたようだ。
そのアサミにアサリは一辺倒の剣で襲いかかる。
そのスピードとパワーはアサミを圧倒していたが、剣術には一日の長があるアサミは、その剣をうまく受け流していた。
技術のアサミ、パワーとスピードのアサリと言った感じだ。
今度は魔法で対決する。
多彩な魔法で攻撃するアサミ。
それを1つの強力な魔法で防ぐアサリ。
見ているシャオは苦笑いを浮かべる。
シャオ (性格と逆なところが笑えるな。)
破天荒な性格のアサミが、何故か魔法や剣では繊細な動きを見せる。
大人しいおしとやかな性格のアサリが、剣にしても魔法にしても、パワー任せの一辺倒。
シャオ (でもまあ、最高のコンビなのかな。)
シャオはそう思った。
シャオ (おっといけねえ。)
シャオはシュータに目を向けた。
シャオは今、シュータの相手をしていた。
シュータは実に珍しい、灰色のオーラをまとっている。
魔力の消費は激しいものの、そのパワーは倍だ。

スピードもパワーもアサリに匹敵する。

そして剣や魔法を操る姿は実に無駄がない。

シュータは、実はこのトキョウの生まれでは無い。

中央大陸の西で生まれ、子供の頃は黒の剣士として鍛錬していた。

そして15歳の頃、地域の紛争に巻き込まれ、紛争に参加。

しかし旧友との戦闘の際、戦闘の愚かさに気がつき、その地から離れた。

そしてこの人類発祥の地に来たのだ。

その後は、その剣の技術と、高い黒の魔術師としての能力をかわれ、この地の重要な人物になっていた。

ただ当時は、白の魔力コントロールは全くできなかったが、10数年この地にいたことで、何故か使えるようになっていた。

シュータは刃の無い剣で、シャオに斬りかかった。

それをシャオがナイフで受け流す。

シュータの逆の手には、灰の魔力球が存在する。

それをシャオにぶつけた。

しかしシャオは、何事も無かったかのように、普通に体で受け止める。

シャオ「早いが、その分威力がない！」

シャオの言うとおりに、シャオがダメージを受けている気配がない。

それでもシュータは再びシャオに向かう。

今度は魔力を高めてからの爆裂の魔法。

シャオの足下に魔力の反応。

シャオ「爆裂か。」

「爆裂」、エクスプロージョンが正式名称。

爆裂系の魔術で、爆発を起こす。

爆裂系魔術の中では低位魔術。

シャオは飛ぶように跳ねて、横へ移動する。

そのタイミングを見計らって、シュータが間を詰める。

シャオ（フェイク！）

シュータの一撃がシャオの腹を捕らえる。

刃はついていないものの、まともにくらうとかなりのダメージだ。

シャオは後ろに吹き飛ばされた。

木にぶつかり、ようやくその体を止める。

シャオ「油断したよ。」

そう言いながらすぐにシャオは立ち上がった。

ダメージはさほど受けていないようだ。

とっさに何か魔法で防御したのだろう。

又は、シャオが纏っている黒のオーラの力が、かなり高いからかもしれない。

更にシュータはシャオに向かった。

今度は、まだ距離のあるうちからシュータは剣を振るう。

その先から、カマイタチが飛んでくる。

シュータはすぐに移動を開始する。

シャオ「今度はそうはいかないよ。」

カマイタチには見向きもせず、ただそちらに手をかざした。

シュータ（同じ戦術は通じないか。）

シュータはその場に止まり、何度も剣を振るった。

多くのカマイタチがシャオを襲う。

今度は数で勝負のようだ。

シャオはマジックシールドを展開した。

これで全て防げるはずだ。

次々にカマイタチを止める。

少し甲高い音が辺りに何度も響く。

シャオ (また爆裂か。)

シュータは再び爆裂を試みた。

シャオ (スピードも凄いが、これだけ連続させる攻撃。面白いな。)

シャオは足下に向けて、無効化魔法で対抗した。

いつの間にか頭上にシュータの姿があった。

右手には剣、左手には火球、同時にくるようだ。

下に無効化、前方にマジックシールド、回避も不可能だ。

シャオ (やべ！！)

シャオはとっさに、無効化とシールドを中止し、その魔力を全てオーラの鎧に集めた。

シャオに向かってきたカマイタチと足下からの爆発がぶつかり、シャオを中心に大きな爆発が起こった

。

頭上にいたシュータは、結果敵には自分の魔法で吹き飛ばされる形になった。

シュータの体は、周りの木よりも高く上がり、そしてそのまま地面に落ちた。

シャオ 「かぁ～悪い！アイ！」

シャオはシュータに駆け寄りながら、アイを呼んだ。

その後、アイの魔法によりシュータは回復した。

正直死にかけていたが、アイの魔法の力は既にマスタークラスに近かった。

そんな状態でも軽く回復させていた。

おそらくは死んでいても、直後なら蘇生させる事ができるかもしれない。

それほどの使い手になっていた。

その後も訓練は続けられ、終わったのは太陽が赤く辺りを照らす頃だった。

告白

次の日、東の大陸の情報が入ってきていた。

ローラシア大国が、再び隣国の攻略に動き出したという事だった。

さらにはトキョウに、カンセイ国の者が1人、トキョウを訪れてきていた。

その人物は、アサリとアサミ、そしてシャオの知る人物だった。

水色に近い長い髪が、とても綺麗な若い女性。

チャイルドの街で見たチューレンだった。

みんなが屋敷の会議室に集まっていた。

チューレンは、シャオを見るとニコリとほほえみ、そして席についた。

アキラ「それでは早速、用件をお聞かせ願いたい。」

アキラはいつもと変わらない口調で言った。

チューレン「はい。おそらく言いたい事はわかっていりゃっしゃると思います。ただ、それは少し変更する事にいたしました。」

おそらくは、カンセイ国の傘下に入れと言いにきたのだろうが、それを変更するというチューレンの言葉に、みな少し驚いた。

チューレン「本当は我が国の傘下に入っただけでお願いにまいりましたが、あなた方に会って、それは妥当で無いと考えました。わたくし達は、既に中央大陸の半分、東の大陸全土に匹敵する領土をもっています。対抗するのに、これ以上の領土は必要ありません。それよりも人材が必要なのです。東の大陸、ローラシア大国がこちらに進行してきた時、それに対抗できる力が必要です。更には、それだけの力が有れば、対等な話し合いも可能であるかもしれません。その為に、我が国は領土を広げてきました。そしてチャイルドの街を破壊し、その力を掲示しました。これでローラシア大国が驚異に思うかどうかはわかりませんが、それなりに意識する存在になったと考えます。我々は戦いを望みません。むしろ終演させる為に動いています。小さな紛争や戦争は、今まで極秘に処理できてきましたが、ローラシア大国を止めるには、大規模な動きが必要でした。」

チューレンの言っている事。

ある程度はみんな理解していた。

そして、戦争をするのでは無く、止める事が本来の目的である事も理解できた。

チューレン「そちらのお嬢さんお2人には、申し訳ない事をしたと思っています。ただ、戦争を止める為だにご理解ください。我が国の主、ヒサヨシ様の本意でもありません。」

アサリとアサミは、少し感情的に声を出しそうだったが、チューレンの言葉には誠意が有り、それをやめさせた。

それに自分達が今までにしてきた事からも、責める事はできなかった。

チューレン「後、ヒサヨシ様の事も少し話さないといけません。ヒサヨシ様は、初めの人々からの意志を受け継ぐ者です。」

その言葉を聞いて、シャオとアキラは声を出した。

シャオ「えっ？」

アキラ「それは本当ですか？」

意志を受け継ぐ者。

それは、今ではごく一部の人に、伝説として語り継がれている。

その役目は主に、戦いをやめさせること。

時には戦争を早く終わらせる為に、どちらかの王を暗殺したり、時には荷担したり。

話し合いの知恵を助言する事もあると言われている。

チューレン「人類が、まだ地下で暮らしていた頃、人々はそこで、日々魔力の研究をしていました。そしてそれを3冊の本に残しました。そして地上に上がる際、3人の者にそれぞれ本を持たせま

した。1人は東の大陸へ、1人は南の大陸へ、そして1人はこの中央大陸にとどまりました。それぞれの役目は、人が道はずれ、平和を忘れ、再び戦いを始めた時、それを止める事でした。その中でそれぞれはそれ以降、子孫に本と役目を伝えてきました。しかしここ数十年、東の魔法技術は、その受け継ぐ者の能力を超えてきました。東の受け継ぐ者は、身をしていてブリリア国を止めようとしたが、止める事叶わず、その命を失いました。命を懸けた魔法でブリリアの王を捕らえるところまで追いつめはしましたが。」

そこまで話すと、チューレンは少しシャオを見て、更に続けた。

チューレン「そして、南の大陸に渡った者は、3代目までは連絡がとれていましたが、その後はわかりません。南の大陸とは、ほぼ行き来できない状況ですから。」

チューレンの話を、一同ただただ聞いていた。

シャオ（南の大陸か。。。）

シャオは何か思うところがあるのか、1人なにやら考えているようだった。

南の大陸。

それは中央大陸と東の大陸の間に有り、北半分は、赤道の帯の中にある。

周りの海の潮の流れは荒れていて、船で行くにはかなりの危険を伴う。

いやむしろ、10000回チャレンジしても、1度たどりつけるかどうか。

魔力が漂い、こちらからのアクセスを拒否するようでもある。

そんな場所だから、こちらとの行き来は全く無い大陸だった。

更には魔獣が住むと言われ、その内情を知る者はほとんど存在しない。

そういった大陸だった。

チューレン「そんなヒサヨシ様が、この状況を打開する為に色々考え、そしていくつかの対策をしました。1つが東の大陸に対抗するために、同じだけの領土を手に入れる事。1つが、対抗出来るだけの力を見せつける事。しかしそれは力を伴ったものではありませんが。そしてこれから、対抗できるだけの力を手に入れる為に、私はこの地に来ました。まあここに来て、予想以上の展開が待っていましたが。」

そう言ってチューレンは、シャオを見てニッコリとほほえんだ。

アキラ「ふむ。話はだいたい理解させてもらった。で、結局我々に何を求めておいでなのかな？」

少なくとも、無条件に力づくで何かをしようというわけではなさそうなので、アキラは少しリラックスして話していた。

チューレン「はい。願いは2つです。1つは、我々に力をかしていただきたいと言う事です。はっきり言うなら、我々と行動を共にし、あの神木の元での訓練を許可していただきたいのです。」その意味がよくわからず、トキョウの面々は、次の言葉を待った。

チューレン「あの神木には、人々の中にある潜在魔力を解放する力が有ります。それは神木に近ければ近いほど効果的です。行動を共にしていただきたいと言うのは、こちらがその神木に集っている事を、東の人々にわかっていただくためです。おそらくは、東のローランドも、その事に気がついてはいるはずだからです。それは、ローラシア大国を本拠地とし、そしてしばらく動きが無かった事から判断できます。何故なら、ローラシアの街のはずれに、此処よりも小さいですが、神木が存在するからです。だから、カンセイ帝国はトキョウの傘下に入る形でも、1つになったことを掲示したいのです。ただ、ヒサヨシ様には一定の権限はくださいますよう、それだけはお願いしますが。」

シャオは納得した。

あの神木からは、なにやら魔力を感じていた事もあるし、更にはアイの成長の事もある。

シャオ「なるほどね。確かにあの神木にはそのような力があるみたいだからね。」

アイを見ながらシャオが話すと、一同納得の表情を浮かべた。

チューレン「気がついておいででしたか。」

シャオ「いや、何かあるなあ～程度だったけどね。」

一同納得したところで、チューレンは更に話を続けた。

チューレン「トキョウの神木は、人々が地下で暮らしていた頃、地下の世界に植えた木です。それが大きくなり、地上に突き出しました。それと時を同じくして、人々は地上に上がってきました。そして受け継ぐ者の2人、東と南に渡った2人は、それぞれ神木の苗を持っていきました。その1つが、ローラシアにある神木です。もう1つは言うまでもなく、南の大陸にあるはずですが、だからわたくし達のもう1つの願いは、南の大陸に渡り、神木と、受け継ぐ者を探す事。そして連れ帰る事です。それをシャオ様、あなたに協力していただきたいのです。」

一同はシャオを見た。

シャオは一同を見回す。

確かにシャオの能力が高い事は、みんな認めるところだ。

しかし本気のシャオを、万全の状態でのシャオの本気を見た者はまだここにはいない。

だから何故シャオなのか。

もしかすると凄い人物なのか。

色々な思いが、一同の顔からうかがえた。

そして、シャオの言葉を待った。

シャオ「南の大陸、俺なら行く事が可能だろう。なんせ俺は南の大陸で生まれそだったからな。」

シャオの驚きの告白に、一同啞然とした。

ただ1人チューレンだけが、笑顔を崩さずシャオを見つめていた。

シャオ「俺は南の大陸の北、アルテミスと言う街で生まれた。と言っても、南の大陸に存在する唯一の町だがな。それより南は魔獣が生息していて、かなりの使い手じゃないとなかなか入る事はできない。近所にでかい木が存在していて、よくそこで魔法の訓練をしていた。今思うとあれが神木だったと確信できる。そしてその木の近くに住んでいたじいさんが、よく俺に魔法を教えてくれたっけ。」

シャオはそこまで話すと、ふとあることが引かかった。

そうなのだ。

その老人は、いつも本を手にしていて。

それはかなり古い本で、なにやら魔法の事が書かれていたように思う。

チューレン「その老人、もしかすると3人目の受け継ぐ者。」

チューレンも少し驚いた。

流石にそこまで見抜いていたわけではない。

ただの偶然。

でもそれは必然だったのかもしれない。

シャオがこのトキョウに飛んできた時使った魔法、大陸間移動魔法。

全ての障害物を通り抜け、ただそこへ行くだけの魔法。

しかしその魔法は、あまりに強大な魔力を必要とする魔法で、時には全ての魔力を消費する。

よって細かい場所までを特定する事はできない。

その魔法を教えてくれたのが、その老人だった。

そして東の大陸に渡る時、この魔法を使っている。

ついた先は、ローラシア大国のはずれ。

チューレンが、神木が有ると言っていた場所。

シャオの中で全てが繋がった。

シャオ「ヴァレン。そのじいさんの名前だ。おそらく受け継ぐ者に間違いない。平和が一番だ。毎日そんな事を言っていた気がする。どうやってかはわからないが、時々他の大陸の情報も知っていた。あそこで戦争が起きたとか、国が分かれたとか、消えたとか。」

シャオは話しながら、自分がどうすべきなのか迷っていた。

みんなの為に、南の大陸に行くべきかどうか。

ヴァレンはおそらく知っているだろう。

シャオ、いやシャナクルが東の大陸の戦争を大規模なものにした本人である事を。

そして2人目の受け継ぐ者を殺ったであろう事を。

ヴァレンとアイがもし会うことが有れば、アイの母を死なせた戦争を起こしたのが、自分である事もばれるであろう。

チューレン「シャオ様、どうでしょうか？そのヴァレン様に会う為、手を貸していただけますか？神木がこちらに2つ、そして受け継ぐ者が2人となると、ローランドも話し合いに応じると考えます。戦いを終わらせる為です。ご決断ください。」

シャオの気持ちは決まっていた。

そうだ。戦いを終わらせなければ。

自分が起こした乱世。

やり方は違うが、今自分の目指していた戦いの無い世界にするための方法。

それを示されているのだ。

その方法でうまくいく保証はないが、今世界はほぼ2つに分かれているのだ。

その2つの大国が争わなければ、1つになれば、可能性は十分にある。

シャオ「わかった。俺はかまわない。」

シャオはそう言って、アキラを見た。

アキラ「チューレン殿、そういう事です。ただ協力という点で、そちらをこちらの傘下にするという点は、無理があります。だからこちらが、そちらの傘下に入りましょう。我々を騙しているとも思えないし、悪いようにするともおもえませんが。」

チューレン「いえ、この際だから、こちらがトキョウの傘下に入ります。その方がローランドも驚異に感じるでしょう。こちらの国内への説明は、納得できるようになんとかします。」

アキラ「いやしかし。。。」

言葉を詰まらせるアキラ。

それに対して、シャオが声をかけた。

シャオ「カンセイがそれで良いって言ってるんだし、そうしたら？その方が効果もあるし。」

アキラ「しかしわしがそんな大役を担えるわけが。。。」

しばらく渋っていたアキラだったが、最後はヒサヨシが全面サポートすると言うことで話は決まった。

チューレン「それではこれで、わたくしは一旦カンセイの街に戻ります。こちらの事が全て片づき次第、ヒサヨシ様自らこちらに伺います。」

チューレンはそう言うと、席を立った。

シャオ「ちょっと待ってくれ！」

帰ろうとするチューレンを止め、シャオは神妙な面もちでみんなを見回し、最後にアイを見つめた。

アイ「どうしたの？」

アイはただ不思議そうにシャオを見た。

シャオはアイを見続けたまま、話し始めた。

シャオ「全てを決定する前に、1つだけみんなに話しておきたい事がある。」

シャオの真剣さに、一同は息をのむ。

シャオ「俺の事、まだ話していない事がある。」

シャオの事。

今日初めて聞かされた、南の大陸出身である事。

何か訳有りなシャオの過去。

どうしてあの日、シャオはこの地に飛んできたのか。

そして何故、ボロボロの体だったのか。

着ていた服も気になる。

今それが明かされようとしていた。

シャオ「俺の名前はシャオじゃない。本当の名前は。。。シャナクル。」

シャオは本名を明かしただけ。

ただそれだけだったが、全てが明らかになった。

アイは啞然として言葉が出ない。

他の者も、時間が止まったようにただシャオを見ている。

そんな中、チューレンだけが冷静だった。

チューレン「ヒサヨシ様の考えどおりでした。流石ヒサヨシ様です。」

おそらくアイにも予想出来ていたかもしれない。

いや、わかっていたのだろう。

しかしそれを認めたく無かった。

母を失うことになった元凶。

認めると自分がどうなるか不安だった。

でも今、その事実が突きつけられた。

またしばらく動かない時間。

沈黙の時間が流れる。

その時の流れを絶ちきったのは、以外にもアイの笑顔だった。

その笑顔に、次第に他の面々も笑顔になる。

みんなの、そしてアイの笑顔を見て、シャオはそれをこたえと受け取り、ただ「ありがとう。」と言った。

チューレン「それでは、わたくしは失礼します。」

そう言ってチューレンは部屋を後にした。

アサミ「それにしても、シャオが世界一と言われる魔法使いだったなんて。心強いよね。」

アサミはあっけらかんと声に出した。

シャオ「いや、前までは俺もそう思っていたけど、ここへ来てわかったよ。俺なんてまだまだだ。俺よりも強い奴が、目の前にいるからな。」

そう言ってシャオはアイを見る。

シャオ「アイ。。。俺はここに来て、本当の強さを知ったよ。俺はアイには勝てない。アイ、ごめんな。俺のせいで。。。」

シャオはアイに心から謝罪した。

アイ「ううん。シャオのおかげで、私たちは何度も助けられてる。それにもう私の大切な友達だもん。」

そう言うアイの瞳には涙があふれていた。

しかしその表情は笑顔だった。

南の大陸へ

次の日から、訓練は神木のそばで行われてた。

2週間が過ぎた頃には、ヒサヨシもこの地を訪れ、元々カンセイの騎士団や魔法部隊も訓練に合流した。

アキラとヒサヨシは今後の相談をして、シャオの南の大陸への出発日も、シャオがこの地に来て丁度1年の2007年元旦の日に決まった。

移動の方法は、大陸間移動魔法。

おそらくはこれで行けるはずだ。

シャオの他、アサリとアサミ、それにアイが同行する。

さらにはチューレンと、ヒサヨシの部下らしき、「チンロウ」と言う名の少年も同行する事となった。

アイの同行には、シャオは反対したが、本人がどうしてもついて行くと聞かなかった。

チンロウは、見た目はアサリやアサミよりも幼く見えるが、それでも剣の腕は、強くなったシュータのレベルを超えるかもしれない強さだった。

ただ、チューレンやタスーシ同様、どこか存在感の薄い存在だった。

シャオは、このメンバーに、大陸間移動魔法の概念を教えていた。

正確には、チューレンとチンロウ以外。

ヒサヨシ曰く、2人には大陸間移動魔法は、とにかく使えないと言う事だった。

だからチューレンはシャオが、チンロウはアイが背負って行くことになっていた。

発動方法は実に簡単だった。

基本的には、強大な魔力を持つ者なら、誰でも簡単に使えるものだった。

ただ、試すことはできないので、使うのはぶっつけ本番になる。

そして、それには多大な魔力を消費するので、日々自分の魔力を高める事が必要だった。

神木の側での特訓は、日々続いた。

その間東の大陸では、ローラシア大国がその領土を広げていた。

月日は流れ、いよいよ南の大陸に渡る日の前日。

ローラシア大国が、東の大陸を統一したという情報が、ここトキョウにも入ってきていた。

いよいよこの中央大陸に戦火が及ぶ日が近づいている。

正直なところ、もっと早い出発も考えていたが、より確実に大陸間移動魔法を成功させる為、予定どおりの日となった。

それに、統一したと言っても、国内整理もおそらくできていないだろう。

だからこの後もまだ少し時間が有ると判断していた。

見方によれば、絶妙のタイミングとも言えなくはなかった。

ただここ数週間は、黒の霧がかかる事が多かった事から、多くの人々が死んだ事が伺える。

それを防げなかった事は、みな心に傷として残っていた。

アキラ「それでは、最後の会議を始める。」

アキラやヒサヨシ、南の大陸に渡る面々等、皆会議室に集まっていた。

ヒサヨシ「西の国境は、わしの部下に任せてほしい。ってゆっても、西には好戦的な国は残っていないし、まあ全然大丈夫やけどな。」

とりあえず西は、ヒサヨシの部下、タスーシが防衛するという事だった。

アキラ「で、この地には私とシュータ、それに雄志軍が残る。」

ミサ「私もね。」

ミサもこの地にいる事を主張した。

ミサは最近、かなりの成長を見せていた。

魔力もかなり大きなものになっており、戦力になるほどに成長していた。

使える魔法は相変わらず、攻撃や回復には関係ないが、それ以外のハイレベル魔法も使いこなせるようになっていた。

ヒサヨシ「それでわしはタイナンの警備に行く。東からくる場合、おそらくはまず此処に来るからな。シャオが帰ってくる前に、大規模に攻めてきたら、逃げるけどな。ははは〜」

ヒサヨシの冗談は、微妙に笑えなかった。

ヒサヨシ「まあそれよりやシャオ。おまえが早くヴァレンを見つけてこちらにつれて帰って来てくれたら、すぐにローラシアとの交渉にはいるから。はよ帰ってきてくれや。すぐ見つかったら、1日で任務完了もあり得るし、頼むで〜」

ヒサヨシはなれなれしくシャオの肩をたたいた。

シャオ（なんだかこの人、調子狂うなあ〜）

シャオは苦笑いを浮かべた。

シャオ「でも交渉なんてどうやってするんだ？使いを送ったら、速攻殺される可能性だってあるぜ。ロードはそういう奴だ。」

シャオは浮かんだ疑問をそのまま聞いた。

ヒサヨシ「それは心配あらへん。チューレンに行かせるから。チューレンは、わしが死ぬへん限り、決して死ぬことはないねん。まあ正確には、死んでも1ヶ月したら生き返る。そんな感じや。」ヒサヨシの言葉に、一同意味が分からないと言った感じで、ヒサヨシを見る。

その視線に、ヒサヨシは説明を続けた。

ヒサヨシ「チューレンもタアスーシもチンロウも、みんなわしの召還した妖精やねん。」

そこでシャオだけは納得してた。

召還魔法。それはアウターゾーンに住む住人を、こちらの世界に実体化させる魔法。

魔界、精霊界、妖精界、アウターゾーンには色々有る。

魔界は人間界と全く違った世界であり、ここからの召還は比較的難しい。

何故なら魔界は、人間界の上位に有るからだ。

説明は難しいが、魔界人は人間よりも上の位にあり、人間の呼び出しに応じにくい。

精霊界は、人間界のすぐ近く、物理的には説明できないがすぐそこに有るとも言える。

だから比較的楽に召還できる。

ただ魔界との共通点として、完全な別世界である事から、魔力を発動している時だけしか、こちらに存在させる事はできない。

魔法を終了した時点、または術者、或いは異世界人本人が死んだ時、その実体は元の場所に帰る。

死んでしまっていたら、向こうに帰っても死んだままだ。

それに対して妖精界。

召還はかなり難しい。

妖精界は、この人間界と全てを共有している。

全ては人間と共に存在しているのだ。

しかし時間軸と呼ばれるものが別で、人間と妖精は互いに干渉できない。

見る事もできない。

時々時間軸が交わる時に見えたと言う話しも有るが、それは極稀だ。

妖精界の住人が、元の時間軸に戻った時、別の時間軸での出来事は無かった事になる。

だから妖精は、こちらで死んでも、元の世界に戻れば、全て無かった事になり、死んでも死なないのだ。

ただ、こちらで死んだ場合、元の時間軸に戻るまでに時間がかかり、それが1ヶ月という時間である。そして、妖精の召還は、元々同じ場所にいるのだから、召還してしまえば、その後の魔力は必要が無い。

更には、戻すのにも魔力が必要であるが、違う時間軸での生活は、妖精本人に歪みが生まれ、存在期間

は長くて1年が限界である。

だからヒサヨシは、時々自分の力でチューレン達を戻しては、再びこちらに呼び出していた。

ヒサヨシの説明を聞いて、みんなわかったようなわからなかったような、そんな微妙な表情をしていた。

その後、交渉に際しての不安点がいくつか話しあわれたが、結局はやってみなくてはわからないという事で、話はまとまった。

とにかく、ヴァレンと南の大陸を味方にする。

全てはそれからだった。

会議が終わると、その後はアイとシャオの誕生日パーティが行われていた。

アイの誕生日は、今日4月9日、シャオの誕生日は、明日の元旦。

2人は今日と明日で、13歳になる。

今の状況を忘れるように、みんなで騒いだ。

そして南の大陸に旅立つ日が来た。

朝から神木の前に、面々は集まっていた。

準備は万全。

全てはおそらく大丈夫だろう。

ただ1つ、あえて言うなら、アサミが大陸間移動魔法を使えるかどうかという事が不安だった。

大陸間移動魔法は、魔力が一定以上解放された時発動する事ができる。

その人自身が、どれだけの魔力を持っているかが大きく影響する魔法だ。

シャオが初めてこの魔法を使った時の、シャオの持っていた魔力。

それを基準にして計ると、アイとアサリは既にその域を超えており、問題ないと判断できた。

しかしアサミは、普段は黒の魔力を使っており、本来自分の中に有る魔力の量が、アサリ達と比べると少し小さい。

昔のシャオと比べても、同じがやや小さかった。

予定を早めなかったのも、これが一番の原因だった。

アキラ「シャオ君、よろしく頼む。」

アキラの言葉には、ヴァレンの事もあったが、なんとなくアイの事なのだろうとシャオは思った。

シャオ「ああ。アイは必ず無事に返すよ。」

シャオが笑顔でそう言うと、アキラは苦笑いを浮かべ、少し頬を指でかいた。

シャオ「うんじゃま、行ってくるは。」

そう言ってシャオは、チューレンと自分を魔法のロープで縛る。

同じようにアイも、チンロウとを結んだ。

魔法のロープは、術者の魔力によりその強度が決まる。

解除はそれ以上の魔力で解除すれば良いだけだが、普通に切る事はかなり難しい。

準備は整った。

アイ「じゃお父さん。行って来るね。」

アイの笑顔に、アキラは黙って頷いた。

ミサ「アイもアサリもアサミも、しっかりね〜！！」

ミサは、ちょっとした旅行に出かける友人を見送る感じで手を振った。

シャオ「行くぞ！」

シャオの声に、各々魔力を解放し始めた。

それぞれの体を、白のオーラが包む。

みんな南の大陸に行く事だけを頭に浮かべる。

更に白オーラが大きくなる。

そして、まずシャオの体が一瞬でその場から消えた。

正確に言うなら、超高速でその場から空へと飛んだ。

次にアイとアサリがほぼ同時にその姿を消す。

後はアサミだけだ。

みんな少し心配する。

しかし問題無く、次の瞬間その姿はそこには無かった。

4つの光の固まりは、海の上を飛んでいた。

そのスピードは、飛翔の魔法など比べものにならないくらいに速い。

それでも、すさまじいGがかかるわけではなく、息も苦しくは無かった。

ほどなくして既に南の大陸が見えてくる。

それを視界に捕らえてからまもなく、降下を開始する。

そして直後、南の大陸の北端、草原に光が突き刺さった。

爆発音が響く。

砂煙が上がる。

草原には、4つのクレータができていた。

その中心部に、何事も無かったように、それぞれが立っていた。

アイ「ついたの？」

アイには、少し疲労感が見えたが、啞然とした顔で辺りを見回した。

アサリ「そのようですわね。それにしても凄いです。」

アサリはそう言って、息を吐いた。

アサミ「ふう。。。」

アサミは、流石に魔力が限界だったのか、その場にしゃがみ込んだ。

シャオ「アサミ。大丈夫か。」

シャオだけは何事も無かったように、アサミを気遣った。

そしてシャオとアイは、魔法のロープを解除し、それぞれ背負っていたチューレンとチンロウをおろす。

アイはすぐにアサミに駆け寄った。

その足取りは少し重かった。

アサミ「うん。大丈夫だけど、魔力がほとんど残ってないかも～」

アサミはそう言いながら、少し無理をして笑顔を作った。

トキョウでは、見送った面々はしばらく空を見上げていた。

ヒサヨシ（さて。無事見つければええけど。なんかイヤな予感もするなあ。）

ヒサヨシは言葉には出さず、少し心配そうな顔で空を見続けた。

しばらく草原で休憩していたシャオ達は、アサミの状態が少し回復したのを確認すると、シャオの記憶を頼りに、神木のあった場所へと向かった。

神木は巨大な木である事から、遠くからでも見えるのですぐに見つかった。

しかしすぐに、以前との違いをシャオは感じた。

シャオ（人がいない。それになんだ。禍々しい魔力を感じる。）

シャオはアイ達に、警戒するように促し、そして神木を目指した。

町に入った。

そこで一同驚愕した。

町中破壊され、そして既に腐敗を始めている死体が、そこいらじゅうにあった。

アサミ「うっ！」

アサリ「ああ。。。」

アイ「酷い。。。」

それぞれに、顔や口を押さえた。

アサリとアサミ、そしてシャオには、チャイルドの街の惨状を思い出させた。

いや、時間がたって放置されている事や、傷が目に見えて残っている事から、チャイルドの街以上に酷い状況に見えた。

チューレン「とりあえず、行きましょう。」

その中でもチューレンは冷静だった。

表情もいつもと変わらなかった。

チューレンに促されるままに一同は、少し町の中を進み、すぐに神木の側までたどり着いた。

生きている人には出会わなかった。

そこでまた、一同は驚いた。

アイ「えっ？何これ？」

アイの視線の先には、神木が存在する。

しかしその神木には、深い傷が付いていた。

その傷から、まるで神木が泣いているように、白い樹液が流れ出していた。

神木はかろうじて生きている。

そんな感じだった。

シャオ「もし神木が死んでいたら、俺らは此処にこれなかったかもしれない。ぎりぎり間に合ったって感じだな。」

おそらくシャオの言うとおりでただだろう。

大陸間移動魔法の標的として機能しているであろう神木。

もしそれが枯れていたら、正直何処へ飛んでいったのだろうかかわからない。

もしかすると、東の大陸の神木へ向かっていたかもしれない。

シャオはギリギリ助かったのだと思った。

しばらくそこに立ちつくしていた面々だったが、その後生きた人を捜すために歩き出した。

何処を歩いても、生きた人に出会う事は無い。

ただ同じような景色、状況がそこにあるだけだった。

町の全てを見て回るまでに、さほど時間はかからなかった。

とりあえず皆は、シャオが昔住んでいた場所に向かった。

そこには昔のまま、そして何年か放置していた感じでシャオの家が残っていた。

何か魔法で守られていたのだろうか、その家だけは無傷だった。

シャオ「とりあえず今日はここで休もう。」

シャオはそう言うと、魔法でロックされているドアに手をかざす。

そしてすぐに解錠され、ドアが開いた。

中も昔のまま、シャオの魔法によって守られていた。

シャオ「まだ日は高いが、全ては明日だ。とりあえず魔力を回復しないと。」

そう言いながらシャオは中に入り、そして皆に中に入るよう促した。

流石に皆つかれていたのか、椅子に腰掛け、アサミなどはすでに眠っているようだった。

夜になると部屋の中は少し寒く、シャオは暖炉に火球をともす。

皆無言で、とりあえず食事をとっていた。

食料は1週間分くらい、こちらに持ってきていた。

簡単な保存食で、あまり味気はない。

そんな中、今後の事を話さなくてはならないと思ったのか、チューレンがシャオに尋ねた。

チューレン「ここはシャオさんの家ですね。生活感がまるでないですが、ご両親はどちらにお住まいだったのでしょか？」

チューレンは、ただ両親を捜さなくてもいいのですか？そんな気持ちで発した言葉。

それにシャオは、少しためらいがちにこたえた。

シャオ「俺が此処を発つ前に死んだ。いや、俺が殺した。」

チューレン「。。。」

かなり驚いていた面々を少し見て、シャオは更に言葉を続けた。

シャオ「俺が世界統一を目標にして、此処を発つ前、両親は俺を殺そうとした。俺はその時、世界統一が悪い事だと思わなかったし、その為に誰かを殺す事も当然だと考えていた。そんな俺を、おそらく両親は危険だと思ったんだろう。2人して俺を殺そうとした。俺も強大な魔力を手にしていて、かなり調子にもものっていたから、今思うと両親が殺そうとしたのも当然だったのかもしれない。そして俺は、そんな両親を逆に殺した。そして此処にはもういられなくなった。すぐに世界統一を実行しようと、東に渡った。その後は、皆が知るとおり、ブリリアの王になって、そしてやられて、トキョウにたどり着いた。」

別にシャオを責めるものはいなかった。

逆にアイなどは、同情していたようだった。

アイ「親に殺されそうになるなんて。。。可哀相。。。」

アイの目には涙があふれていた。

チューレン「そうですか。。。では、明日からどうしますか？」

チューレンは過去の話はどうでも良いから、今後どうするのか考えましようと言いたげに、いつもと変わらず話を切りだした。

シャオ「ああ。町を見て回って気がついた事がある。倒れていた人々についた傷、そして破壊された家々。あれはおそらく魔獣の仕業だと思われる。」

アサミ「魔獣？話によれば、町には入ってこれないんじゃないか？それに魔獣って、よくわからないんだよね。」

アサミの言葉ももっともだ。

魔獣は、今までアルテミス町に入ってきたことはないと聞いている。

更に魔獣自体、それがどんなものなのか、知る者は少なかった。

シャオ「魔獣ってのは、魔界の住人の事だ。普通は召還する事で、この人間界に実在する。しかし何故か、この大陸にはそれが普通に存在する。どこかに魔界とをつなぐ門が存在するのかも知らない。それでもまあ、町に入ってくる事は無かったな。その理由については俺にもわからない。」

アサミの、そしてみんなの疑問にシャオはこたえた。

チューレン「とりあえずは、魔獣に注意する必要があるそうですね。」

一同チューレンの言葉に頷いた。

シャオ「ま、この家にいる間は大丈夫そうだけどな。一応無傷で此処に残っていたし。でも油断はできない。一応俺が夜は警戒しておく。みんなはしっかり休んでくれ。」

アイ「でもそれじゃシャオが休めないよ。」

アイのもっともな意見に、シャオは少し笑顔でこたえる。

シャオ「ああ、大丈夫だ。俺もちゃんと寝る。結界を張っていれば、その中に何かが入ってくればわかるから、そうするつもりだ。」

シャオの魔法技術は、普通には計り知れない。

いったいどれだけの魔法が使えるのか。

おそらく聞いても全てを把握する事などできないだろう。

だから皆、シャオの言うとおりにする事にした。

食事が終わり、皆適当なところで横になった。

この人数では正直狭い家だったが、それでも外で寝るより遙かに良い。

魔獣がいつ襲ってくるかもしれない。

皆眠りについてた。

暖炉にある火球だけが、ユラユラ揺れている。

とても静かな夜だ。

全てが止まっている。

そんな夜。

それでもゆっくりと時間は流れる。

皆の呼吸する音だけが部屋に聞こえる。

静かな夜。

更に時は流れる。

少し外の景色が、闇から解放されてゆく。

そんな時だった。

そこから、この世のものとは思えない、人の叫び声が聞こえた。

「ぎゃ～！！」

部屋の空気は一変する。

その声にシャオは目を開ける。

続いてアイ、アサミも起きあがる。

チューレンとチンロウも立ち上がっていた。

アサリは、眠そうな目をこすりながら、ようやく起きあがる。

シャオ「外だな。見てくる！！」

シャオはそう言うと立ち上がり、部屋を出る。

アイ「私も！」

そう言ってアイもシャオについてゆく。

シャオは止めようと思ったが、言っても無駄だと悟り、「ああ！」と一言いっただけで、声のした方へと走った。

アイの後ろにも、アサミとチューレンが続いていた。

アサリはまだ寝ぼけているようで、部屋でまだ目をこすっていた。

チンロウ（しゃーないなあ。おいらも此処に残るか。）

アサリ1人をおいていくわけにもいかず、チンロウも部屋に残った。

シャオ達は、すぐに叫び声のあった場所までたどり着いた。

そこには何人かの逃げまどう人と、3体の魔獣がいた。

シャオはすぐさまマジックミサイルを放ち、魔獣を攻撃する。

その全ては命中していたが、3体の魔獣にダメージは無いようだった。

シャオ「この程度じゃきかないか。」

魔獣達は、こちらを見た。

逃げて来た人達は、シャオ達の後ろへと走ってきた。

アイ「大丈夫ですか?!」

アイの言葉に、人々は「油断した!」「なんとか大丈夫です。」など、口々にこたえた。

アイ「とりあえず後ろに下がっておいてください。」

アイは人々にそう言うと、シャオと共に魔獣に向かい合った。

シャオとアサミは、同時に黒の魔力を集める。

周りの木々から、魔力が集まってくる。

アイも自身の魔力を高めた。

魔獣も魔力を高めているようだ。

シャオ「確かあの魔獣、狼魔獣だ。おそらく魔法はない。手の爪に警戒しろ!!!」

シャオが言い終わるかどうかのところで、狼魔獣は襲いかかってきた。

そのスピードはかなり速い。

アイが素早く魔法障壁を展開する。

狼魔獣はアイの魔法障壁にぶつかり、一瞬体制を崩す。

そこにシャオとアサミがメガメテオを放った。

メガメテオは、ファイヤーボールの上位魔法。

火球が直撃する。

炎に包まれて、狼魔獣は悶絶する。

そこに別の狼魔獣がシャオに襲いかかる。

素早くマジックシールドを展開。

狼魔獣の進行を阻む。

別の狼魔獣がアサミに、手の爪で斬りかかる。

シャオ「アサミ！！」

間に合わないか！！シャオはエネルギーブラストをそちらに放つ。

シャオ（はずしたか！）

チューレン「大丈夫です！」

アサミの前にチューレンが立ち、剣で攻撃を受け止めた。

そして返す刀で、狼魔獣を斬りつける。

しかし魔獣を吹き飛ばす事はできたものの、傷はおっていないようだった。

シャオ「魔獣は物理攻撃に強い！魔法か特殊武器でないとダメだ！」

そう言いながらも、シャオは目の前の狼魔獣に再びメガメテオをぶつけた。

魔獣は炎に包まれてその場に倒れた。

シャオ「あと1体！！」

吹き飛ばされていた狼魔獣が立ち上がるところに、アサミとアイのエネルギーブラストが放たれる。

白と黒の魔力が1つになり、狼魔獣にふれたところで大爆発を起こした。

シャオ「ふう。ちょっと苦戦？」

目の前に倒れる3体の狼魔獣を見て、シャオは息を吐いた。

アイ「こんなのがいるなんて。ちょっとやばくない？」

アイも少し息が荒くなっていた。

逃げてきた人々は4人。そして先ほど1人、狼魔獣にやられたらしい。

此処には3人の人々が逃げてきていた。

そこへアサリとチンロウがやってきて、シャオ達は、3人の人々に話を聞く事にした。

シャオ「いったいどうなっているんだ？」

シャオの言葉に、なにやら話そうとしたそこそこの年輩の男は、シャオの顔を見ると、口を少しあけたまま動きを止めた。

そして質問された。

年輩の男「シャナクル。。。か？」

その言葉に、シャオも思い出していた。

シャオ「あっ！！ナディアのおっちゃん。。。」

年輩の男「ああ、ナックルだ。しかし君が何故ここに。。。戦争で死んだとヴァレンさんから聞いていたが。。。」

よく見ると、3人はシャオの知った顔ぶれだった。

それはそうだ。

この地で10年近く過ごしてきたのだ。

そして小さな町。

町というよりも村と言った方があっている。

そんな狭い町。

顔見知りである。当然だった。

シャオ「とりあえず話をゆっくり聞きたい。俺の家に来てくれるか。」

シャオがそう言うと、ナックルは「ああ。」と一言言って、皆でシャオの家に向かった。

シャオの家に入ったナックル達に、シャオは話を聞いていた。

今から1週間ほど前、東の大陸統一間近の事。

ヴァレン「わしの弟子、シャナクルのまいた種を、わしが処理せにゃいかんじやろ。」

ナックルの今は亡き妻の父、ヴァレンはそう言って、ローラシア大国を止める為に、東の大陸に渡ったという事を。

ヴァレン

ヴァレンが東の大陸に渡ろうとしていたその頃、ローランドは東の大陸をほぼ手中にしていた。残す1国も、落ちるのは時間の問題だった。

そして数日後、ローランドは東の大陸統一を達成した。

そんなローランドとヴァレンは、密かにローラシアの王宮の庭で会っていた。

ヴァレン「お主は受け継ぐ者の事をご存じかな。」

ローランド「ええ。存じ上げていますよ。この本の持ち主の事でしょ？」

ローランドは一冊の本を懐から取り出して、ヴァレンに見せた。

ヴァレン「お主が何故それを。そうか。先の戦いで死んだ、ジークフリードの本か。」

ジークフリードはシャオを倒すために、命を懸けた魔法でシャオに立ち向かい、そして死んだ、東の大陸の受け継ぐ者だ。

ローランド「誰の持ち物かは存じ上げておりませんでしたがおそらくそうだと思いますよ。」

ヴァレン「なら話は早い。わしも受け継ぐ者の1人。南の大陸の受け継ぐ者だ。」

ローランド「そんなお方が、わざわざ私になんのでしょうか。」

ローランドはわかってはいたが、あえて尋ねた。

ヴァレン「単刀直入に言うと、もうこのへんで戦争はやめんか？と言う事じゃ。」

ローランド「そうですねえ。南の大陸の受け継ぐ者としては、戦火を南の大陸には広げたくない。そういう事ですね。」

ヴァレン「まあそれも有るが。シャナクルはわしの弟子じゃ。弟子のしでかした事の後始末でもあるわい。」

ローランド「ほう。シャナクル様、いや、シャナクルの師匠ですか。それはそれは。いやシャナクルには助かりましたよ。私の言うとおりに、前線に立ってよく戦ってくれました。おかげで早く東の大陸の統一ができましたよ。今は既に死んでますがね。」

ヴァレン「そのもの言いじゃと、お主が元々王だったみたいじゃの。」

ローランド「いえいえ。私はシャナクル王のただの側近でしたよ。でも所詮はシャナクル王もただのガキ。操作は簡単でした。」

お互い表情は冷静で笑みもあったが、嫌みを交えた会話が続く。

ヴァレン「で、本題じゃが、やめる気はあるのかな。」

ローランド「あなたにはおわかりでしょう。私がここでやめるような人だと思いですか？」

ヴァレン「そうか。それは残念じゃ。では力づくでやめてもらうしかあるまい。」

ヴァレンのその言葉に、一気に辺りの空気が張りつめた。

ヴァレンの体を白のオーラが包む。

それでもローランドは、特に何をするでもなく、ほほえんでいた。

ヴァレン「余裕じゃの。それともあきらめたのか？弱い奴のやりそうな事じゃい。」

ヴァレンの挑発にも、ローランドは表情を変えない。

ヴァレン「余裕なのも今のうちじゃ！」

ヴァレンはそう言うと、ローランドの周りを走り始めた。

ローランド（うむ。何をするつもりだ。）

ローランドは様子を見る。

その間にも周りを走るヴァレン。

ローランド（なるほど。シャナクルがやられた魔法か。）

注意して魔力を感じると、その走った後には、魔力の糸のようなものが存在していた。

ヴァレン「もう遅いぞ！滅びの結界は既に完成じゃ！！」

その言葉と同時に、ローランドを魔法の結界が包む。

その結界はローランドから魔力を吸い出す。

エナジードレインの結界。

更にローランドから魔力が吸い出される。

ローランド「私はシャナクルのようにはいきませんよ。」

ローランドの顔つきが変わった。

悪魔にとりつかれたような凄惨な形相に変わり、魔力を高めた。

ヴァレン「無駄じゃ。もうかなり魔力を吸われてるじゃろ？」

それでもローランドの魔力は更に高まる。

ヴァレン「なに？ドレインよりも魔力の大きさの方が勝っている？うおっ！！」

ローランドを中心に爆発が起こった。

ヴァレンは庭の隅まで飛ばされる。

ヴァレン「結界を破っただと？」

ヴァレンはなんとか起きあがる。

ローランド「シャナクルは、この程度の結界も破れなかったのですか。ふふふはははは～！！」

ヴァレン「化け物か？」

ヴァレンは再び、魔力を集めだした。

ローランド「もうお遊びは終わりだ。」

そう言ってローランドも魔力を高めた。

その大きさは、ヴァレンの2倍以上。

ヴァレン「魔力の大きさだけが魔法じゃないぞ。」

ヴァレンの放つエネルギーブラスト。

ローランドはそれをかわす事もなくそのまま受ける。

ヴァレン「ばかめ！」

次の瞬間ぶつけた魔力が炎の固まりとなり、ローランドを包んだ。

ヴァレン「どうじゃ？」

ローランド「。。。ぬるいですね。。。」

そう言ったローランドが、炎に包まれながら、魔法を放った。

ヴァレン「ギガメテオ？」

ギガメテオ。

ファイヤの上級魔法で、ファイヤーボールの数百倍の威力がある。

ヴァレンはとっさにマジックシールドを展開する。

しかしあっさりとはそれは突破された。

横にかわす。

しかし、意志を持つかのように、ギガメテオの火球はヴァレンを追い、そして命中した。

ヴァレン「ヴァ！」

ローランドを包んでいた炎は既に消えていた。

ローランド「あなたの炎を踏み台にした、更に強力なギガメテオです。いくらあなたでも、ただでは済みますまい。」

ヴァレン「ヴァ～！！」

ヴァレンは何とか魔法を無効化した。

しかしかなりのダメージをおっていた。

ヴァレン（もう体が持たない。。。）

ヴァレンが最初に使った魔法。

滅びの結界。

この魔法は相手術者を完璧に捕らえる魔法。

そしてその後、両術者の命を奪う魔法。

その魔法に捕らえられた術者は、魔力を吸い取られ、本来は脱出は不可能である。

しかし、結界が完成する前に、ローランドは抜け道をつくっていた。

その方法は、実に簡単である。

結界の壁を作る前に、あらかじめその場所に別の壁を作っていた。

後はその壁をどければ、抜け道ができる。

口で言うのは簡単だが、相手に気づかれず、それをやってのけたローランドは、やはりかなりの使い手である事は言うまでもない。

シャオも過去にこの魔法から脱出しているが、その方法は大陸間移動魔法。

この魔法は全ての障害を排除し、大陸間移動する魔法だ。

どちらが凄いか。

言うまでもなく、ローランドのやった事の方が、遙かにレベルの高い対処方法だった。

ヴァレン（もう一度、滅びの結界を。。。）

しかしヴァレンにその力は残っていなかった。

滅びの結界が完成していなかった事から、それで命を失う事は無かったが、流石にダメージが大きかった。

それでもヴァレンは魔力を高める。

そして前に一步踏み出した所で、その動きを止めた。

後ろからローランドの部下が、ヴァレンの背中から剣を突き刺していた。

部下「ロード様、そろそろお遊びをやめて、広間に来ていただきたい。」

ローランド「ああ。もうしわけない。少し楽しかったもので遊んでしまったよ。」

その言葉を聞いて、ヴァレンはこの世を去った。

再会

ヴァレンは、後の事は、シャオと共に魔法を学んだナックルの娘、そしてヴァレンの孫「ナディア」に託していた。

その際、全てはナディアに話している。

受け継ぐ者の事を。

ナックルにはよくわからなかったが、娘ナディアは納得していて、話してくれる様子もなかったので、詳しい事は、ナディアに聞かないとわからないらしい。

とにかく、ヴァレンがいなくなった事で、魔獣が町に入ってきたようだった。

一同黙っていた。

シャオは、またしても自分の過去が、自分を苦しめている現実と直面した。

そして来るのが、わずか1週間遅かった事を知った。

その沈黙を破ったのは、やはりこの人物だった。

チューレン「事情は飲み込めました。とりあえず私たちは、ナディア様に会う必要があります。現在ナディア様が、受け継ぐ者であるのですから。共に来てくれる事をお願いせねばなりません。」

チューレンの言うとおりで。

とりあえずナディアに会わなくてはならない。

そして話をしなければ。

シャオ「そうだな。とりえず出かける準備をしよう。おっちゃん、案内してくれ。」

シャオがそう言うと、各々出かける準備を始めた。

シャオはなにやら奥の部屋へ入ってゆき、何かをしているようだった。

アイ「シャオ！そろそろ行くよ。」

アイの声に合わせてるように、シャオが奥の部屋から出てきた。

手には4本の剣と、1本のロッドを持っていた。

アイ「何それ？」

見れば剣とロッドであることがわかるが、何故今それを持ち出してきたのかがわからなかった。

シャオ「ああ、みんなの持ってる剣だと、魔獣にダメージを与えるのは難しい。何故なら魔獣は、普通の武器による攻撃がほとんどきかないからだ。それでちょっとオヤジのコレクションを探していたら、良い物を見つけてね。持ってきた。」

シャオの持ってきたもの。

それは銀の剣が2本。

そして風神の剣と雷神の剣。

シンボルロッド。

銀の剣は、文字通り銀で出来た剣で、魔獣にも有効な武器である。

そして風神の剣と雷神の剣は、風の精霊界の武器で、魔力を持った武器である。

風神の剣は、風を操ると言われ、カマイタチで離れた対象を攻撃する事のできる、とても軽い剣だ。

雷神の剣は、雷を操ると言われ、その刃には高圧の電気を纏った、強力な剣。

そしてシンボルロッドは、十字の形をしたロッドで、鞘から抜けば、剣としても使えるマジックアイテム。

更には白魔術のコントロールを簡単にし、魔力を増幅させる優れたものだ。

シャオは説明しながらそれらを渡していった。

アイにシンボルロッド、アサリに雷神の剣、アサミに風神の剣、チューレンとチンロウに銀の剣を渡した。

シャオ「さっきの戦闘でわかったと思うが、魔法だけでは魔獣相手だと苦戦する。剣とのコンビネーションが必要だ。だからこれを渡しておく。」

アサミ「へえ～すっご～い！！マジックアイテムなんて、初めてみたかも～」

アサリ「ええ。なにやら魔力が伝わってきますわね。」

2人は嬉しそうにそれを受け取った。

それぞれを手にすると、一同はナックルにつれられ、町のはずれの方、更には森の中へと入っていた。いつ魔獣とでくわしてもおかしくはない。

各々警戒しながら進んだ。

しばらくすると、森の中に洞窟が見えてきた。

ナックル「あそこが我々の隠れ家、全ての人は今あそこに集まっている。」

ナックルがそう言うと、皆は洞窟に入っていった。

ナックル「とりあえず此処には、魔獣は近づかない。理由はナディアに聞いてくれ。」

シャオ「ふ～ん。」

シャオが進む洞窟の中は、魔法で照らされて明るかった。

更に進むと、洞窟の中の開けた場所に出た。

そこには、アルテミスの町の人々が、集まっていた。

人数はパッと見た感じ、100人ほどだった。

その表情は疲れ切った感じで、皆の顔はゲツソリとやせ細っているようだった。

そしてシャオ達が入ってきたことも、気にもとめず反応は無かった。

ナックル「魔獣がいるから、食事を集めるのも大変だね。」

よく見ると、ナックルも少しやせ細っているようだった。

人々の中を歩いて更に奥へと進むと、そこには金色の髪が綺麗な、少し大柄な女性が座っていた。

シャオ「ナディア姉。」

シャオの言葉に、その女性はシャオを見た。

ナディア「シャナクル！あんた生きていたの！」

驚きの表情で、ナディアはシャオを見た。

シャオ「ああ、まあね。。。」

シャオは正直あわせる顔がない、そんな気持ちだった。

俯きながら、ナディアと視線をあわせる事もできなかった。

ナディア「ああまあ、色々派手にやったもんだね。でもまあ、過去を振り返っても仕方ないしね。今此処にシャナクルがいる事は、姉さん神様に感謝だよ。うちらだけじゃ、もう手詰まりだったからね。」

ナディアは気さくな性格で大雑把。

過去の事は振り返らないさっぱりした性格だった。

その性格に、シャオはかなり救われた気がした。

ナディア「で、あんたどうして帰ってきたんだい？天下統一とか言って出ていったけど。」

ナディアの問いに、シャオは事情を説明した。

シャオ「えっとまず、今俺達は、世界で起こっている争い、戦争を止める為に動いている。」

その言葉に、ナディアは少し驚いたが、笑顔でフンフンと頷いて、次の言葉を待っていた。

シャオ「それは中央大陸の受け継ぐ者もからんでいる。」

ナディア「え？」

シャオの言葉に、ナディアは驚きの声を上げた。

ナディア「へえ～今中央大陸の受け継ぐ者はヒサヨシだっけ？わたしも受け継がれちゃった。」

ナディアは冗談を言うように、鞆から本を取りだし、それを振って見せた。

シャオ「うん。それで、この戦争を終わらせるため、南の大陸の受け継ぐ者、本当はヴァレンのじいさんと呼ばにきたんだけど、今ではナディア姉だね。ナディア姉に中央大陸に来てもらいたいんだ。」

シャオのそのお願いに少し考えて、ナディアが一言応えた。

ナディア「それは無理。」

思ってもみなかった、いや、そういう返事もあり得たが、いざそう言われるとシャオ達はとまどった。

シャオ「どうして？」

シャオが尋ねると、ナディアはゆっくりと話し始めた。

ナディア「おじいさまがこの地を甦つ時、私はこの本を託されたのね。それと同時に、この地を守る事も託された。それは今、ちょっと失敗しちゃってこんな状態だけど。え〜っと。シャナクルが受け継ぐ者の使いつてなら、全てを話すわ。南の大陸に渡った初代の受け継ぐ者は、この地に神木の苗を植えた。そしてその孫、3代目は平和の為に、この地を他の大陸から隔離する事を考えた。その為に、この大陸の中心に、魔界との門をつくり開放した。その力によって、海を荒れる海へと変えて、行き来できないようにした。でもそれだけじゃ、魔獣がうようよでてきて、この大陸に人間が住めない。そこでアルテミスの町を、代々の受け継ぐ者が結界を張ることで、魔獣を排除してきた。その結界は、神木の力を借りてできる結界。その役割を果たしてきたのが、おじいさま。そしてその後を私が引き継いだ。それが9日前だったかな。でもその直後、神木の近くで魔法の練習をしていた人がいて、まあ神木を誤って傷つけた。それもかなりの傷。それでも私がうまくフォローできれば良かったんだけど、私って器用じゃないじゃない？結界をうまく修復できなかった。それでもなんとか結界を維持してたんだけど、少しの間からいつのまにか魔獣が町に入ってきて。その魔獣がたまたま神木を更に傷つけて。結界は完全に消えてしまった。今この洞窟の入り口に張っている結界がそう。今ではそれくらいが限界なんだ。」

ナディアはここで話を一度止めた。そして改めてシャオを見る。

ナディア「で、今、どうする事もできない状況なの。」

ナディアは俯いて、険しい顔をしていた。

シャオ「何か方法はないのか？魔獣を全てぶっ倒すとか。」

ナディア「それは無理ね。いくら魔獣を倒しても、門が開いている限り、いくらでもこちらの世界にやってくるわ。」

シャオ「だったらその門を壊したり、閉めたりできないのか？」

ナディア「私ならそれはできるけど、その場所に行くには、この辺りよりも上位の魔獣がいる場所に行くことと同じ。私には太刀打ちできないわ。それに行くとしても、此処の結界を解いたら、この人達が魔獣に襲われる。」

そこまで話して、ナディアは顔を上げてシャオを見た。

何か期待する目だった。

シャオ「ああ、その辺りは俺が何とかしよう。そしてナディア姉をそこまで連れて行けば良いんだな。」

この状況を打開する方法は決まった。

シャオ「それが終わったら、ナディア姉には、トキヨウと一緒に来てもらうよ。」

ディアナ「わかったよ。」

その後一同すぐに準備を始めた。

シャオは一度家に戻り、ありったけの食料を持ってきた。

途中魔獣に出くわさないように、飛翔の魔法で飛んでいった。

持ち帰った食料は、皆でわけて食した。

門へ向かうのはシャオとナディア、そしてチューレンとアサリとアサミ。

アイはナディアの代わりに、結界を受け持つ事にした。

アイもシャオに同行したかったが、結界を担当できる者が他にいなかった。

いや1人いたが、交代制の為、2人必要だった。

そしてアイには、結界の魔法を、一番白魔法の使いそうな者に教える任もあった。

たとえ門を閉めても、こちらに出てきてる魔獣は残る。

荒れた海が落ち着いて、救助、又は魔獣討伐の出来る者を送ってくる間は、しばらく洞窟生活をしなければならない。

その為に、もう1人結界の魔法が使える人が必要だった。

もしもの為に、チンロウは洞窟に残った。

更には、食料調達の役割もチンロウが受け持った。

大陸の中心、小さな大陸であったが、その中心まではかなりの距離がある。

普通に歩いて行けば2週間はかかる。

魔力を使い走ったら2日、飛翔なら半日もかからない。

ただ、飛翔にしても魔力を使って森に行くのも、かなりの魔力を消費する。

近くまで行ったら、1日休む事が必要になるだろう。

よってシャオ達は飛翔で近くまで行き、そこで1日休み、その後門へ向かう事にした。

ただナディアが飛翔を使えない事から、ナディアはシャオが背負って行くことになった。

太陽が真上になった頃、シャオ達は空に昇った。

シャオ「ナディア姉、重い。。。」

ナディア「なんだって？私は太ってないわよ。あんたが軟弱なんだよ。」

空の上でもそんな会話をする余裕があった。

それはかなり遅いスピードで飛んでいたからだが、それでも飛翔なら今日中には近くまで行ける計算だった。

しばらく空を飛んでいた。

アサミは無駄の無い魔力使いで、実に省エネだ。

アサリは魔力の絶対量が大きい、無駄が多そうで、少し疲れているようだ。

チューレンはなんだか空に浮いている感じで、風に乗っていた。

シャオ「アサリ。大丈夫か？」

アサリ「少しつらいですね。でももう少しなら大丈夫です。」

シャオはその言葉に、一旦ここで休憩する方が良いと判断した。

何故なら、地上に降りたら魔獣と遭遇するかもしれない。

完全に疲れ切ってしまったら、戦闘できないかもしれない。

シャオ「少し休むぞ。出来るだけ見晴らしの良いところに降りる。」

シャオはそう言うと、高度を下げた。

他もそれに続いた。

少し丘になっている荒野に降りた。

辺りが見渡せるので、魔獣が近づいてくれば、一目でわかる所だ。

飛んでいたスピードと時間から、おそらく中間地点あたりだろう。

ナディアの持っている本に追記された地図から、それが推測できた。

各々岩等に座り、体を休めた。

とりあえず周りに魔獣の姿はなさそうで、シャオは安心して少し横になった。

次に飛んだら、今日の目的地まではノンストップだ。

しっかり休もうと思った。

現地に着いたら、いきなり戦闘もあり得るのだ。

チューレン「私はつかれていませんから、皆さんしばらく眠ってもかまいませんよ。私が見ていますから。」

シャオはその言葉に甘えて、「よろしく。」とだけ言って、目を閉じた。

一時してシャオは目を覚ました。

どれくらい寝ただろうか。

太陽の位置がさほど変わっていないから、それほど時間はたっていない。

それでもかなり回復できたようだった。

その後少しして、みんなも目を覚ました。

みんな大丈夫そうだ。

各々立ち上がり、再び出発の準備をする。

もういつでも出発可能だ。

その時、向こうに魔獣の姿が見えた。

町で見た狼魔獣よりも、体のでかい魔獣だ。

数もかなりいるようだった。

シャオ「出発するぞ。戦闘は極力避けなとな。」

シャオがそう言うと、皆は頷き空へと上がった。

すぐにその魔獣は見えなくなった。

その後はただ無言で、各々目的地を目指して飛び続けた。

太陽はかなり傾き、少し赤く見える。

地図どおりなら、そろそろ目的地が見えるはずだ。

そんな事を考えていたシャオの目に、山を越えた所、その向こうの山に小さく目的地が見えた。

シャオ「ストップ！！」

シャオは皆に声をかける。

それを聞いて、皆空中で止まった。

シャオ「目的地は捕捉した。今日はこの辺りで寝泊まりできそうな所を探す。」

シャオはそう言ったが、辺りは全て森、山の中と言った感じだった。

アサミ「何処も森の中だね。」

アサミは、シャオを見て、何処に降りるのか指示を待っていた。

シャオ「何処に降りても同じそうだな。とりあえず降りて、洞窟か何か探すぞ！」

シャオはそのまま、真下の森へと降りていった。

他もそれに続いた。

アサミ「でもこのまま門を閉じに行っても良いんじゃない？」

森に降りたアサミが、シャオに意見した。

ナディア「そうよ。私なら元気だし！！」

そういつて、ガッツポーズする。

シャオ「何かイヤな予感がするんだ。門の近く、どんな魔獣がいるかもしれない。門の側に行く時は、皆万全で望みたい。」

チューレン「そうです。我々に失敗はゆるされません。命はいくつもあるものではありませんから。」

シャオとチューレンの言葉を聞いて、皆納得の表情をした。

森の中を歩く。

食料になりそうな、木の実なども集めながら歩く。

太陽が沈むのはもうまもなくだ。

魔獣には、夜行性の種が多いと聞く。

だから夜になるまでになんとか休める場所を見つけなければならない。

皆少し早足に森を歩いていた。

太陽が沈み、辺りが暗くなってきた。

その時目の前に、小さな岩の割れ目が見えた。

アサミ「あそこ！中入れるかな？」

シャオ「うん。あそなら入れそうな気がする。」

皆足早にそこへ近づいた。

その時だった。

その割れ目から、何かが飛び出してきた。

羽を持ったそれは、先頭にいたアサミに襲いかかった。

シャオ「危ない！！」

シャオの言葉に、アサミはとっさに剣を抜いた。

元々剣士だったアサミの反応は早くて、間一髪その魔獣らしきものの爪の攻撃をかわした。

シャオ「ガーゴイルか！」

ガーゴイルは、羽を持つ魔獣で、洞窟など暗い所を好んで住み着いている。

昼間はあまり外にでない、夜行性の魔獣だ。

シャオ「おそらくあそこは、ガーゴイルの巣だ。中にはまだいるぞ！」

シャオがそう言っている間に、次々とガーゴイルが穴からでてくる。

全部で10体。

すぐに周りを取り囲まれた。

シャオ「やるしかねえな。ナディア姉は俺の後ろに。」

そうしている間にも、ガーゴイルが襲ってきた。

アサリとアサミは剣で対応した。

魔法はかなりきつい。

シャオはまず背後と頭上にマジックシールドを展開した。

シャオ「チューレン、補佐を頼む！」

チューレン「わかりましたわ。」

シャオの言葉にチューレンは、シャオに近づくガーゴイルだけに絞って対応する。

その間シャオは魔力を高めた。

アサリとアサミはうまいコンビネーションで、1体をしとめていた。

アサミ「まず1体！」

隙をついたアサミのライトニングが、ガーゴイルに命中し、アサリの剣が切り裂いていた。

アサリ「油断は禁物ですよ。」

アサリの言葉に、アサミは気を引き締めた。

シャオの魔力が一際大きくなる。

チューレンが複数の連続攻撃に苦戦していた。

シャオ「アイスレイン！」

アイスレイン。

コールド系魔法の1つ。

その威力はアイスサンダーよりも弱いけど、その数が多く、結果的にはアイスサンダーよりも大きなダメージを与えられる魔法だ。

すべてのガーゴイルの頭上から、氷の矢が雨のように降り注ぐ。

空を飛ぶガーゴイルの羽を貫き、地面に落ちてくる。

そこにも追い打ちで、氷の矢が降り注ぐ。
いくつもの矢が、ガーゴイルを突き刺した。
全てのガーゴイルが、地面に倒れていた。
少し息のあるのもいたが、すぐに息絶えた。

シャオ「ふう。此処までかなり魔力を使ってたから、魔力をためるのに、時間がかかった。でもまあ、この辺りの寒さの特性で、コールド系は威力が上がって助かったな。」
シャオが万全なら、もっと簡単に対処できただろうが、今日は魔力を使いすぎていた。
朝は早くから起こされ、狼魔獣を相手し、飛翔で洞窟とを往復し、そして半日此処まで飛翔、流石にきつかった。

シャオ「穴の中、まだいるかもしれないから、一応気をつけていかねえとな。」
シャオは魔法ライトで、中を覗いた。
中はさほど広く無く、もう何もいない事が確認できた。

シャオ「大丈夫そうだ。皆入れ！！」
シャオの言葉に、各々中に入っていった。
とりあえず、ナディアには結界をはってもらい、他は食事をとった。
その後シャオと、見張りとは結界を代わって、ナディアも食事をとる。
そしてまたシャオとナディアは見張りを代わり、シャオは体を休める為体を横たえた。

シャオ「俺が回復したら代わるから、それまでは頼む。そしてナディア姉が休んで回復したところで出発だ。」

ナディア「オッケー！」
シャオは返事を聞くと、すぐに深い眠りについた。

ドラゴン

次の日、ナディアが起きてきてから食事をし、いよいよ門へ向かう事になった。

太陽は既に真上にあった。

皆、全くつかれていないかと言えばウソになるが、まあ問題ないくらいには回復していた。

シャオ「よしくぞ！」

シャオの言葉に、皆洞穴を出た。

目的地はすぐそこだが、森に行くのは危険なので、今日も飛翔で一気に行くことにした。

距離が近いので、そんなに魔力を消費する事もない。

皆は一気に上昇する。

向こうには、頂上が平たくなっている、少し変わった山が見える。

その中心に、門が口を開けているのが見えた。

それははっきりと視界にとらえられた。

既に目的地。

皆その山の上に降り立った。

シャオ「ナディア姉、ちゃっちゃとやってくれ。」

ナディア「はいはい。」

シャオの言葉に、ナディアは閉門の魔法に入った。

その時だった。

急に太陽の光が遮られた。

そしてすぐに影が消える。

シャオはすぐに上を見上げた。

シャオの目に、信じられないものが映った。

シャオ「ドラゴン？」

ドラゴン。

それは魔界の住人、魔獣の中のもっとも上位の魔獣。

その為、人間界に存在した例は無いと言われている。

何故その存在を人間が知っているのか。

それは魔獣の中には人間の言葉を喋れる者もあり、そこから話を聞いたか。

又は魔界に行ったことのある人間が存在したのか。

はっきりした事はわからないが、この人間界でもっとも有名な魔獣でもあった。

知能は人間の3倍あり、上級の魔法も操れると言われている。

そしてプレス、足の爪、長い尾が武器になり、皮膚は鋼のような硬い鱗に覆われていた。

その種はいくつかあるが、おおむね羽を持ち、空を自由に飛ぶことができる。

シャオ「ナディア姉、閉門は一旦中止だ。まずこいつをなんとかする。」

ナディア「相手はドラゴンよ。なんとかなる相手じゃないわ！逃げないと！！」

ナディアの言うとおりに、ドラゴンに出会ったら、とにかく逃げろ。

そう言われている魔獣。

そして実際目にしても、その容姿から圧倒的圧力を感じる。

皆一旦逃げる事を考えていた。

アサリ「全く相手にできる気がしません。」

アサミ「そうだよ。無理無理！！」

それでもシャオはドラゴンに立ち向かおうとしていた。

シャオ「アサリとアサミはナディア姉を頼む。とにかく回避優先だ。飛翔でとにかく回避。チューレンは少し協力してくれ。やる前からあきらめるのは早い。ダメならそれから撤退だ。」

そういうシャオは、少しふるえながらも、顔には笑顔が見えた。

本気で戦える相手に、シャオは少し喜んでいるようだった。

チューレン「わかりました。最悪の場合は、私が身をていしてでも、皆さんを逃がします。死にませんから。」

チューレンは微笑んで皆に言った。

アサミ「わかったわよ。でも無理はダメよ！！」

そう言ったアサミと、共にナディアに寄っていったアサリは、シャオに向けて親指を突き上げた。

ナディアはアサリとアサミに抱えられ、空に昇る。

ドラゴンから一定の距離を保つ位置をキープした。

チューレンも空にでて、シャオの指示があるまで一定の距離を保った。

シャオ「みんな。魔法とブレスには気をつけろ。離れていても油断できない。」

シャオも空に上がり、ドラゴンと皆の間に入った。

シャオ（ブルードラゴンだな。。。やっかいな場所にやっかいな相手だな。）

シャオは昨日のガーゴイルとの戦闘で、アイスレインの威力が増していた事を思い出した。

そしてブルードラゴンとは、水属性のドラゴンで、コールド系魔法が得意なドラゴンだ。

おそらくブレスも、ゴールド系ブリザードの可能性が高い。

この寒い場所だと、その威力が上がる可能性が大いにあった。

シャオ（って事は、ファイヤ系かライトニング系が有効。この地でファイヤは無いから、ライトニング系最大魔法で勝負だ。）

シャオは空を飛びながらも、魔力を高めた。

2つの魔法を同時に維持する事は難しいが、シャオにとっては簡単な事だった。

しかしドラゴンもそれを見て、ただ黙ってはいなかった。

尾や爪、更にはブレスの連続攻撃がシャオを遅う。

シャオ（ちっ！魔法に集中できない。）

シャオはドラゴンの攻撃を回避するのに手一杯だった。

そんな中でも、ドラゴンは更に魔法も使ってきた。

結界がシャオを包み込もうとする。

シャオ（結界で俺を？エリア指定のブリザードか？）

ブリザードは、エリア指定のコールド系魔法。

ブレスのブリザードは、吐く息が超低温の吹雪といった感じで、魔法の場合はそのエリアを限定する事で、その威力は何倍にもなる。

普通の人なら、瞬間に凍ってしまう強力な魔法だ。

シャオはすぐさまそのエリアから離脱する。

先ほどいた場所には、予想どおり結界があって、中には吹雪が吹き荒れていた。

シャオ（あれをくらったらやばいな。おっと！）

考えている間にも、尾の攻撃がシャオをかすめていった。

シャオ（このままではらちがあかねえ。）

そう考えたシャオは、チューレンに声をかけた。

シャオ「チューレン、なんとか、少しでいい。奴に隙をつくれぬか？」

チューレン「やってみます。」

シャオの言葉に、チューレンがドラゴンに向かった。

チューレンが加わっても、ドラゴンの攻撃は、なかなか息をつく暇を与えてくれない。

空に浮かぶシャオとチューレン、その周りを飛びながら、ドラゴンは尚も攻撃してくる。

その時、強い風が辺りを吹き抜ける。

チューレンの魔法なのか？風とともに、森から舞い上がる木々の葉が、ドラゴンへと向かった。

そしてドラゴンの視界が、葉によって一瞬ふさがれた。

ドラゴンの動きが一瞬止まる。

シャオ (今だ!) 「テラボルト!!」

シャオの声と共に、空が一瞬暗くなる。

そしてそこから、通常では考えられない威力の雷が、ドラゴンに向けて落ちた。

シャオの魔法は見事に直撃し、ドラゴンの羽ばたきが止まり、森に落ちていった。

シャオ 「やったか？」

ドラゴンが地面に激突する大きな音が、辺りに響いた。

チューレン 「ダメージはあったようですが、まだのようです。」

チューレンが言い終わる前に、ドラゴンは再び羽ばたきを始めた。

シャオ (ちっ! ライトニング最大呪文でも、やれないか。。。)

チューレン 「流石にドラゴンですね。シャオ様の呪文も凄いです、それ以上です。」

チューレンの表情も、既にいつもの余裕の笑顔は無かった。

シャオ (何か。何かないか。。。)

その間にもドラゴンは、こちらに向かってくる。

シャオ (そうだ!)

シャオは高速でアサミとアサリに近づいた。

アサリ 「撤退しますか？」

アサミ 「あんなの無理だよ。」

シャオは2人の言葉を聞かず、2人の鞘に収まっていた2つの剣、雷神と風神を抜いた。

シャオは「借りる!」とだけ言うと、再びドラゴンへと向かって行き、魔力を高めた。

チューレン 「剣の魔力を借りるのですね。」

チューレンの言うとおりの2つの剣は、シャオの魔法を補助し、魔力を高める事ができた。

シャオ (これでどうにもならなかったらお手上げだけだな。)

再びシャオとチューレンは、ドラゴンとの戦闘を開始した。

前回同様、ドラゴンに隙は無かった。

チューレンは再び、葉を舞い上がらせ、ドラゴンの視界をふさごうとする。

しかし同じ方法は通用しなかった。

シャオ (なんとか。なんとか隙を作らないと、こちらがもたない。)

かわし続けるシャオとチューレンは、ドラゴンの連続攻撃をかわすのも限界にきていた。

次の瞬間、チューレンがドラゴンの尾にふれ、その体をはじかれる。

チューレンは森の中に落ちていった。

シャオ 「チューレン!!」

しかしシャオにはそれをかまっている余裕がない。

更に1人になり、状況は厳しい。

シャオ (ダメか。)

シャオがそう思った時、2つの火球が、シャオを通り過ぎ、ドラゴンに向かった。

アサリとアサミが、飛翔しながらも、何とか放ったファイヤーボールだった。

2つの火球の1つが、ドラゴンの顔をとらえた。

ドラゴンが一瞬顔を背ける。

そのタイミングで、シャオは再びテラボルトを発動した。

先ほどよりも強力なそれは、ドラゴンの頭に見事命中し、ドラゴンは山の上の平らな場所に落ちていった。

シャオはドラゴンを追い、剣を構えた。

飛翔の勢いを利用して、そのままドラゴンの頭に2本の剣を突き刺した。

血がそこから噴き出す。

シャオ 「もういっちょ!!」

その剣から、ライトニングボルトをドラゴンの中に流し込む。

剣をつかんでいるシャオにもそのダメージが跳ね返ってきたが、かまわず流し込んだ。

シャオ（ゼロレンジのライトニングだ。体内だからむしろマイナスレンジ。これならどうだ？）
魔法の威力は、距離と比例する事が多い。

ライトニングボルト自体、その威力はさほど高いものではないが、体内に直接流し込まれれば、その威力は計り知れない。

体を包む魔力のオーラが、プロテクト効果を発揮することができないからだ。

シャオは自分の体の限界まで、ライトニングを流し込んだ。

そろそろ限界を感じたシャオは、2本の剣を抜き、飛翔でドラゴンから離れた。

ドラゴンの頭からは、更に血が噴き出した。

少しの間、シャオはドラゴンを見つめていたが、ドラゴンが動き出す事は無かった。

シャオ（やったか。。。）

シャオ、そしてアサリとアサミ、そしてナディアは、再び山の上に降りた。

シャオ「チューレンが心配だ。探してくる！」

シャオはそう言うと、再び飛翔で、チューレンが落ちた辺りに飛んでいった。

チューレンはすぐに見つかった。

大きな怪我もなく、意識もあり、木の葉が集まっている場所に落ちたことで、それがクッションになって、ダメージを和らげたようだった。

おそらくチューレンの能力だろう。

シャオはそう思った。

シャオ達が山の上に戻り、しばらくしてから閉門が完成した。

ナディア「ふう～。なんとか閉門できたわ。いやあ～出来るかどうか不安だったんだけど。」

その言葉に、皆少しあきれたようだったが、無事完了した事でホッとした。

シャオ「閉門はできたが、まだこちらにさっきのドラゴンみたいなのがいるかもしれない。早くこの場から離れよう。」

シャオの言葉に、一旦洞穴に戻る事にした。

今日はもう太陽が西に傾きつつあるし、シャオの体力も魔力も限界だった。

洞穴に戻り、その日はその後何事もなく日が暮れた。

ローランド来訪

シャオがドラゴンと戦っていた頃、東のローランドがトキョウに入っていた。

受け継ぐ者の本を手にしてるローランドは、その中に書き記された、大陸間移動魔法を使って、トキョウにやってきていたのだ。

ローランドがこの地に着いた時に鳴り響いた衝撃音に、トキョウの面々は、ローランドの所、神木の元に集まってきていた。

そして、ローランドを見た口の達者な3人組、自称トキョウの三羽カラス、バレット、ブルータス、グーズリーはすぐにローランドとわかった。

グーズリー「口、口、ローランド。。。」

その言葉に、その場にいた面々は、息をのんだ。

ローランド「これはこれはトキョウの方々、お出迎えくださるとは恐縮です。わたくしローランドと申します。」

ローランドのいつもの笑顔。

そこには殺気は全く感じられない。

しかし漂う雰囲気、皆の頭の中に警笛を鳴らしていた。

それでもアキラは平常心を装い、ローランドに話しかけた。

アキラ「これはこれは。私はこの地の長、アキラです。東の大国の王が、何故この地にいらっしゃるのかな？」

ローランド「ええ、ちょっとした散歩です。ここトキョウの神木が見たくなりましてね。」

ローランドは神木に手を触れながら、それを見上げた。

ローランド「それにしても大きいですねえ。これは凄い。」

穏やかな笑顔を更に輝かせるローランド。

その姿を、皆はただ見ていた。

ローランド「みなさん、今日はただ、この神木を見に来ただけです。戦うつもりはありません。でも。。。」

そう言いながら、ローランドはアキラ達の方に顔を向けた。

アキラ「でも、なんですか？」

ローランドの続きの言葉を、アキラは尋ねた。

ローランドは再び話し始めた。

ローランド「でも、この神木、この目で見るとすぐにでも欲しい気持ちになりましてね。」

そう言ったローランドは笑顔のままだが、先ほどとは違い、殺気が伝わってきた。

一同に緊張がはしった。

剣士は剣を握りオーラを纏い、魔法使いは魔力を高めて身構える。

アキラ「それはどういう事ですか。この神木は、人類全ての物です。残念ながら私がどうこうできるものではありません。」

ローランド「この神木は危険だ。。。すぐにでも手に入れたい。。。」

ローランドは、再び神木に触れた。

ローランドからは、先ほどよりも更に強い殺気が伝わってくる。

体を黒のオーラが包み始めた。

危険だ。

皆緊張感を高めた。

ローランド「私が何かを手に入れる時、それは全て力づくです。今回も例外ではありません。」

ローランドは、神木から手を離し、ゆっくりとアキラの方に歩き始めた。

アキラは、ローランドが話し合いが通じる相手では無い事を悟った。

ローランド「私に従う物は、生かして差し上げます。奴隷でもなんでも良いというならね。しかしあなた方は、どうやら私に従う人達ではなさそうです。そうしたとしても、いずれ逆らうでしょう。だから。。。此処で死んでいただきます。」

ローランドの顔から、今までの笑顔が無くなった。

そしてゆっくりと右手を前につきだし、手のひらをこちらに向けた。

シュータ「アキラ殿、下がってください。」

シュータはそう言うと、灰のオーラをより強くする。

アキラ「前線はシュータに任せる。残りは援護とディフェンスに専念だ。」

その言葉と同時に、ローランドがアキラに向けて、メガメテオを放った。

シュータはそれを回避して、ローランドの左に回り込む。

アキラとその他の面々は、前方に魔法防御を展開した。

ギガメテオは、魔法防御にぶつかり、少しして消失した。

ローランド「それくらいなら、止めて当然ですね。」

ローランドが言い終わる前に、シュータが斬りかかる。

連続して攻撃するシュータの剣を、軽やかにかわすローランド。

その動きは実に無駄がなく、流れるようだ。

ローランド「なかなかの太刀筋だが、実戦経験が少ないのかな。基本通りの動きで、よめますよ。」

そう言ってローランドは、シュータの背中にショートレンジからエネルギーブラストをぶつけた。

シュータの体が前方に飛ぶが、すぐに足をつき踏ん張った。

そして後ろを見ずに剣を横に振る。

しかしそれもあっさりとかわされる。

シュータ「くっ！」

そこでシュータの体が崩れ、片膝をついた。

ローランド「あれをくらっても、その程度のダメージですか。やりますね。それにそのオーラ。珍しい。」

ローランドはそう言いながらも、無数のマジックミサイルを、全ての人に向けて放った。

魔法防御でいくつかは防げたものの、必ず命中すると言われるマジックミサイル。

全てを防ぎきれない。

防御の弱い雄志軍の何人かが倒れた。

シュータはマジックミサイルを剣で防ぐと、改めてローランドに向かう。

かなりのスピードだが、ローランドのかわすスピードの方が早い。

リュウ（こちらマジックミサイルで援護だ。）

リュウは5本のマジックミサイルをローランドに放った。

ローランドはそれを気にせず、全てをそのまま受けた。

リュウ「やったか？」

命中に一瞬喜んだリュウだったが、ローランドに全くダメージが無いことを悟ると、驚き唖然とした。

ローランド「ゴミが！」

シュータの剣をかわしながら、再度マジックミサイルを放つ。

その数は先ほどより少ないが、全てはリュウに向かっていった。

周りの雄志軍が魔法防御でリュウを守る。

いくつかは防いだが、いくつかはそれを回避し、そしていくつかは貫いて、リュウへと命中した。

リュウ「ぐあ！」

急所はずしたものの、かなりのダメージでその場に倒れた。

リュウ（マジックミサイルでこの威力。。。なんて魔力だ。。。）

リュウは意識を失った。

ローランド「そろそろあなたにも死んでいただきますよ。」

ローランドはそういと、後ろに跳びシュータから距離をとった。

シュータ「逃がすか！」

剣士が、魔法使いとの戦闘で距離をとる事は、不利になる。

シュータは離された間を詰めに行った。

ローランド「遅いです。」

ローランドの前には既に魔法障壁が展開され、シュータの接近を阻んだ。

シュータはすぐに障壁を迂回しようとしたが、横も上も、そして後ろも阻まれていた。

アキラ「いかん。結界だ。」

アキラはすぐに無効化魔法をそれに放つ。

それよりも早く、ローランドが結界の中にギガメテオを放った。

結界の中が一瞬業火につつまれる。

そこにアキラの無効化魔法がぶつかった。

ほどなくして結界は解除されたが、シュータは黒くやけ、その場に倒れていた。

立ち上がろうとしている事から、どうやら生きてはいるようだ。

ローランド「ほう。あれをくらってもまだ立ち上がりますか。」

立ち上がろうとするシュータに、ローランドは、追い打ちをかけようとする。

そこへローランドの左から、強力な魔力が飛んできた。

エネルギーブラストだがなかなかの威力だ。

黙ってくらうわけにもず、ローランドは左を見てその魔力をなぎ払った。

ローランド「全くこの程度の魔法で。。。」

そこまで言って、ローランドの余裕の表情が、少し驚きの顔に変わった。

ローランド「シャナクル。生きていたのか。」

ローランドの視線の先には、確かにシャオの姿があった。

ローランド「あなたが生きていたとは驚きですね。それに此処の人達を助けようとしている。。
。ふふふ。」

ローランドの顔は、再び笑顔に戻っていた。

その時シャオの後方の木々の影には、トキョウの三羽カラスとミサが隠れていた。

グーズリー「お嬢ちゃん、言われたとおりやったが、大丈夫か？」

バレット「ばれるとまずいだらうな。」

ブルータス「その場合は、おそらく。。。」

ミサの魔法だった。

そしてミサのアイデア。

3人に、共同で出来るだけ大きな魔法をローランドに放つよう指示した。

そしてそこに、幻影の魔法で、シャオの姿を映しだしたというわけだ。

ミサ「世界の魔法使いが出てくれば、たとえあいつでも逃げるでしょ？」

安易な考えだったが、それはかなりの効果だった。

ローランドにできたその隙について、シュータが力を振り絞り斬りかかった。

ローランドは油断していたのか、それともシャオに気をとられていたからなのか、その剣をまともに肩にくらった。

ローランド「くっ！」

それでもローランドのオーラが、致命傷を防いでいた。

というより、さほど大きなダメージを負っていないようだった。

力を振り絞ったシュータはそこで倒れた。

ローランドはそれを見ると、とどめを差す事もせず、アキラの方を見て話し出した。

ローランド「今日は一旦帰る事にいたします。またお会いしましょう。」

ローランドはそう言うと、魔力を高めた。

ローランド「それにそちらの木の陰に隠れているお嬢さん。なかなか面白かったですよ。」
その後すぐ、ローランドは大陸間移動魔法で、空の彼方に消えていった。

ミサ「ばれてた？」

シャオの姿がゆっくりと消えていった。

ローランド（シャナクルの幻影。おそらくあの地で生きている。そして、あの地の者達の味方のようだ。神も面白い展開を用意してくれていたものだ。）

アキラ「今日はなんとかミサちゃんのおかげで助かったな・・・」
その後アキラは、シュータほか負傷者の治療を指示し、ヒサヨシに使いを出した。

対応会議

2日後の昼には、シャオ達はトキョウに戻ってきていた。

チンロウだけは、必要だと判断し、南の大陸に残した。

ヒサヨシも既にトキョウに来ており、シャオはヒサヨシに、南の大陸への救助部隊の船を出すことを要請した。

要請を受けたヒサヨシは、すぐに救助部隊を出す事を承諾し、それを実行した。

ドラゴンがいた事や、状況が状況だけに、魔獣討伐は今すぐにはできない。

そして今、皆は会議室に集まっていた。

ローランドが来た事や、ミサの活躍など、アキラはいろいろとシャオ達に話した。

シャオも、南の大陸での出来事や、ナディアとヴァレンの事を皆に話した。

アキラ「そうか。ヴァレン様は東の大陸に。。。」

ローランドがこの地に来た事、そして東の大陸が統一された事から、おそらくは死んでいる可能性が高い事は、皆理解していた。

ナディア「私では役不足で、あまり力になれそうになくて申し訳ありません。」

アキラ「いや、此処にきてくださっただけでもありがたい。それに力になれないなんて事はないでしょう。」

アキラの言うとおりの、いくらここ最近神木の側で訓練しているからとって、トキョウの雄姿軍が軍としては弱い事は明らかだった。

ヒサヨシ「まあなんにせよ、これで受け継ぐ者が2人そろった事になるな。ほんでローランドがおそらくもう一冊の本を持ってる。本を持ってるもんが受け継ぐ者と考えたら、今、受け継ぐ者同士敵対してるってわけか。。。」

そして、神木はそれぞれの陣営に1本ずつ。

南の大陸の神木は既に枯れ始めていた。

神木に回復魔法を試みたが、事態は好転しなかった。

ヒサヨシ「とりあえずどないしょ？ローランドに話し合いは無理やろな。ここの神木を見たっちゅー事は、おそらく早急に手をうってくるやろ。わしの勘やけど、こっちの神木の方が、神木としての能力が高い。後5年、此処で軍を鍛えたら、東のレベルを上回るかもしれへん。それまでになんとかしたいはずや。」

ヒサヨシの言うとおりでと皆思った。

確かに今現在、軍や使い手のレベルは、東の大陸が圧倒的に上だ。

しかし此処で鍛えれば、5年後には同レベルくらいにするのは可能に感じる。

そうなるなら、それまでに大規模な戦争が始まる事は、明らかだった。

これはかなり過酷な戦いになる。

皆、気分が暗かった。

ヒサヨシ「今普通に全戦力でぶつかったら、こっちに勝ち目はほとんどないやろな。そやけど、手が無いわけやない。」

ヒサヨシの言葉に、鬱ぎがちに俯いていた面々は、顔を上げてヒサヨシを見た。

ヒサヨシ「まあ、実行は。。。みんな了解はせえへんと思うけど一応話すは。まず、今の状況から、そのままぶつかったらまあ、負けるやろ。そやけど、相手の戦力を分けて、個別に攻略できれば、こっちにはシャオもおるし、勝てる可能性は高くなるやろ。で、その方法やけど。。。」

そこまで話すと、ヒサヨシは皆の顔を見回して、「ふう〜」と息を吐いた。

ヒサヨシ「みんな。そんな期待せんとして。これはたぶんでけへん事やから。」

ヒサヨシは少し苦笑いして、頭をかく。

シャオ「とりあえず話してみよ。できない事でも、そこから何かヒントが生まれるかもしれね

え〜し。」

シャオがそう言うと、他の面々も話すように促す。

アサミ「そうそう、まずは全部話してよ。」

アサリ「そうですね。それに頑張ればできるかもしれませんし。」

ヒサヨシは皆の言葉に、再び口を開けた。

ヒサヨシ「頑張ってもできる事ちゃうけどな。まあ、ぶっちゃけ、こっちから向こうに攻めるっちゅー事や。こっちの全ての戦力を集中して、それぞれの街を1つずつ攻略するんや。1つの国に向こうは戦力を集中でけへん。その中で少しずつ戦力をそぎ落としていく。こっちは滞在している場所以外は全て放棄や。どっかが攻められても、それは放っておく。それができれば、勝てるやろ？できればやけどな。」

ヒサヨシは話し終わると、椅子の背もたれに背を預け、天井を見上げた。

確かにこの時代の戦争は、戦力として動くのは、1000人や2000人。

多くても10000人を越える事はない。

何故なら、1人の強力な術者いれば、弱い術者が何人いても相手にならない。

相手にローランド、こちらにシャオがいる時点で、最下層の者は戦力にはならないだろう。

そう考えると、その数は更に少なくなる。

そうすれば、昔の戦国時代のように、補給線の確保などは必要なくなり、場所の死守は重要な問題ではない。

人が戦力の全てと考えられるのだ。

でも、やはりヒサヨシの作戦は実行できない。

一般の人々を見殺しにするし、全ての街が戦場になる。

そんな事をできる人間は、もうトキョウにはいなかった。

会議室に、思い空気が流れた。

ヒサヨシ「まあ暗くなってもしゃあないやん？それでもう1つ作戦が、無いでもないで。」

ヒサヨシの言葉に、少し部屋の空気が軽くなった。

それでもまだ、皆は期待半分といった感じだった。

ヒサヨシ「海上で防衛するんや。こっちは1隻の船に全戦力。向こうはおそらく複数の船で数千人規模でやってくるやろ？そこで密かに待ちかまえて、1隻1隻撃破や。わしらの攻撃から船を守れる使い手なんてそんなおれへん。数隻までは減らせるやろ。そこで撤退や。海の上で船を失って、助かる人間もそんなにおらんやろし、助けるにも限界がある。戦力は一気に半減や。その後やったら、そこそこ勝負になるやろ。」

シャオ「なんだよ。こっちの方が現実的じゃん。」

シャオの言う事はもっともだとみな思った。

ヒサヨシ「そやけど、先の作戦の方が、効果も成功確率も圧倒的に高い。海上防衛は失敗したら、わしら全滅や。リスク高すぎるやろ。」

言われてわかった。

そうなのだ。

負けた時、船を沈められた時の事を考えていなかった。

それでも、こちらは白魔術師が多くて、防御には優れている。

船を守りきれぬ可能性は高く感じた。

リュウ「失敗したら終わりかもしれないが、うまくいく可能性は高いと思うが。こちらにはアイお嬢さんがいるし、他にも高いレベルの白魔術師が大勢いる。それに引き替え、向こうは黒魔術師が多い。」

リュウの言う事はもっともだ。

皆納得した。

しかし、これは実行できない。

何故なら、沈めた船に乗っていた人々はどうなるか？

敵とはいえ、ほとんど皆死ぬことになるだろう。

たとえ敵でも、殺すことはできない。

それはこの地の者なら、皆そう思う事だ。

皆また俯き、また思い空気になった。

ヒサヨシ「やっぱりこれもあかんかったか。わかつとったけどな。」

ヒサヨシも、もう作戦はないと言わんばかりに、上を向いて目を閉じた。

シャオ「それでも何か考えないと。こっちは待つだけだと、少なくとも2カ所、神木とタイナンの町を防衛しないといけなくなる。大陸間移動魔法は、使うとかなりの魔力を消費するが、ローランドクラスの使い手が数人くれば、かなりきつい。だからここトキョウと、タイナン2カ所の防衛だ。だから考えないと。」

そうだ。ただでさえ戦力で負けているのに、こちらの戦力を分けるとなると、勝てる確率は更に低くなる。

せめてこちらの戦力を1つにできる作戦が必要だった。

シャオ「せめて海から来る船を、かなり早い段階でわかればな。そうすれば、とりあえずトキョウに戦力を集中しておけばいい。海からくる事がわかれば、その時にタイナンに移動する事も可能だ。ローランドの性格だと、自ら来る事はおそらく無い。慎重な性格だからな。時々大胆だが、ちゃんと逃げ道はつくる奴だ。戦力の半分を、トキョウかそれともタイナンか。どちらかだと思う。」

ヒサヨシ「それやったら、わしの妖精やったらなんとかなるで。空に行くのが得意な奴が何人かおる。」

シャオ「そうなのか？だったらそれしかないだろ。」

ヒサヨシ「でもそれでも戦力的に、勝てる可能性は低い。それにこっちは、敵をなるべく殺さんように戦う。かなりきついな。」

それでも、その作戦が一番現実的だった。

ヒサヨシ「それじゃ早速海上の見張りに、妖精のサンゲンとコクシを送るは。それでや、もう1つせなあかん事がある。それはこっちの戦力を高める為に、国内から優秀な奴を捜す事や。」

ヒサヨシの言うことはもっともだった。

このまま今の人員を訓練しても、人数的に東の大国には到底及ばない。

更には上位の使い手の人数も、圧倒的にあちらが勝っている。

ヒサヨシ「わしらが国土を広げてきたんも、優れた人材を集める為でもある。そしてチャイルドの街を焼いたんも、もし優秀な奴がおったら生き残るやろうと考えてやった節もあんねん。在野の人材を捜すんは、思た以上に難しくてな。結局みつかったんは、シャオ、おまえさんと、アサリとアサミだけや。トキョウにきて、シュータとアイも出会ったけどな。なんかそのへんで策や方法があるもんはおらんか？」

ヒサヨシは皆を見回し、人材を捜す手段はないかと尋ねた。

シャオ「カンセイに占領された街々は、形としては今トキョウの傘下に入った事になるから、雄志を募れば人数は集められそうだな。問題は東の特殊部隊、エリート部隊、指揮官クラスと五分に渡り合えるマスタークラスの使い手を集める事。俺様の見たところ、その域になってる、又は今後行けそうなのは、俺とヒサヨシ、ヒサヨシの妖精の何人か。そしてアイとシュータ、アサリとアサミくらいだろう。まあアイは戦力とはならないし、シュータとアサリ、アサミは今一歩だ。少なくとも良いから、とにかく潜在魔力の大きい奴か、能力の高い使い手が仲間ほしいな。」

シャオは腕を頭の後ろに組んで、天井を見上げた。

シュータ「それなら、バトル大会を開くのはどうでしょうか。そういう風にして優秀な人材を集めるとい話を聞いた事があります。」

ヒサヨシ「それや！！」

シャオ「それだ！！」

シュータの提案に、シャオとヒサヨシは同時に声を上げた。

アキラ「しかし、そう言った大会で人を集めるとなると、それなりの金が必要になる。それなりの賞金を出さねば、人は集まらないのではないかな？」

ヒサヨシ「それは大丈夫や。だてに国土広げてきたわけやない。まあ沢山の命と引き替えに集めてきた金やけど。」

話はバトル大会をすることに決まった。

場所は、トキョウの町の東の荒野。

参加者は、中央大陸の東半分、トキョウ傘下の街全てから集める。

日時は1月20日。約2週間後だ。

全ての街に掲示するのに1週間はかかる。

一番遠い街からは、ここトキョウの町まで、普通に歩いて1ヶ月はかかるが、1週間以内に集まれないなら、大した使い手では無いと判断できる。

潜在魔力を持つ者は、訓練してみないとわからないので、今回は除外だ。

それにあまり時間はかける事はできない。

こうしている間も、いつ戦いが起こるかわからないのだ。

ヒサヨシは早速2体の妖精を召喚し、タイナンの町に向かわせた。

更に他何体かの妖精を召喚すると、トキョウ傘下の街々に、大会の掲示へと向かわせた。

シャオ「ヒサヨシはいったい何体の妖精を召喚できるんだ？」

みんな思っていた疑問だ。

それをシャオが口にした。

ヒサヨシ「えっと。12体やな。まあ戦闘に役にたたない奴もおるけど。召喚してへん妖精は後3体や。一応みんな紹介しとこか。」

ヒサヨシはそう言うと、全ての妖精を召喚した。

そして名前と、それぞれの能力を皆に説明した。

シャオ「へえ～凄いな。面白い能力をもった奴もいるし。」

シャオも驚いたが、他の皆はもっと驚いているようだった。

その能力の中には、常識を越えるものが多数あった。

中でもスウアンと言う妖精の蘇生治癒能力は、今のアイ以上だった。

アキラ「それでは会議を終了する。皆よろしく頼む。」

アキラの言葉に、皆席を立ち始めた。

シャオ「ちょっとまってくれ！」

シャオは部屋を出ていこうとする面々を止めた。

リュウ「シャオさん、どうしたのかな？」

扉の前でリュウが振り返る。

他の面々も、シャオを注目した。

シャオ「アルテミスに行った時、家から少し持ち帰ってきたんだ。」

シャオはそう言うと、袖から沢山のリングを取り出し、アキラの前に並べた。

アキラ「これは？」

沢山のリングを前に、アキラは少し驚いた顔でシャオに尋ねた。

シャオ「俺のオヤジは、魔法アイテムのコレクターで、魔法アイテムの制作者でもあったんだ。これはオヤジが作ったリングだ。アサリとアサミの持ってる剣は、偶然見つけたものだけどね。そしてアイの持っているシンボルロッドは、制作中に偶然できたオヤジの最高傑作。」

シャオは言いながら、リングを分けてゆく。

リングはいくつかのグループに分けられた。

シャオ「リングはさほど強力なものではないけど、少しは役にたつと思う。それぞれの能力にあったのを使ってくれ。」

シャオはリングの説明を付け加え、皆を見回した。

リュウ「これは凄い。」

シュータ「私はこれが良いな。」

面々はそれぞれに、自分に必要だと思われるリングを手を取った。

シャオ「まあお守り程度の能力だけだね。」

こうしてシャオはリングを皆に渡し、会議は終了した。

霧の晴れた黒海

シャオがトキョウに戻ってから10日が過ぎた。

東からの進行も無く、バトル大会の掲示を見た者も数人集まってきた。

南の大陸からは、避難してきたチンロウ達がトキョウに帰ってきていた。

日々の訓練も順調に行われる中、中央大陸の最西の国アトランティスが、何者かの攻撃を受けているらしいニュースが飛び込んできた。

進行してきた者達は、海から来たという話もあった。

中央大陸の西の海。

そして東の大陸の東の海は、黒海と呼ばれる海。

理由はわからないが、赤道の帯の中でも、その海には黒い霧が常にかかっていた。

大昔には霧はかかっていなかったと言われているが、今ではそんな形跡は全く見あたらなかった。

よってこの海は航行不可能と言われ、誰もこの海には出る事は無い。

それなのに海からと思われる者達の進行により、アトランティス国の最西の街、オランは既に陥落していた。

シャオ達一同は、神木の元に集まった。

シャオ「海からと言う事は、おそらくローラシア者だと判断できる。どうやって黒海を渡ったかはわからないが、おそらく間違いないだろう。この短期間で、すでにオランの街が陥落したという事からもまず間違いない。」

ヒサヨシ「まさか黒海渡ってくるなんて、予想でけへんな。この際どうやって渡ったかは問題やない。今後どうするかやな。」

バトル大会の事も含めヒサヨシは皆の意見を待った。

シュータ「バトル大会は、このまま開催するべきでしょうな。まだこの地に事態が切迫しているわけでもない。」

リュウ「それに今更中止したら、なにかしら反感を抱く者もでてくるでしょう。」

アキラ「まあバトル大会はそのまま開催するとして、問題は西の事にどう対象するのだが、西に戦力を向けるのも危険だ。」

一同口々に意見を述べた。

そこに1羽の緑の鳥、いやヒサヨシの妖精リュウイーが戻ってきた。

リュウイーは高速で空を翔る鳥型の妖精で、中央大陸横断も数時間で成す。

バトル大会掲示の任も行った。

日頃は、西のタァスーシとの連絡にも活躍している。

そして今、西のオランへの偵察より帰って来ていた。

ヒサヨシ「なんかわかったか？」

ヒサヨシは舞い降りてきたリュウイーに尋ねた。

リュウイー「オランハ、ローラシアノブタイニヨリカンラク。キボハダイ。オソラクハンブンチカイセンリョクキテル。ソレトコッカイ。クロノキリナカッタ。」

一同驚いた。

ローラシアの部隊の事はある程度予想されていたが、それよりも黒海に霧がない事が、皆を驚かせた。

シャオ「黒海に霧が無い？どういう事だ？」

ヒサヨシ「黒海が黒海じゃなくなってるちゅー事か。なんでや？」

アキラ「ふむ。ローランドが何かしたのか。それともたまたまなのか。」

今はそれを考えている時でも無かったが、それでも皆考えさせられた。

シャオ「昔、黒海は青い海と呼ばれていた話がある。人々が黒海に行き着いた時、その海の美しい青に驚いたからだ。それが100年もしない間に、黒の霧がでるようになり、名前を黒海にしたと、

ヴァレンのじいさんが言っていた。」

シャオはそこまで話すとアイが口を出した。

アイ「それって！もしかして魔界の門の開閉と関係してるんじゃない？」

シャオの話を聞いて思ったアイの仮説。

それは正に的を得ている。

確かに開門と閉門の時期に一致する。

おそらくは魔界からの魔力が、何かしら影響しているのだろう。

その魔力によって、南の大陸の周りの海が荒れる海になっていた事、そして今それが無い事。

黒の霧が晴れても、何も不思議では無かった。

シャオ「また門を開放するか？」

ヒサヨシ「今更やな。既に半分の戦力が、この大陸におる。」

一同神妙な面もちで口を閉ざした。

しばらくの間、無言の時間がながれる。

どうすれば良いのか考えているのか。

ただ絶望しているのか。

それでもそんな中ヒサヨシだけが、軽い口調で話だした。

ヒサヨシ「でももしかしたら、西に上陸したローラシア部隊、そう簡単にはカンセイには入って
けえへんかもしれへんで。正確には、入ってこられへん事態に遭遇するかもって事やけど。」

シャオ「どういう事？」

ヒサヨシ「確かに西には大した大国は存在せえへん。好戦的な国も少ない。そやけどベールに包
まれる場所が存在するねん。わしが西に侵攻せえへんかったんも、それが理由や。城塞都市イニシエの
存在や。」

皆、「何それ？」といった面もちで、ヒサヨシをただ見ていた。

城塞都市イニシエ。その存在は、近隣の国なら衆知している。

他国と一切の交流をもたない、エベス山脈に囲まれた地に存在する都市。

都市と言ってもさほど大きなものではないという話だが、過去そこに侵攻した国々は、全てその侵攻を
阻まれている。

商人や情報屋ですら、その行き来を許さない。

街全体が20mを越える高い壁に覆われ、中を見る事はできない。

壁はあらゆる攻撃に耐え、上空からの進入も結界に守られた、正に不落の城。

ヒサヨシはイニシエの話をすると、「まあそんな感じや。」と言って説明を終えた。

シャオ「うん。ローランドの事だ。全てを傘下に治めてから、此方に対処する可能性は高い。でも
本当にそんな都市が存在するのか疑問だけだな。」

シャオは半信半疑だった。

それにこの中央大陸に、ローラシアの部隊を退けられる戦力があるはずもない。

それがシャオの考えだった。

そこにシュータが口をはさんだ。

シュータ「シャオ殿、その話はおそらく本当です。そしてその力は、東の大陸の者達に負けない
力があると言われてています。」

シュータは元々、中央大陸の西の国、アトランティスの東、イタリー国の出身だ。

シャオ「そう言えば、シュータはイタリー国出身だったな。イニシエの事、知ってるのか？」

シャオはシュータの言葉に、少し期待を抱いた。

シュータ「ええ。私はイタリーの騎士団に所属していました。父が騎士団長だった事もあり、情
報は確かだと思われま。我が母国もそれが原因で、イタリー国の北にあるフレンチ国との争いが起
りました。イタリー国から東へ行く為には、2つのルートが存在します。いや、エベス山脈がある事
から、2つしかないと言った方があっているかな。北のルートと南のルート。その南のルート上にイニ

シエがある。しかしイニシエを通って行くには危険が大きい事から、北のルートを確認したかった。その為、フレンチ国との争いが起こりました。そこまでして南のルートを避ける理由。それがイニシエの巨大な力。決してこちらに侵攻してくるわけではないですが、その存在はイタリーにとっては邪魔でした。一度イニシエ攻略を試みた事もあったと聞きますが、なんとか逃げ帰った人々の話は、皆同じです。二度と手を出してはいけないと。イタリーの騎士団の中には、東の大陸の人間もいました。その者も、同じ事を言っていたらしい。」

そこまで話を聞くと、皆イニシエの存在は現実の話だと理解した。

シャオ「そんなのが存在するのに、何故皆知らない？」

シャオの質問ももつともだ。

それだけの戦力のある街。

話にのぼらない事が不思議だった。

シュータ「イタリーでは、王と側近、そして騎士団長くらいしか聞かされていない話です。まあ、こちらに侵攻してくる事もないし、イニシエの話はタブーとされていました。とにかく南のルートは、城塞都市イニシエがあるから使えない。それだけが世間に広まっている感じです。」

ヒサヨシ「でもまあ、ローラシアの侵攻を他人任せっちゅーのも、なんかあれやな。それにシュータ、イタリーがもうすぐ戦場になるで。助けにいかんでもええんか？」

ヒサヨシの質問に、少し間をおいてシュータがこたえた。

シュータ「私がイタリーに戻る事はできません。私を受け入れてはくれないでしょうから。確かにイタリーの人々がやられているのをだまって見ているのは辛いですが。。。」

シュータだけではない。

皆、イニシエ任せにする事で、周りの国々の沢山の人々が、それまでに戦争に巻き込まれるだろう。

それをだまって見ているのは辛い。

しかし、今自分たちがそちらに助けに行けば、この地にローラシアの軍が侵攻してくる事が予想できた。

アサリ「とにかくわたくし達は、今できる事をするしかなさそうですね。」

アサミ「うん。とりあえずバトル大会だね。」

一同気持ちは同じだった。

バトル大会

1月20日がやってきた。いよいよバトル大会の日だ。

アサリとアサミも参加する事になっていた。

参加者の力を引き出す為に、それなりの使い手の参加が必要だと考えたシャオの命令だ。

アサミ「えっ？私たち参加しても良いの！！やった～！！」

アサリ「賞金もいただけるのかしら。」

2人は凄く乗り気だった。

賞金は、3年は生活できる大金だった。

その大きさが、2人を更にやる気にさせていた。

この世界のお金は全国共通だった。

どこでつくられているのか、いつ作られているのかわからないお金だが、何故かしっかりと流通していた。

偽造しようとする者もいたが、それはできなかった。

そのお金に触れると、何故かそれが偽造された物か、正規のものかがわかるようになっていた。

お金に何かしらの魔力があるのだろう。

まあなんにせよ、この世界の不思議の1つとして、どこからともなく流通するお金があった。

いよいよ大会が始まった。

武器は剣の代わりに木刀、攻撃魔法は、エネルギーブラストとマジックミサイルに限定されていた。

剣や強力な魔法により、首を切られて死亡した場合、蘇生は不可能だからだ。

でも原型をある程度保ってさえいれば、死後早い段階なら妖精のスウアンが蘇生できる。

アイも試した事はないが、おそらくそれくらいできる域にあった。

勝敗判定は、シャオとヒサヨシが担当する。

このバトルは当初、このルールだと剣士が圧倒的に不利だと思われていた。

それでも意外にも勝ち抜く者は、完全勝利で剣士が多かった。

雄志軍の回復部隊は、治療にいそがしい。

アイとスウアンは、いざという時の為、死者がでない限りは待機状態で、今のところ出番は無かった。

アサリとアサミも順調に勝ち抜いた。

そんな中、1人目立つ存在があった。

シャオ「あいつなかなかやるな。」

シャオの視線の先にいるのは、シャオと同じくらいの歳の男、名前はムサシと言う人物だった。

ムサシ「おらおら～金じゃ金～！！優勝賞金はわしのもんじゃ～！！」

そういうムサシの剣は、無茶苦茶な太刀筋だが、確実に相手を捕らえて、一瞬で相手を地にたたきつけた。

ムサシ「おっしゃ～！！後2つ～！！」

これでムサシの準決勝が決定した。

次の相手はアサミだ。

アサミ「あの人やるわねえ～」

アサミの目からはやる気が満ちあふれている。

アサリ「アサミ頑張ってくださいね。」

アサリの応援に、俄然やる気のアサミは、木刀を振って戦いに備えた。

その後しばらくの休憩の後、アサリが一足先に決勝進出を決めていた。

アサリ「次はアサミですね。」

アサリの言葉に、ブルツと体を震わせ、アサミは笑顔を残して決戦の場に歩いて行った。

ムサシ「うっわあ～！今度はこんな可愛いお嬢さんが相手かいな。手加減してやりたいけど、金

の為や。本気でいくでえ〜！」

ムサシはそう言って、アサミに木刀と突きつけた。

アサミ「望むところよ。そして勝つのは私よ。」

アサミも対抗して木刀を突きだした。

シャオ「あ〜では、準決勝2戦目を開始する。始め！！」

シャオの声を合図に両者戦闘態勢に入った。

ムサシ「うお〜！！金じゃ〜！！」

そう言いながら、ムサシはアサミに向かっていった。

その距離はすぐにお互いの射程距離になる。

ムサシの無茶苦茶な太刀筋が、アサミを襲う。

アサミはそれをうまく受け流す。

しばらくはその状態が続いた。

アサミ（おねえちゃん並にパワーがある。それに読めない剣の流れ。強い！）

時々ムサシの木刀がアサミをかすめる。

アサミの服の切れ端が、飛び散った。

アサミ（ええ〜切れてるう〜木刀なの？）

ムサシ「わしに木刀持たせたら、それは鋼の剣と同じじゃ〜！！ははは〜！！」

ヒサヨシ（まずいか？）

そう思ったヒサヨシは、アサミに声をかける。

ヒサヨシ「アサミ！！」

それでも返事は明るい声で返ってきた。

アサミ「大丈夫！！やらせて！！」

その言葉に、シャオは戦いを止めず、そのまま続けさせた。

アサミ（接近戦は不利だな。魔法で勝負だ。）

アサミは隙を見て後ろに跳んだ。

ムサシ「にがさへんでえ〜金〜！！」

しかし間をとったアサミに、魔法を展開する時間が生まれた。

ムサシの向かってくる先にマジックシールドが展開される。

ムサシはそれを回避しきれず、ぶつかって倒れた。

ムサシ「なんや魔法かい！！」

起きあがるムサシに向けて、アサミはマジックミサイルを発動した。

その数は数十本。

全てがムサシに向かってゆく。

ムサシ「ほんまかい！！」

すぐさま立ち上がったムサシは、高速の太刀さばきで、マジックミサイルをなぎ払った。

アサミ「やるわね。」

それでも数本が、ムサシの足と手に刺さった。

ムサシ「痛いやんけこんちくしょう。」

それでもムサシにあまりダメージは見られなかった。

ムサシ「なかなかやんけ。わしにダメージ与えるとは、おもしろなってきたで〜！！」

アサミ「うそ〜元気だよあいつ。」

再び戦闘が再開される。

防御魔法を駆使して間をとるアサミ、それを回避しつつ接近するムサシ。

一進一退の攻防が続く。

太陽が真上にある頃に始めた戦いは、太陽が赤くなり始める頃まで続いた。

両者魔力もつき、体がフラフラし始めた。

アサミ「あ、あん、た、やる、わね。次で、きめ、る。。。はあはあ。。。」

ムサシ「おまえもな。。。女、にしておくには、もったい、ないな。。。はあはあ。。。」

アサミは最後の力を振り絞り、手に魔力を集めた。

黒の魔力が球状に集まる。

ムサシもそれを見て、アサミに向かっていった。

ムサシが木刀を振り上げる。

アサミが魔力をムサシに向ける。

木刀を振り下ろす。

魔力がムサシに向かう。

木刀に秘めた魔力にぶつかったアサリの魔力は、爆発をおこし、爆風は両者をそれぞれの後方に飛ばした。

両者倒れて動かなかった。

シャオ「引き分けだな。」

もう疲れたと言った感じで、シャオは一言いった。

アイ「アサミちゃん大丈夫！！」

アイはアサミに駆け寄った。

スウアンもムサシに駆け寄った。

その後、優勝はアサリに決定し、バトル大会は終了した。

大会としては盛り上がったが、成果は期待よりも少なかった。

城塞都市イニシエ

次の日から、バトル大会に参加した面々の大部分は、雄志軍に参加する事となった。

そしてアキラは、ムサシに協力を求めている。

アキラ「是非お願いしたい。どうか我々と共に、ローラシアの戦争を止める事に協力していただけないか。」

ムサシ「そんなんゆわれてもなあ〜わしは金を稼いで悠々自適の生活できればええおもとるし。」

ムサシはあまり乗り気ではないようだった。

シャオ「でもさ、金があっても、ローラシアが世界を統一したら、悠々自適なんて無理じゃない？ローラシアの民は皆、かなり苦しい生活を強いられている。もしムサシの住む場所がローラシアに占拠されたら、ムサシがいくら金を持っていても、まともな生活はできないと思うけど。」

ムサシ「それやったら、他にいけばええやん。」

シャオ「だから、この地球上全てがローラシアに占拠されるんだって。」

シャオの言葉に、よくわからない顔をしていたムサシだったが、突如驚きの顔になった。

ムサシ「なんやと〜！！誰にことわってそんな事すんねん。そんな奴は、わしがゆるさんで！！」

シャオ「だから、一緒にその悪い奴を倒そうよ。」

シャオは満面の笑顔でムサシを見た。

ムサシ「あ。。。でもなあ〜わしはタダで働くのはいやや。報酬はあるんやろな。」

ムサシはニヤッと笑って、親指と人差し指で円を作った。

ヒサヨシ「その点は約束するは。わしが責任を持って払うで。」

ヒサヨシの言葉にムサシは手を打った。

ムサシ「よっしゃ！！交渉は成立や。じゃあ、ローラシアが攻めてきたら呼んでくれ。」
そう言って立ち去ろうとするムサシの手をつかみ、ニコニコとした笑顔でアサミが言った。

アサミ「じゃあこれからみんなで特訓よ。今のままじゃ、勝てない相手だからね。」

ムサシ「げ？そうなん？」

しぶい顔をしたムサシを、アサミは引きずっていった。

ムサシ「だ〜ま〜さ〜れ〜た〜！！」

引きずられてゆくムサシを、皆は笑顔で黙って見送った。

バトル大会からは既に1週間が過ぎていた。

既にイタリー国はローラシアの傘下に入っていた。

ローラシアの第二部隊隊長「イーグル」は、更に東へと軍をすすめるべく、イタリーの王と話をしていた。

イーグル「で、ここから東に行く為には、エベス山脈を越えなければならない。そのルートが北と南に1つずつか。でも南には城塞都市イニシエがあるから、北から行けど、そういう事だね。」

イタリーの王「そうです。あなた方でも、イニシエを抜けて行くのは危険です。はい。」

イーグル「なんだとおら。俺達でも突破は無理だったのか？」

イーグルはイタリーの王の胸ぐらをつかんでにらみつけた。

イタリーの王「いえ、あなた方なら大丈夫だと思われるのですが、無理はする必要はないかと。はい。」

イーグル「俺達は急いでいるんだ。そんな遠回りできるかっての。南から行くから案内しろよ。」

イタリーの王「はい。わかりましたでございます。はい。」

イタリアの王は、イーグルの言うがままに、その要求を受け入れるしか無かった。

イーグル「あとこの国の税は、70%にしろ。民なんざ生きていだけで良いんだ。早急にやれ。逆らう奴らは、俺達がぶっ殺してやるから。」

イタリアの王「はい。言われたとおりにさせていただきますでございませう。はい。」

イタリアの王は、すでに王の威厳も何もなかった。

イーグル（でもまあ、もうすぐ第四部隊と第八部隊も合流するしな。それまでは念のため待つか。）

それでもイーグルは、一応はイタリアの王の話も考慮して、侵攻は体制を整えてからにすることにした。

中央大陸に入っているローラシアの部隊は、第二部隊、第四部隊、第六部隊、第八部隊、そして第十部隊の5部隊だった。

内アトランティス国から北に、第六部隊と第十部隊が侵攻。

そして東にその他が向かっていた。

次の日には、予定していた部隊が合流した。

北へ向かった部隊は、これからフレンチ国攻略に向かい、第二部隊他は、イニシエに向かう事になった。

1週間後、第二部隊を含む3部隊は、イニシエの壁の前に来ていた。

イーグル「これがイニシエの壁か。」

イーグルは第四部隊隊長「ニコル」と第八部隊隊長「エヴァー」に話しかけた。

ちなみに部隊長同士では、その部隊番号の小さい方が上位となる。

ニコル「こんな大規模に壁に囲まれた街は初めてですね。」

エヴァー「なんでもいいわ。さっさとぶっこわしましょうよ。」

ニコルはニコニコと壁を見上げ、エヴァーはどうでもいいと言った感じで石を蹴って遊んでいた。

イーグル「お出迎えも無しか。こんな警備で、よくも城塞都市と言えたな。」

イーグルはそう言うと、鼻で笑った。

ニコル「イーグル、そろそろいきましょ。エヴァーがいらいらしてきましたよ。」

ニコルはニコニコとした笑顔のまま、チラッとエヴァーの方を見るよう促した。

イーグル「そうだな。あいつが暴走すると止めるが面倒だ。」

イーグルは苦笑いすると、全ての部隊の面々に声を上げた。

イーグル「まずは入り口、又は壁を破壊する！後は隊長の指示に従え。第二部隊は門を攻撃。一斉にエネルギーブラストだ！！」

イーグルの言葉に、待ってましたとエヴァーも声を上げた。

エヴァー「私たちはとにかく壁を攻撃。打って打って打ちまくれ！！」

ニコル「我々は他の隊の補佐に回ります。呼吸を合わせて援護を！」

それぞれの指示に、部隊の面々は攻撃を開始した。

門や壁にぶつかる魔力が爆発し、辺りに大きな音を響かせた。

その頃、イニシエの長「シュウカ」は、庭の木につるしたハンモックで寝ていた。

遠くから聞こえる爆発音に、シュウカはゆっくりと目を開ける。

シュウカ「うるさいなあ〜お〜い！新撰組！ちょっとおっぱらってきて！よろ〜！」

そう言うと、シュウカは再び目を閉じる。

するとそこにシュウカに声をかける者がいた。

声をかけたのは、イニシエの忍者といわれる2人の女性、「サスケ」と「コジロウ」だ。

この名前は本名ではない。

シュウカがわかりやすいからと言って、勝手につけた名前だ。

流石に2人の女性も文句を言ったが、シュウカがそう呼ぶから、皆にはそれで衆知されていた。

サスケ「シュウカ様、寝てる場合じゃないですよ。」

コジロウ「そうです。今回の相手はかなりの使い手がわんさか来てますよ。」

2人の言葉に再び目を開けたシュウカは、寝ぼけ顔で、2人を見た。

サスケ「にこ〜」

コジロウ「にこ〜」

2人は言葉に出して笑顔を作った。

シュウカ「ふぁ〜」

シュウカはその顔をみると、体を起こして伸びをした。

シュウカ「新撰組だけじゃ無理かのお〜？」

シュウカはまだ寝ぼけているようで、年寄り言葉で話した。

サスケ「うんうん。無理無理。私たちも行きますから、早く来てくださいね。」

コジロウ「そうです。シュウカ様よろしくお願いします。」

2人はそう言って、スッとその姿を消した。

正確には高速でその場を去った。

シュウカ「久しぶりにかなりの使い手がきたみたいねえ〜ぼくちんもいっちゃうかあ〜」

シュウカは眠い目をこすりながら、それでも魔力を高めて、飛翔した。

壁の外、門の前では新撰組の面々が、ローラシアの部隊を相手にしていた。

新撰組は、このイニシエの警備部隊で、剣の使い手達が集まっている。

中でも総長の「コンドー」副長の「トシゾー」そして「ソーシ」と「サイトー」は強力な剣士だった。

ちなみにそれぞれの名前は、シュウカが勝手につけた名前だった。

コンドー「今回の相手は、かなりやばくねえか？」

トシゾー「やばいのは、あんたの顔だ。」

ソーシ「やばいのはシュウカの頭だ。」

サイトー「みなさん、わけのわかんない事言ってないで、敵を斬ってください。」

新撰組の4人は、敵に囲まれながらも、詰め寄る敵に対処していた。

コンドー「数が多すぎるぞ。ホントはあっちの壁を壊そうとしてる奴ら、なんとかしないといけねえんじゃないか？」

トシゾー「ああ、あちはサスケとコジローがなんとか防ぐだろ？ほっとけほっとけ！」

ソーシ「そうそう、壁が壊されて困るのはシュウカだし、関係無いよ。」

サイトー「ソーシさん、あんたホントに味方ですか!？」

無駄話をしながらも、集まる敵を斬ってゆく実力はかなりのものだった。

壁の上には到着したサスケとコジロウが、息をつく間もなく、マジックシールドを展開した。

サスケ「省エネで壁を守るわよ。」

コジロウ「はいサスケちゃん。」

サスケ「サスケちゃんゆうな!!」

壁の上の2人も無駄口をたたきながらも、敵から壁に放たれるエネルギーブラストを、うまく防いでいた。

イーグル「なかなか手こずるな。かなりの使い手がいるようだ。」

イーグルの言うとおりの、ローラシアの部隊は手こずっていた。

それでも少しずつ新撰組の下っ端の数を減らしていた。

ただ、それ以上にローラシアの部隊に被害がでていたわけだが。

ようやく壁の上に、シュウカが到着した。

サスケ「シュウカ様遅いよ〜敵の数が多すぎ。対処できないよ〜」

コジロウ「そうそう、もう寝ぼけてる場合じゃ無いですよ。ちゃっちゃとやっちゃってください。」

2人の言葉も、聞いているか聞いていないのかよくわからない状態で、シュウカは目をこすった。

シュウカ「あ〜。。。じゃあ手榴弾でもばらまくかあ〜ふふふ。。。死ねや新撰組！！」
「お〜い。」と言う2人の言葉も聞かず、シュウカは壁の上から、下で戦闘している者達へ向けて手榴弾を投げ始めた。

手榴弾とは、魔力を凝縮した小さな黒い固まりで、少しの時間をおいて爆発する。

シュウカオリジナルの魔法でそれを具現化し、相手に投げつけるものだ。

たちまち壁の前で爆発が起こる。そこいらじゅう爆発だらけだ。

イーグル「なんだ？味方関係なく爆破かよ！」

イーグルは一旦後ろに引いた。

コンドー「相変わらず、味方関係なしだな。」

トシゾー「ああ、それだけ信頼されてるって事だと思おう。く〜！」

ソーシ「シュウカさま〜！手加減してしてくださいよ〜うわ〜！！くそお〜シュウカの野郎ゆるさねえこんちくしょう！」

サイトー「もうどうにでもしてください。他の面々は、門の中に避難してくださいねえ〜」
4人を残して、他の新撰組メンバーは、門の中へと避難した。

4人はなんだかんだと言いながら、爆発を利用してうまく相手をたおしてゆく。

かなり洗練されたコンビネーションだった。

コンドー「これ、コンビネーションって言うの？」

トシゾー「ああ、言うんじゃね？言わなきゃやってられんでしょ？」

ソーシ「とにかくシュウカの奴死なす！ぜってえ〜死なす！」

サイトー「はいはい。口ではなく手を動かしましょうね〜」

なんだかんだ言っても、かなりの敵を倒していた。

ニコル「あそこですか。」

壁の上のシュウカに気がついたニコルは、飛翔で上空へと飛び出した。

そして少し辺りを見た後、シュウカの前へと降りてきた。

ニコル「なかなか面白い魔法ですね。」

ニコルは笑顔でシュウカに話かけた。

シュウカは何もこたえないで、その間もポンポン手榴弾を投げ続けた。

ニコル「もうしわけないですけど、あなたは邪魔ですから、死んでいただきます。」

ニコルは魔力を高めた。

サスケ「私たちは、そろそろ。。。」

サスケは小声でコジロウに言うと、2人はその場から離れた。

ニコルはシュウカに向けて、メガメテオを放った。

シュウカはようやく手榴弾を投げるのをやめ、ニコルを見た。

目の前にはメガメテオが迫っていた。

回避は不可能に見える。

ニコルは命中すると確信し、シュウカに向かって跳んだ。

次の瞬間、シュウカの周りを結界が包み、メガメテオを遮断した。

ニコル「何？」

ニコルはメガメテオを受けて、ダメージを受けるであろうシュウカに、追い打ちをかけるべく向かっていたが、それを阻止され一瞬動きが止まった。

シュウカはその隙を見逃さず、逆にニコルに接近し剣で斬りつけた。

ニコル「くっ！」

ニコルはそれをかわそうと体を横へと跳ばす。

しかしシュウカの剣が、蛇のように曲がり、ニコルの足を捕らえて斬りつけた。

ニコルは足を斬られ、その場に倒れた。

シュウカの剣は、伸縮自在で波をうつように曲がる、魔法の剣。

ウェヴスオードと呼ばれる剣だ。

ちなみに、新撰組のリーダー格4人の持つ剣も魔法の剣。

形は片刃で、刀と呼ばれるものであった。

コンドーの持つ刀は、黄色いオーラで覆われ、振れば爆発を起こす地の刀。

トシゾーのは赤いオーラで覆われ、対象に火をつける炎の刀。

ソーシのは青いオーラで覆われ、斬りつけた場所を凍らせる氷の刀。

そしてサイトーのは緑のオーラで覆われ、電撃を加える風の刀だった。

ついでに言えば、サスケとコジロウの持つ剣は、忍者刀といわるマジックスオードで、使用者の魔力を高めるものだった。

ニコル「あの剣はウェヴスオード？」

ニコルがそう声を出した時、目の前にシュウカが立ちはだかる。

強大な魔力が感じられた。

ニコル（やばい！）

そう思ったニコルは、飛翔で空へと逃げようとする。

しかしそれよりも早く、シュウカのテラボルトがニコルに落ちた。

ニコル「ぐああ！」

それでもニコルは何とかレジストして、空へと逃げた。

ニコル「強い。私だけでは勝てない。いや、あの強さは精鋭部隊以上だ。」

ニコルは意識をなんとか保って、第四部隊の後方へとたどり着き、そこで倒れた。

シュウカ「あれをレジストしてくるか。つよ〜！」

シュウカはそう言いながらニコルを見送ると、再び手榴弾を投げ始めた。

イーグル「ニコルがやられた？何もんだあいつは。この中央にあれほどの使い手がいたとは。それにこいつら。強い。」

イーグルは今トシゾーと剣を交えていた。

イーグル「剣の腕は五分。しかもあの魔法の剣。分が悪いか。」

イーグルの頭では、一旦引くことを考えていた。

エヴァー「こいつら強い。この爆破の中、関係なくやりやがる！」

エヴァーの相手はソーシ。

エヴァーは押されていた。

ソーシ「ちゃっちゃと終わらせるよ〜！僕はもうつかれたよ。おまえもつかれたろ〜」

ソーシは涼しい顔をして、エヴァーを余裕で相手していた。

エヴァー「イーグル！！一旦引くよ！！」

イーグル「ああ、俺も引く！！」

そう言うと2人は同時に部隊の後ろへと姿を消した。

すると部隊全体が、イニシエの壁から離れた。

コンドー「ふう。やっと引いてくれるか。」

トシゾー「なかなかやる奴だったな。」

ソーシ「ああ、天使が見える〜」

サイトー「ソーシさん、まだ生きてますよ〜」

そう言う新撰組の4人は、ローラシア部隊の方を見て、並んで立っていた。

イーグル「とりあえず出直す。今度はこうはいかんからな！！」

イーグルの捨て台詞に、ローラシアの部隊は来た道を帰っていった。

コンドー「久しぶりで手こずったな。」

トシゾー「これくらいの方が、やりがいがあるかもな。」

ソーシ「トシさん本気で言ってるの？バカじゃねえの？楽な方が良いにきまってんじゃん。」

サイトー「まあまあ、トシゾーさんも、こう言わなきゃやってられないんでしょ。」

各々言いたい事を言いながら、門から中へと入っていった。

その頃、ローラシアの帰っていった道の方から爆発音がいくつも鳴り響いた。

＊イーグル＊「こんなところにトラップ？」

ローラシアの部隊は、壊滅状態だった。

この爆破は、逃げる敵をただでは逃がさない、サスケとコジロウの地雷魔法だった。

地雷魔法とは、魔力を圧縮したものを地中にセットし、そこに人の魔力が触れると爆発する魔法だ。

気をつければ回避可能だが、爆発はかなり大きなものだった。

しかも油断している者に突如襲う爆発。防御も間に合わず効果は絶大だった。

逃げ帰ったのは、各部隊長と数百人だけだった。

3部隊で4500人、そのほとんどがやられた、ローラシア大国最大の敗戦だった。

ちなみに、勝てないと思ったらすぐ撤退、又は死んだふりの新撰組は、死者は0、重軽傷者多数だった

。

イニシエの協力

ローラシアがイニシエに大敗してから1週間、第二部隊隊長イーグルは、本国に援軍要請の使いを送っていた。

それを受け、ローランドと側近のゲパルトは、宮殿の庭で話をしていた。

ローランド「中央大陸にも、まだ強国が残っていたいということですか。」

ゲパルト「はい。それにイーグル殿が油断していた事もあり、被害も大きかったように思われます。」

ローランドは特に感情的になる事もなく、いつもの笑顔を浮かべていた。

ローランド「それで援軍をよこせというのも、これは困ったものですね。」

ゲパルト「しかし、イニシエを攻略するのでしたら、送らないわけにもいきませんまい。」

ローランド「うむ。しかし本国が手薄になると、シャナクルがその期に乗じてこちらにくる事も考えられるな。」

昔のシャナクルを考えると、それは十分に考えられる行動だった。

しかし今はそれをするシャナクルではない。

それでもローランドは知らない事から、それは抑止力として働いていた。

ゲパルト「左様でございますな。それではいかが致しましょう。」

ローランド「ふむ。イニシエは別に重要な場所ではない。向こうからも攻めてこないのであれば、とりあえず放っておく事にしよう。イーグルには残存戦力で、事に当たれと伝えてくれ。イニシエ攻略は必要ない。」

ゲパルト「はい。そのようにお伝えいたします。」

現在の勢力を整理すると、ローラシア大国は、10の部隊の戦力が約11000人。

その他特殊部隊や精鋭部隊など約5000人。

その内本国に残るのが約12500人。中央大陸に約3500人だ。

次に中央大陸のトキョウの雄志軍が約100人。トキョウ滞在のカンセイの軍が約3000人。

その他カンセイ軍が約2000人。

数だけなら、シャオ達の戦力は、ローラシアの戦力の1/3ほどある。

しかしその質の差は、人数以上にあった。

それでもローランドは、シャナクルの力を知っているのだから、かなり慎重に作戦を進めていた。

その頃中央大陸では、意外な展開がおきていた。

東の大陸からの侵攻が現実に行われ始めて、中央大陸の国々にまとまりがでてきたのだ。

そしていくつかの国が、傘下に入る事を望んできた。

それを受けてヒサヨシがエベス山脈の東の国々に、同盟の話を持ちかけた。

人類発祥の地、トキョウの名があった事も大きい。

更には、既に中央大陸の半分を治めていた事もあり、多くの国が同盟を了承し、それ以上に傘下に入る事を望んだ国があった。

一部拒否した国も存在したが、ローラシアとの事が片づくまでは、トキョウ傘下の国々に侵攻する事はしないと約束していた。

これで、ローラシアからの侵攻は、エベス北のルートと、東のタイナンへの船、そして神木への大陸間移動魔法の3つに絞る事ができた。

エベス南のルートの可能性もあったが、イニシエの圧勝と、ローラシアの戦力減退を聞き、まず無いだろうとシャオ達は判断した。

それから更に3週間後、中央大陸のエベスの西は、まもなくローラシアが制圧する、そんな状況だった

。

これでほぼ全土は二分された事になる。

全面対決もまもなくだ。

シャオ達一同は、全面対決に向けて、屋敷の会議室に集合していた。

ヒサヨシ「同盟国と、新たに傘下に入った国々の戦力は約10000人。これで西のエベス北ルートにあたれば、人数的には圧倒しとる。それでも現在エベスの西におけるローラシア3500を押さえる事は、わしは無理やと思う。5部隊の隊長はかなりの使い手で、人数は問題にならへんからな。その5人を押さえられる上位の使い手がおれば西はなんとかなると思うねん。」

会議室では、戦力の配置について検討していた。

もう全面戦争は間違いない。

それぞれのルートから、一斉に来る事も考えられる。

一同頭を悩ませていた。

シャオ「俺がローランドの立場なら、侵攻はおそらく西からだろう。大陸間移動魔法での侵攻は、一気に本拠地だが、リスクが大きい。相手も本拠地は手薄にはしていないだろうと考えるはずだ。そして海のルートは、前にヒサヨシが言った作戦を考えるなら、やはりリスクがある。実際西の地を傘下に治めていった。エベスの北ルート、まずはそこから来ると思うが。」

シャオは皆を見回しながら、自分の考えを伝えた。

リュウ「確かにシャオさんの言う事はもっともです。それでもやはりここを手薄にはできないですが。」

アキラ「もちろん、海から来る事も考えておかないといけないだろうな。」

なかなか話はまとまらなかった。

失敗は許されない。

失敗すれば一気にやられてしまうかもしれないし、戦場も広がる。

みな慎重だった。

シャオ「イニシエと協力できないかな？ローラシアの3部隊が侵攻して、それをものともしなかった力。もし協力してくれれば、こちらの戦力を割かずに西からの侵攻は全て押さえられる可能性が大きいと思うけど。」

シュータ「おそらくはダメだろうが、まだ少し時間があります。話をする価値はあるかもしれませんがね。」

ヒサヨシ「それやったら、わしが話してみよか。。。」

少し渋っているようだったかヒサヨシが、自ら話をしてこようかと提案した。

ヒサヨシはまだ、皆に話していない事があった。

それはイニシエの事。

実はヒサヨシは、イニシエと親密な関係にあった。

いや、ヒサヨシ自身、イニシエの命により動いていた。

受け継ぐ者、人類が地上へとその住居を移した時は、実は1人だった。

地上に上がり、大陸が3つあることを知った後、本を複写し3つにして、そして受け継ぐ者を3人にした。

東の大陸と、南の大陸へと向かう者には、人間どおしの戦いを抑える事だけを受け継いだ。

東の大陸の受け継ぐ者は、高い魔法知識を人々に広め、互いの国が抑止しあう事で戦いを抑えようとした。

結果魔法技術の進んだ大陸となり、うまく抑止しあえたてはきたが、シャオが来たことでそのバランスが崩れた。

南の大陸の受け継ぐ者は、他の大陸との行き来を遮断し、小さな所で人々がまとまる事で争いを抑えた

。

何故ヴァレンが、シャオにこれだけの魔法を教えたのかは謎だが、世界を1つにする事はヴァレンの想

いだったのかもしれない。

そんな中シャオが死んだと聞かされ、ヴァレンはローランドを止めようとしたと考えられる。

何故ならシャオとは違い、ローランドは私利私欲の為にそれを成そうとしていたからだ。

そして中央大陸の受け継ぐ者は、力の目を摘む事で争いを回避、または小規模なものに抑えてきた。

よって中央大陸の魔法技術はあまり成長しなかった。

この方法をとったのには理由がある。

それはイニシエを守る為にある。

受け継ぐ者は本来、イニシエの者。

現在で言えば、シュウカがイニシエの中でイニシエを管理し守る役割、そしてその外で動く人間がヒサヨシというわけだ。

イニシエをそこまでして守らなければならない理由。

それは、イニシエにはアルマゲドン以前の人間の文化、科学技術、歴史等あらゆる古の情報が残されている。

そしてココで、人間が間違った方向に進まないよう管理していた。

今世界で流通しているお金。

これもイニシエで作られ、そして流通させている。

古の技術と魔法とを合わせて、偽造不可能なお金を作っていた。

イニシエの事が表にでる事は、また同じ過ちへと進む事になるかもしれない。

ヒサヨシの現在の目的は、トキョウとローラシアの力関係を均等にし、バランスをとって安定させる事。

。又はお互いの戦力を削り、イニシエのコントロールしやすい状況を作る事だった。

ヒサヨシ「イニシエにしても、このままローラシアが戦力を拡大すんのはまずいとおもてるはずや。」

シャオ「どうにかなりそうなの？」

シャオはヒサヨシが何かを考えていることを悟り、ヒサヨシに期待した。

ヒサヨシ「ああ、実は前々からイニシエとは話しててな、だいたい話についてんねん。」
一同少し驚き、そして和らいだ表情になった。

アイ「それじゃあ、なんとかなりそうなんだね。」

アイの言葉にヒサヨシがこたえる。

ヒサヨシ「でも条件をだしてきとる。イニシエの戦力で守るのは、一番戦場とならない場所。そして守りやすい場所。それはこのトキョウとタイナンって事になるけどな。それで良ければちゅー事や。」

アキラ「確かに助けてもらうのに、一番戦いが予想される最前線はむしが良すぎるな。」

リュウ「それでは我々が、エベス北ルートの玄関口、カンチュウ国を防衛するって事になりませぬ。」

ヒサヨシ「それにイニシエは手段を選ばへんから、タイナンからのルートから侵攻してくれば、海上防衛もするかもしれへんし、相手を殺さないちゅーあまい事はいわへんで。それが条件や。」
皆なんだかヒサヨシと交渉しているような変な感覚をおぼえたが、対して気にもとめなかった。

ヒサヨシ「それじゃ、皆には早い時期にカンチュウに向かってもらう。後2, 3週間もすれば、ローラシアが西から来るやろう。イニシエからの部隊がこちらに到着次第動いてもらうで。」

会議が終了し、ヒサヨシはすぐにイニシエと向かった。

ヒサヨシは妖精、馬のような姿のリエンハウにまたがり、かなりのスピードでトキョウを後にした。

3日後、ヒサヨシからの使いリュウイツが、トキョウに吉報を伝えていた。

1週間以内には、イニシエから上位の使い手がトキョウに来ると言う。

シャオと共にカンチュウに向かう面々、アイ、アサリ、アサミ、ムサシ、シュータは出発の準備を始

めた。

ヒサヨシは妖精による海の警備もあり、トキョウに残る事になっていた。

ヒサヨシ「それじゃわしはトキョウ戻るで。」

シュウカ「あ～よろ～！」

ヒサヨシ「それにしても、わしらには敵を殺る事を許して、自分らは人を殺したくない。ええんか悪いんかわかれへんけど、トキョウの奴らは変やの。」

ヒサヨシとシュウカは、イニシエで話をしていた。

シュウカ「ヒサはこの戦いが終わったら、どうするつもりなのかねえ～？」

ヒサヨシ「ちょっと迷ってるは。予定変更するか。それとも。。。まあそんなときやな。じゃあな。」

シュウカ「はいはい～」

ヒサヨシはシュウカに挨拶すると、リエンハウにまたがり、イニシエの新撰組と共にトキョウへと向かった。

5日後、トキョウにヒサヨシとイニシエの面々が到着していた。

そしてシャオ達はカンチュウに発とうとしていた。

ローラシアは、エベス西側を完全に制圧した。

もう猶予はない。

決戦が始まるのは、おそらく1、2週間後。

シャオ「じゃあ、行って来る。」

ヒサヨシ「まあ頼むで。こっちはわしらが絶対守る。安心してくれ。」

シャオ「ああ。」

シャオは少し腑に落ちない気持ちを抱いていた。

自分は、アイを、そしてトキョウを守る為に頑張ってきた。

しかし今、そのトキョウを離れ、そしてアイをつれて最前線に行く。

それをしなければ、ローラシアに太刀打ちできない事はわかっていたが、何かがシャオの頭に引っかかっていた。

もしかしたら、全てヒサヨシの思い通りに動いているのかも。

そんな疑問も出てきていた。

それでも今はこれしかない。

シャオは自分で自分に言い聞かせ、トキョウを後にした。

シャオ達がカンチュウの町に入ったのは、6日後の昼だった。

シャオ達は、カンチュウの長にエベス北のルートの出口を案内してもらったり、こちらの戦力の把握につとめた。

常にヒサヨシからの使いリュウイツから、ローラシアとトキョウの状況も伝えられていた。

昨日、カンチュウへ向けて、ローラシアの5部隊が動き出したらしい。

明日あたりこちらにつくだらう。

こちらの準備はギリギリ間に合った。

最初の決戦は明日。

皆気を引き締めた。

シャオ「いよいよ明日、最初の戦いだな。」

戦いの前にシャオは少し緊張していた。

今まで数多く戦場にいたシャオだったが、今回は少し気持ちが違っていた。

今までは全て勝算のある戦い。

いや、確実に勝てる戦いをしてきた。

明日の戦いも、勝算という意味ではかなり高いだろう。

しかし、犠牲を出したくない。

アサリを、アサミを、そしてアイを犠牲者にはできない。

そしてなるべく相手にも。

それらを考えると、かなり苦しい戦いが予想された。

アイ「うん。でもみんな、無理はダメだよ。みんな生きる事、それが大前提だよ。」

シャオ「それでも負ける事は許されない。負けたら、その後沢山の人々が死ぬことになるからな。」

ムサシ「わし、なんでこんなところにおるんやろ？くっそお～！！報酬はたんまりたのむで～！！」

アサミ「まあまあ、お金の事は忘れて、みんなの為にがんばろ？」

ムサシ「あ～まあ～アサミがそういうんやったら、少くくはみんなの為に戦ったるは。」

ムサシは少し顔を赤くし、アサミから顔をそらした。

アサリ「ふふふ、ムサシさんは、アサミと仲良しですね。」

シャオ「仲良しってか、アサミの尻にしかれてるって感じだけどな。ははは！」

ムサシ「なんやと！！わしは亭主関白じゃ！！」

アサミ「それになんで勝手に夫婦にされてんのよ！こんなのと夫婦にしないで～！！」

アサミも照れていた。

そして皆笑っていた。

こうして、決戦前夜は更けていった。

最初の大戦

次の日、カンチュウは朝から慌ただしかった。

シャオ達と約10000人の同盟軍は、北のルートで待ちかまえていた。

昨日のうちにいくつかのトラップはしかけておいたが、慎重に部隊をすすめるローラシアの部隊には効果は無かった。

まもなく敵の部隊が見えてくる。

シャオ達は奇襲をかけるべく息を潜めていた。

シャオ「多少の攻撃なら、ローラシアの部隊に死に至る者はいない。おまえ達はある程度力を出していけ。」

アサミ「オッケー！」

アサリ「わかりました。」

草むらの影で最後の確認。

同盟軍には、手を抜いて戦う余裕は無いので、相手を気遣うような指示は出していない。

おそらくお互いに多くの死者は出るだろう。

それでもシャオ達だけは、出来る限り相手を殺さないよう、自分たちに重い枷をかしていた。

シャオと、アサリ、アサミはお互いの健闘を祈り、それぞれの配置につく。

いよいよローラシアの部隊が見えてきた。

もうまもなく。

そして今、戦闘の火蓋はきっておとされた。

アサリ「いきますわよ～」

アサミ「いっけえ～！！」

まずはアサリとアサミが、進軍してくる敵の左斜め前から、メガメテオを放った。

既にマスタークラスに成長している2人の魔法は、かなりのものだ。

それに気がついた敵部隊は、マジックシールドを展開する。

それをわかっていたかのように、メガメテオの火球は、意志を持っているかのようにそれを回避し、敵部隊の中へと飛び、そして爆発した。

イーグル「ちっ！奇襲か。だがその程度は予想している。」

ローラシアの後方の部隊が、アサリとアサミに向け、一斉にマジックミサイルを放った。

その数は数えきれない数で、一斉に2人を襲う。

しかし2人に命中する前に、魔法防御の結界によって魔法の矢は消失した。

イーグル「敵にはマスタークラスの白魔術師がいる。接近するぞ！！」

アイの魔法防御を見て、イーグルは長距離戦は不利だと判断し、一気にこちらの同盟軍との距離を詰めてきた。

シャオ「隙あり！」

敵が前進に気を取られている隙について、シャオがアイスレインを発動した。

無数の氷の矢が、相手部隊頭上から降り注ぐ。

ニコル「なかなかやりますね。私に対応します。」

ニコルが部隊上空に、巨大なマジックシールドを展開し、シャオの魔法を阻んだ。

ニコル「くっ！！防ぎきれない。なんて魔力だ。」

それでもシャオのアイスレインの一部は、マジックシールドを貫通し、敵部隊に攻撃をくらわせた。

イーグル「多少は仕方がない。とにかく接近して、敵部隊の中に入れ！！」

シャオの当初の予定通り、ローラシアの部隊にある程度のダメージを与えた。

しかし既にカンチュウ同盟軍との接触がなされ、両軍入り乱れての戦闘が始まった。

シャオ「イーグルがこの部隊の指揮官か。あいつは俺がやる。」

シャオはイーグルを知っていた。

シャオがローラシアにいた頃は、第一部隊の隊長だった人物だからだ。

しかしイーグルは、シャオには気がついていなかった。

何故なら、シャオが東の大陸にいた頃は、王が子供だと都合が悪いので、姿を変える魔法で体を大きく見せていたからだ。

更には顔にもマスクをしていた。

シャオ「ムサシ！援護は頼むぞ！！」

シャオはそう言うのと魔力を高めた。

ムサシ「わしに命令すんな！金取るぞ！！」

そういうムサシだが、シャオとのコンビネーションは良かった。

ムサシがトキョウにきてから、シャオとはかなり訓練を共にしてきたからだ。

アイは後方で全軍のサポートに回る。

その前にシュータが立ち、アイを補佐していた。

アサリとアサミは、相変わらずのコンビで、その動きについてこれる者はいなかった。

イーグル「あいつが敵の頭だ！ニコル！！いくぞ！！」

イーグルは、シャオが一番の能力者だと判断し、シャオに対峙する。

第六部隊隊長ラビットと、第十部隊隊長ミニーは、アサリとアサミに向かってゆく。

エヴァー「あの白魔術師、うざい！私が殺る！！」

エヴァーは攻撃してくる同盟軍の面々をなぎ払い、アイに直進した。

その前にシュータが立ちはだかった。

シュータ「お主の相手、私がしよう。」

エヴァー「なにやら面白い相手のようだな。」

シュータからわき出る灰色の魔力に、エヴァーは少し驚いていた。

それでも臆するところは全くない。

それよりも強敵らしき相手に喜んでいるようだ。

エヴァー「本気でこいや！！」

エヴァーは正面からシュータに斬りかかった。

シュータはそれをうまくかわし、逆に斬りつける。

しかしエヴァーの剣圧に、地面が崩れ体制を崩した。

シュータ「ちっ！凄いパワーだ。」

シュータは体制を立て直し、エヴァーへと向ける。

エヴァーはすぐさまシュータへと向かった。

エヴァー「私の剣はかわせても、その剣圧によりダメージくらうぜ！！」

再び斬りつけるエヴァー。

シュータはその剣を、今度は受け流す。

シュータの体が押さえつけられるように、体が沈んだ。

シュータ（これは本気でやらないと、こちらがやられる。）

エヴァー「これで終わりだ！！」

頭の上からエヴァーの剣がシュータを襲う。

かわすのは不可能。

シュータは魔力を高め、その剣を剣で真っ向から受け止めた。

爆発が起こる。

砂煙が上がる。

その中でシュータは、エヴァーの剣をしっかりと止めていた。

エヴァー「なんだと。私の剣をまともに止めるなんて。なんて魔力とパワー。」

エヴァーはすぐにシュータとの間をとった。

シュータ「本気でいかねば、こちらがやばいのでな。殺しても恨まんでくれよ。」
そういうシュータの魔力は、最大限まで高められていた。

エヴァー（なんて魔力だ。しかし。。。）「魔力だけが戦いじゃないんだよ！！」
エヴァーは再びシュータへと向かった。

そのスピードは今までよりも速い。

しかしシュータは難なく、そこから繰り出される攻撃を受け止める。

受ける力と受け流す力をうまく分散し、こちらへの負担を最小限に減らしているようだ。

エヴァー「剣だけだと思ふなよ！」

エヴァーは剣を持たない方の手から、魔法を放った。

ショートレンジからのメガメテオ。

シュータはそれをまともに受けた。

シュータ（あの中であれだけの魔法。魔法もかなり使えるのか。）

それでもシュータは倒れる事なく、エヴァーと向かい合った。

エヴァー「今のは少しは効いたようだな。」

エヴァーはニヤッと口の端をつり上げて微笑んだ。

エヴァー「それにしてもあんた、なかなかやるね。」

シュータ「それはどうも。」

エヴァー「でももう動きは見切ったよ。動きが基本通りなんだよね。」

エヴァーは剣を肩の上に置き、余裕の表情を見せた。

シュータも剣をおろしエヴァーに笑顔を見せた。

その頃シャオとムサシは、イーグルとニコル相手に一進一退の攻防を繰り広げていた。

シャオ（本気でやれば勝てるが。。。）

シャオは力をセーブし、相手を殺さないよう気をつけていたので、本来の力を発揮していない。

イーグル（強い。それにこの魔力。どこかで感じた魔力。。。シャナクル。。。様？そんなはずは。。。）

イーグルは聞かされていなかった。

シャナクルが実は子供だと言うことを。

それでもその魔力から、それを感じていた。

イーグル（シャナクル様が生きてるとは聞いていたが、これは間違いない。それでは俺に勝ち目は無い。）

そんな事を考えていたイーグルに、一瞬の隙ができた。

ムサシ「隙あり！！」

ニコル「イーグル！！」

イーグルをかばおうとしたニコルの左胸に、ムサシの剣が突き刺さった。

ムサシ「あっ！！」

ムサシが剣を引き抜くと、ニコルはその場に倒れた。

アサリとアサミは、ラビットとミニーに苦戦していた。

2人のコンビネーションは、アサリとアサミを上回っている。

アサリの剣はことごとくラビットに受け流され、アサミの魔法はミニーの魔法に阻まれる。力では勝てない。

そう判断したアサミは、剣を抜きラビットに接近した。

アサミ「アサリ！！あっちの魔法使い頼む。こっちは私が抑える！！」

アサリ「わかりました。まかせます。」

アサリとアサミは、魔法使いの能力を抑える為、両者とも接近戦で勝負する事にした。

ラビット「そうはいかないわよ。」

ラビットは、ミニーに向かうアサリを止めようとする。

その前にアサミが立ちはだかった。

アサミ「あんたの相手は私よ。」

ラビット「あなたにわたくしの相手ができて？」

2人は向かいあって剣を構えた。

アサリは一直線にミニーに向かう。

それに対して、ミニーが魔法を放つ。

ミニー「ブリザード！」

すぐにアサリを結界が包み、中で吹雪が吹き荒れた。

ラビットの剣が、アサミに襲いかかる。

それを美しい太刀さばきでアサミはかわし、なおかつ相手を斬りつける。

ラビットもそれを美しくかわす。

ラビット「あなた。魔術師かと思ったけど、美しい剣を使うのね。」

アサミ「あんたこそ、無駄の無い動き、やるわね。」

パワーではラビットの方が上だったが、剣技は五分。

アサミでも、相手を抑えるだけなら可能だった。

結界に包まれたアサリは、力づくで結界から抜け出した。

ミニー「ええ。あの結界から抜け出すなんて、なんてパワー！」

ミニーがそう言っている間に、アサリとミニーの距離は0になった。

ミニー「エネルギーブラスト！」

ミニーはほぼノータイムで魔法を放つ。

アサリはそれをまともに受け、それでもミニーに剣で斬りつけた。

斬られたミニーは、大量の血を流しながら、前に倒れた。

アサリ「アサミ、手加減できませんでした。」

アサリは莫大な魔力を使い、結界を脱出。

その際我を忘れて、ミニーに攻撃してしまった。

ラビット「ミニーがやられたの？」（そんな。。。2対1では不利です。ここは一旦。）

ラビットはその場から離脱した。

シュータとエヴァーは全力でぶつかり合う。

その決着はなかなかつかない。

シュータは限界だった。

灰の魔力は、その消費速度が他の倍、短期決着が必要だった。

シュータ「次で決める。」

シュータは最後の力を振り絞り、エヴァーに向かった。

エヴァー「だからあなたの太刀筋は見切ってるのよ！」

そこへアサリとアサミが、エネルギーブラストを放った。

エヴァーの背中を襲う。

エヴァー「何？」

後ろを振り返るエヴァーの間をつき、シュータの剣がエヴァーをとらえた。

肩から体を縦断して、シュータの剣が切り裂いた。

エヴァー「ヴァ。。。」

シュータ「手を抜いては、こちらがやられていた。ゆるしてくれ。」

そう言ったシュータは、その場に倒れた。

一時引いていたイーグルとラビットは、勝てないと判断した。

イーグル「おそらくあの子供、シャナクル様、いやシャナクルだ。これでは我々は勝てない。ここは撤退する。」

ラビット「ミニー。。。」

イーグルが、撤退の合図の魔法を空へと放つと、ローラシアの部隊は撤退していった。

シャオ「追わなくていい！！」

シャオの言葉に、追撃しようとしていた同盟軍の面々は、動きを止めシャオの顔を見ていた。その顔から、シャオの思いを読みとる事はできず、皆ただただ呆然としていた。

神木消失の日

数日後、ローランドの元に、カンチュウでの敗戦が伝えられた。

ローランド「ふむ。シャナクルがカンチュウにきていたか。」

ゲパルト「左様でございます。」

ローランド「しかし、トキョウを捨ててカンチュウに行ったとも考えられない。トキョウもそれなりの戦力があると言うことか。」

ゲパルト「カンチュウにいたシャナクル以外にも、かなりの使い手がいたと報告があります。」

ローランド「それでも。。。この戦いはおそらく、シャナクルを早く倒す事が勝利への近道だと考えますが、どうでしょうか？」

ゲパルト「わたくしもそのように考えます。」

ローランド「ではそうしましょう。」

ローランドは笑顔で、ゲパルトに指示をだした。

まずはシャオの逃げ道を塞ぐ。

シャオがローラシアの聖騎士団から逃げた魔法。

大陸間移動魔法。

やられると判断すれば、また同じように逃げられる可能性がある。

そこで、トキョウの神木を破壊する事を考えた。

ローランド「トキョウの神木。私が手に入れたかったが仕方あるまい。」

ローランドは、特殊部隊に神木の破壊を命じた。

ローランド「それにしてもシャナクル、死にかけても最前線に出て戦う愚かさに気がつかないか。ふっ。」

ローランドはゲパルトをその場に残し、部屋へと戻っていった。

特殊部隊は20人。いずれも強大な魔力を持つ面々だ。

だが正直大陸間移動魔法を1日に2度使えるかどうかはわからない。

行ったら帰ってこれない可能性もあったが、ローランドはそれを伏せ、神木を破壊するまでは帰ってくるな、そう伝えていた。

特殊部隊隊長の「トムキャット」は、任務決行を前に、メンバーに内容を説明していた。

トムキャット「私たちの任務は、トキョウに大陸間移動魔法で移動し、神木を破壊する。向こうについたら他にはかまわず、とにかく神木を破壊し、任務完了をもって、大陸間移動魔法により帰還する。とにかく他にはかまうな。この任務達成は早急であり絶対だ。」

特殊部隊の面々は、トムキャットの言葉に頷いた。

トムキャット「ではこれより出発する。皆の健闘を祈る。」

そう言ったトムキャットは、魔力を解放した。

魔力がグングンと高まる。

他の面々も同じように解放する。

中央大陸へと念ずる。

次の瞬間、トムキャットの姿がその場から消えた。

続いて他の面々の姿も、1人また1人と消え、そしてすぐに全ての姿が消えた。

トムキャット「凄い。これが大陸間移動魔法。凄いが、魔力の消費が早すぎる。」

空を飛びながら、トムキャットは少し不安を覚えていた。

しばらくしてすぐに、トキョウの北東、神木近くの森へと降りた。

辺りに爆発音が響いた。

こちらはまだ夜明け前で、うっすらと明るくなり始めている時間だった。

眠りについてたアキラ達は、その音に起こされ急いで神木の方へ向かった。

アキラ「こちらにもきたか。」

そう思いながら、アキラは走った。

それを追い越すように、ヒサヨシと妖精達、そして新撰組の面々が追い越してゆく。

ヒサヨシ「アキラは安全な所においてや。わしらでなんとかする。」

ヒサヨシ達は更にスピードを上げ、神木の方へと走っていった。

アキラ「確かに、私が行ってもやくにはたたないか。。。」

それでもアキラは神木の方へと向かった。

神木には、既に特殊部隊が攻撃をしていた。

トムキャット（それにしてもでかい。これを、今の我々に破壊できるのか？いや、できたとしてその後本国に戻れるのか？）

トムキャットはそんな事を考えていたが、ただ神木に攻撃を続けた。

コンドー「おらぁ！！まったれや！！」

新撰組のコンドーがトムキャットに襲いかかる。

トムキャットはとっさにマジックシールドで回避した。

トムキャット「くっ！魔力消費は極力おさえなければ。」

トムキャットはコンドーから逃げた。

コンドー「おら！にげるきかい！！」

トシゾー「総長の顔が怖かったんじゃね？」

コンドー「おおそうか。では柔らかく笑顔で。。。」

ソーシ「って、コンドーさんの顔はいくら頑張っても怖いままですよ。」

サイトー「はいはい。そんな事言ってる間にも、神木がやられてますよ。」

新撰組の面々は、神木への攻撃に集中している特殊部隊を、1人、また1人と斬って捨てた。

トムキャット（くっ！破壊できるか？）「みんな一点集中だ！！」

トムキャットの声に、特殊部隊の面々は神木の一番傷ついている部分を集中して攻撃する。

ヒサヨシ「まずいな。これは神木、もうもたへんかも。」

ヒサヨシは神木の防御に回っていたが、全てを守る事は出来なかった。

妖精達も頑張っていたが、特殊部隊の面々はかなりの使い手で、なかなか倒せずにはいた。

コンドー「やばいんじゃねえの？」

トシゾー「ああやばいな。もう無理っぽくね？」

ソーシ「でも一番やばいのは、コンドーさんの髪だって。」

サイトー「え？コンドーさん、ズラだったの？僕ショックっす！」

トシゾー「あ～ダメだな。」

トシゾーの言葉と同時に、トムキャットのギガメテオがコンドーの頭をかすめて、神木の傷が酷い場所へと命中した。

ソーシ「コンドーさん、本当にハゲですね。。。」

サイトー「ええ。ハゲです。」

プルプルとコンドーは震えていた。

そして次の瞬間、「殺す！！」と行って特殊部隊を斬りまくった。

特殊部隊は限界だった。

大陸間移動魔法でかなりの魔力を消費していた上に、強力な魔法を使い続けたのだ。

もう限界だった。

コンドーの暴走に、次々と特殊部隊の面々は斬られていった。

トムキャット「任務完了！」

神木がゆっくりと倒れてゆく。

ゆっくりと。

そして徐々に速度を上げて。

神木は炎に包まれていた。

コンドー「やばいぞ！！退避！！」

正気を取り戻したコンドーは、神木から離れた。

続いてその他新撰組の面々も退避した。

辺りに轟音を響かせ、2000年以上存在した神木が、森の方へと倒れた。

地面が大きく揺れた。

その揺れは、トキョウ全体に広がっていた。

トシゾー「あ～あ。やられたな。」

ソーシ「いえ。やられていません。命があれば良いのです。」

サイトー「ほい！！ほい！！」

皆が倒れた神木を眺める中、サイトーだけが残りの特殊部隊を斬って捨てていた。

トムキャット（魔法が使えるか？）

トムキャットは、残りの魔力を解放した。

東の大陸へと念じた。

なんとかトムキャットだけは、その体を空へと飛ばす事ができた。

トムキャット「なんとか逃げる事ができたのは、私だけか。。。」

こうしてトキョウの神木は、東の特殊部隊により破壊された。

炎は、神木と森を、その日一日焼き続けた。

トムキャットは、東の大陸の神木の側で倒れていた。

もう魔力を使い果たし、動けなかった。

ゲパルト「トムキャット殿、よくお戻りになられました。任務は達成できましたかな？」

倒れているトムキャットを助けるそぶりも無く、ゲパルトは話しかけた。

トムキャット「はあ、はあ、任務、は、はあ、完了、だ。。。」

トムキャットはそれだけ言うのが精一杯だった。

次の日、トムキャットは疲労は残るものの回復していた。

そしてゲパルトに、昨日の任務の事で詰め寄っていた。

トムキャット「ゲパルト殿。昨日の作戦、我々は捨てゴマにされたんでしょうか？大陸間移動魔法。あれの魔力消費は尋常じゃない。あれを1日に2度、更に任務をこなし、最初から無理があったように思うのですが！」

ゲパルト「だったらどうするのかね？それにあなたはきちんと帰ってきているのではないか。ローランド様のただの計算ミスだ。ローランド様もこのような事になって嘆いておられましたよ。」

トムキャットは腑に落ちなかった。

トムキャット（ローランド様は、一度大陸間移動魔法を使っておられる。消費魔力が強大な事もわかっておられたはずだ。）

トムキャットには、ローランドへの不信感を拭う事はできなかった。

しばらくして、ローランドとゲパルトは、宮殿の庭で話をしていた。

ゲパルト「トムキャット殿が、ローランド様に不信感を抱いているようです。いかがなさいますか。」

ローランドの返答はわかっていたが、ゲパルトは尋ねた。

ローランド「そうですか。残念ですね。精鋭部隊に始末するよう伝えてください。」

ゲパルト「御意。」

ゲパルトは側に控えていた付き人に、指示を出した。

その頃トムキャットは、既に東の大陸から船で出ていた。

船頭「トムキャット様、本当によろしいのですか？」

船頭の問いに、トムキャットはだた「ああ。」とこたえた。

トムキャット（おそらくは今頃、私を始末するよう命令が出ているだろう。私のいる場所は、もうココにはない。）

トムキャットはただ1人、中央大陸へと向かった。

ゲパルト「それではいよいよ、シャナクルをやる番ですな。」

ローランド「シャナクルの逃げ道は無くなりました。聖騎士団とエリート部隊を送ってください。これで確実にしとめます。」

ゲパルト「はっ。」

ローランド「それと、この地の神木も破壊しましょう。現状戦力は、こちらの方が上ですからもういらないでしょう。」

この日ローランドは、ローラシアの最後の神木も破壊した。

絶対絶命

カンセイでの勝利は、必ずしも嬉しい勝利では無かった。
アイのサポートがあっても、同盟軍は半数を失っていた。
それに、敵を殺さないよう頑張っても、力の差が無い戦いではそれは不可能だった。
その後、神木の破壊を伝えられた面々は、さらに意気消沈していた。

ムサシ「あの神木が倒れるなんて、無茶苦茶やなあ〜」

その中で、1人あっけらかんと、ムサシは言葉を吐いた。

シャオ「これはおそらく、俺達が大陸間移動魔法で逃げる事を阻む為だろうな。それとこちらの戦力が上がる事を止める意味もある。」

シャオのそんな言葉も、皆あまり聞いていないようだった。

シャオ「でもまあこれで、トキョウが急に戦場になる事もなくなった。イニシエの使い手が、しっかりとやってくれる事もわかった。」

シャオは沈むアイ達に話しかけるが、皆はただ頷くだけだった。

それにこちらの戦力がアップしたわけでもないし、不利な状況は変わらない。

部隊長3人と1000人ほどの戦力を削る為に、こちらは同盟軍5000人を失ったのだ。
それでもやらねばならない。

ただやらねばならないと、シャオ達は思った。

そんな中、シャオ達はしばしの休養の日々を送った。

10日が過ぎた。

シャオ達の気持ちも少し落ち着いたようだ。

そんな中、ヒサヨシからの使い、リュウイーが飛んで来た。

ローラシアの聖騎士団とエリート部隊が、北のルートの中の街、エベレストに入ったという事だった。
これでエベレストには、今は第二部隊と第六部隊が2500人、聖騎士団500人、エリート部隊2500人が滞在する。

人数では五分だが、今まで以上に戦力の差は大きい。

ローラシア本国には精鋭部隊が2000人と5部隊7500人が残る。

トキョウに残るのが、雄志軍100人とカンセイ軍が5000人。

そして新撰組が30人程度。

シャオ達のカンチュウに援軍を送る余裕は無かった。

もうシャオには、相手を想って手加減する事もできない。

皆も同じ考えだった。

ローランドが私利私欲の為に戦争している人物でなければ、全てを差し出しても良かった。
その方が被害が無い。

しかし一般国民に、過酷な生活を強いるローランドの言いなりにはなれなかった。

そして2日後、再び戦いは始まった。

北のルートから、聖騎士団、エリート部隊、そして第二第六部隊が侵攻してきた。

こちらの被害を最小限にする為、シャオは最初から全力で相手に攻撃魔法を浴びせた。

シャオは飛翔により上空から敵に攻撃する。

それを同じく上空でムサシが補佐する。

地上で入り乱れるお互いの戦力の中で、アサリとアサミが戦う。

後方ではアイが全てをサポート。

それを守る形でシュータが戦っていた。

それを後方から眺めている聖騎士団の団長「レクスス」は、しばらく戦況を分析していた。

レクサス「ふむ。敵の戦力はあの6人が中心。シャナクルは我々聖騎士団が抑える。後は頼みま
すぞ。」

レクサスは、横にいたエリート部隊隊長ファルコンに笑顔に向けた。

ファルコン「ええ。お任せください。あの程度、僕たちの相手ではありませんな。」
その会話を、隣でイーグルとラビットはただ聞いていた。

ファルコン「あなた方は、僕たちの華麗な戦いぶりを、この辺りで観ていてください。」
ファルコンは、少し嫌みな笑顔をイーグルとラビットに向けた。

イーグル「わかった。」（くそ！！このボケの言うとおりにしないといかんのか。）
イーグルは少し苛立っていた。

この場の最高指揮官は、聖騎士団団長。

次がエリート部隊隊長ファルコンだった。

イーグルは今まで自分がこの地の最高指揮官ただだけに、この状況はつらいものだった。

聖騎士団500人は、レクサスと共に、上空へとでた。

目標はシャオだけだ。

シャオと共に上空にいたムサシが、まずは聖騎士団と向かい合う格好になった。

ムサシ「こいつらメッサ強いんちゃう？それがこの人数。相手にできんのか？」
ムサシは剣を構えたまま、レクサスを睨みつけた。

シャオ「本気でやる！！ムサシは地上に降りて、みんなを助けてやってくれ。この状況じゃ、1
人の方がやりやすい。」

ムサシ「わしは戦力外通告かい！！まあせえぜえ死なんようにがんばれや！！」
ムサシはそう言うと、地上で入り乱れる、同盟軍とエリート部隊の中へと向かった。

レクサス「シャナクル、ひさしいのお。」
レクサスはシャオに話しかけた。

シャオ「ああ、あの時の副団長か。」

そう、シャオがローラシアに侵攻した際、シャオが追いつめられた聖騎士団。

あの時の団長はジークフリードだった。

ジークフリードが、滅びの結界を使った事で死んでからは、レクサスが聖騎士団を指揮していた。

レクサス「我々があなたの国に敗れ、私たちはブリリアに下った。それなのに又、あなたと戦う
事になるとは、おかしい事もあるもんですな。」

シャオ「俺は死んだ事になってたからな。全てローランドに奪われたよ。」

レクサス「しかしそのおかげで、我々にリベンジのチャンスが訪れました。今日は確実に勝たせ
ていただきますよ。」

シャオ「俺様も負ける気はないよ！」

レクサス「それでは、いざ勝負です。」

レクサスの言葉を最後に、シャオと聖騎士団の面々は魔力を高めた。

500人の聖騎士団の面々が、ゆっくりと広がり、シャオを囲んだ。

地上ではムサシがファルコン相手に苦戦していた。

1対1なら勝負にもなるが、エリート部隊からの攻撃もあり多対一。

アサリとアサミも同じような状況だった。

アイも同盟軍全てに手が回らず、シュータの補佐に終始していた。

同盟軍の者達は、ドントンとその数を減らしていた。

このままでは負ける。

そんな状況だった。

シャオはアイスレインで聖騎士団を一斉に攻撃する。

しかし、能力の高い聖騎士団の面々は、それをあっさりとしのいでいた。

シャオ「くそっ！1人ずつ殺るしかない！」

レクサス「あの頃よりもこちらは強くなっているのですよ。そんな魔法では通用しません。」
レクサスは余裕で聖騎士団を指揮していた。

シャオ「テラボルト！」
シャオの魔法は、聖騎士団の1人をとらえた。
1人は地上へと落ちていった。

レクサス「そんな上級魔法。500回続けるつもりですか？」
レクサスの言うとおりに、上級の魔法を続けるには、莫大な魔力を必要とする。
そんな事は、流石のシャオでも不可能だ。

シャオ「これならどうだ。デススペル！！」
シャオの言葉と同時に、数人の聖騎士を球状の結界に閉じこめた。
そしてその中で爆発が起こった。

シャオ（はあ。これでも3人か。。。）
3人の聖騎士が地上へと落ちていった。
その間も、聖騎士達がシャオを剣や魔法で襲う。
それらをかかわしながら上級の呪文を放つシャオ。
かなり過酷な戦闘が続く。
それでも聖騎士団の数は、徐々に少なくなっていた。

レクサス「なかなか粘りますな。」
状況は、シャナクル王としてローラシアに攻め入った時と同じような状況になっていた。
しかしあの時より、聖騎士団の数は倍以上だ。
あの頃のシャオなら、既にやられていたかもしれない。
しかしシャオもかなり成長していた。
余裕は無いが、まだ戦えた。
そんな時、地上から悲鳴が聞こえた。

アイ「きゃあ〜！」
アイの悲鳴だった。

シュータ「アイ殿、大丈夫ですか?!」
アサミ「アイ!!!」
シャオ「アイ?!」
シャオはその悲鳴の方向に顔を向けた。
シュータとアサリとアサミが、アイを守るような形で敵と対峙していた。

シャオ「大丈夫か。。。」
アイはとりあえず大丈夫なようだ。
しかし、シャオのその隙を逃すレクサスでは無かった。
シャオの周りは結界に包まれていた。

シャオ（しまった。これは滅びの結界。）
レクサス「私の命はこれまでですが、シャナクル、あなたも終わりです。この世には既に神木は存在しない。よって、あの時と同じように、大陸間移動魔法で逃げる事も不可能。このまま魔力を全て失って、死んでもらいます。今回の任務は、あなたを確実にしとめる事。これで任務完了ですな。」
シャオは結界の中で、魔力を少しずつ失ってゆく。
飛翔を維持するのも限界だ。
周りは全て、強力で脱出不可能な結界。
落ちる事も出来なかった。

シャオ「くっ！限界だ。」
シャオの耳には、地上からの皆の声がかすかに聞こえてくる。
シャオ助けようとしているようだが、それはエリート部隊に阻まれていた。

空が暗くなる。

もうダメだとあきらめた時、上空から強力な魔力が接近してきた。

それは滅びの結界にぶつかり、結界を無効化した。

シャオ「助かった?!」

シャオはコントロールを取り戻した魔力で、再びオーラを纏った。

レクサス「なんだ?どうした?うっ!」

そう言ったレクサスは、そのまま地上へと落ちていった。

滅びの結界を使った事で、魔力がもう残っていなかった。

ブルードラゴン「クセンシテイルヨウダナ。」

上空から、ブルードラゴンがシャオの横まで降りてきた。

シャオ「あの時のブルードラゴン?」

そう、南の大陸でシャオが倒したブルードラゴン。

シャオにやられて倒れていたが、自己再生魔法によって復活していた。

ブルードラゴン「ワシヲオシタヤツガ、ナニヲヤツテイル。マアイイ。スケダチスルゾ!」

ブルードラゴンはそう言うと、聖戦士達にブレスを吐いた。

更には爪や尾、魔法も唱え、聖戦士達を倒してゆく。

トムキヤット「シャナクル様、私も助太刀します!!」

ドラゴンの上に乗っていたトムキヤットが地上へと降りていった。

シャオ「トムキヤット!?!」

あの神木が全て無くなった日、トムキヤットは、海上を中央大陸へ向けて、船を進めていた。

南の大陸の北を航行している時、ブルードラゴンと出会った。

ブルードラゴンは、幻影でシャオの姿を映し、シャオのいる場所まで案内するようトムキヤットに言い、そして共にこの地にきたのだ。

トムキヤットは地上のファルコンに斬りかかる。

ファルコン「裏切り者め!」

ファルコンはトムキヤットに視線を向けた。

ムサシ「うらあ!!」

その隙をついて、ムサシがファルコンを斬った。

ファルコン「ぐあ。。。」

ムサシの剣は確実にファルコンをとらえ、ファルコンを地にたたきつけた。

シャオ「とりあえずこいつらをたたく!」

シャオはブルードラゴンの魔法とブレスの魔力を踏み台に、コールド系最大呪文を放った。

シャオ「アイスブリザード!!」

シャオの魔力は広範囲を包み、その中を氷の嵐が吹き荒れた。

上空の全ての者が、その魔力の中にいた。

ブルードラゴン「ワシマデイッショカ。」

その中でブルードラゴンも暴れた。

ブルードラゴンは、コールド系には耐性があり、逆にその力を活性化する。

ブルードラゴンがシャオの魔力を高め、シャオの魔術がブルードラゴンの力を高めた。

聖騎士達「レジストできない。」「魔力が強すぎる。」「うあああ!!」

シャオとブルードラゴンのコンビネーションで、聖騎士団の全てが、地上へと落ちた。

シャオ「はあ、はあ、やったか。」

ブルードラゴン「コレクライハヤツテクレナケレバナ。」

ブルードラゴンは、シャオを背に乗せた。

イーグル「あんなの相手にできるか！！引くぞ！！」
イーグルは撤退の合図に、魔力を空へと放った。
ローラシア軍はすぐに撤退を開始し、そして去っていった。
その時それを追える者は、こちらには残っていなかった。

トキョウ陥落

戦いの後、一同は倒れる同盟軍達の治療に終始し、アイやシュータは魔力がつきるまで続けた。

ブルードラゴン「シャナクルヨ。ワシハオヌシタチニマカイノモンヲトジラレ、アチラニカエレナクナッタ。」

シャオ「ああ。そうだったな。」

ブルードラゴン「ワシガマカイニカエルホウホウハ、コチラノマホウニヨリショウカンジュウニナルコトダケダ。ダカラオヌシノショウカンジュウニナルタメココマデキタ。ドウダ？リョウショウシテクレルカ？」

ブルードラゴンの言うことは、つまりは魔界に帰る為、シャオの召喚獣にしてくれという事だった。召喚獣とは、ヒサヨシの妖精のように、術者の召喚によって人間界に存在できる存在で、魔界とを行き来する魔獣の事である。

魔界の門が閉じられ、ブルードラゴンは魔界に帰れなくなった。

帰る為には、魔界からの召喚ができる術者の召喚獣になる以外、基本的には方法がない。

再び魔界の門を開く事も可能なはずだが、現在それが出来るものはおそらくいなかった。

シャオ「ああ、わかった。。。だが今はちょっと無理かも。。。」

シャオはそう言うと、その場に倒れた。

次の日シャオが目覚めたのは、カンチュウの屋敷の部屋、このところシャオが寝起きしているベッドの上だった。

シャオは昨日の出来事が、なんだか夢だったような感じがした。

シャオは体を起こすと、ドアをノックする音が聞こえた。

アイ「シャオ！起きてる？」

シャオ「ああ、アイか。今起きた。」

シャオはアイの声を聞いて、心が安心感に包まれた。

アイ「じゃあ、食事用意出来てるから、準備できたらきてね。」

アイがそう言った後、ドアの向こうを歩いてゆく、アイの足音が遠ざかっていった。

シャオは起き上がり、食事へと向かった。

既に面々は集まり、食事をとっていた。

その中の1人、トムキャットが立ち上がり、シャオに挨拶した。

トムキャット「シャナクル様、おはようございます。」

その姿を見て、皆少し苦笑いした。

シャオ「トムキャット、そんなかしこまるのはやめてくれ。俺は別に上官でもないし、もう王でもない。普通にシャオって呼んでくれ。」

トムキャット「いやしかし。。。」

シャオ「頼むから。」

トムキャット「わかりました。シャナクル様。あっ！」

トムキャットのボケに、皆笑っていた。

シャオ「それにしてもどうしたんだ？裏切ったとかなんとか。」

シャオはトムキャットがココにいる疑問をぶつけた。

トムキャット「はい。トキョウの神木が倒された事は、ご存じかと思えます。あれは私の特殊部隊によるものです。」

一同少し動揺したが、そのままトムキャットの話聞いた。

トムキャット「しかしあの任務は、最初から私たちを捨てゴマとして行われたものでした。ローランド様、いや、ローランドのやり方に、私は納得できませんでした。いや、それ以前から、ローラン

ドのやり方には疑問を抱いておりました。それに私は元々、シャナクル様、いえ、シャオ殿についてゆきたいと考えて、ブリリアの特殊部隊に入ったのです。だからこれは良い機会でした。これからはどうか私をお使ください。」

トムキャットは改めてシャオに頭を下げた。

シャオ「あ～使うとかそんなたいそうな考えじゃなくて、皆仲間という形で。。。」

シャオは歯切れが悪かった。

以前のシャオを知っている人間に、変わった自分を見られている恥ずかしさ。

シャオは少し照れていた。

トムキャット「シャオ殿。以前と比べて、私はますます好きになりました。何か変わられましたね。」

トムキャットは満面の笑みでシャオを見つめた。

シャオ「ああ、照れるからやめてくれ。」

みんなそんなシャオを見て、笑っていた。

アサミ「そういや、あのドラゴン、北ルートの入りのところに放置してきてるけど、なんとかしないとイケないんじゃない？」

アサミの言葉に、皆ドラゴンの事を思い出した。

アイ「そうそう。流石に町には入れられないから隠れてもらってるんだけど、早くなんとかしたほうがいいんじゃない？」

皆シャオを見た。

シャオ「ああ。やっぱ夢じゃなかったんだ。食事が終わったら、でかけよう。」

その後食事をとったシャオ達は、ブルードラゴンの元へと向かった。

ブルードラゴンにあったシャオは、どのような召喚獣にするかで話し合っていた。

召喚獣には2種類の方法がある。

1つは、普通に魔界から召喚する方法で、人間界、魔界、どちらにいる魔獣も、召喚獣にする事が可能である。

そしてもう1つは、アイテム、主に武器や盾等の守護者にする方法で、これだと魔獣の意志で両世界を行き来する事が可能だ。

ただし、人間界にいる魔獣しかその方法は使えない。

シャオ「あんたも自分の意志で動ける方がいいだろ？」

シャオは2つ目の方法、守護者にする事を提案していた。

ブルードラゴン「ソレダトワシノカッテニウゴクコトモカノウデ、オマエノメイレイモキカズ、ヒトビトヲオソウカモシレナイゾ。」

シャオ「その時は、俺様が何とかすりゃ良いだろ？」

ブルードラゴン「ワシニイチドカッタカラ、オオキイクチヲキキヨル。デモマアソウシテクレルナラタスカル。」

シャオ「ああじゃあ、媒体はこのナイフでいいな。」

シャオは愛用のナイフを取り出した。

ブルードラゴン「ナダト？ソンナイフノシュゴシャニナレトモウスノカ？モットキョウリョクナブキガホカニアロウニ。」

魔獣を守護者になると、そのアイテムに守護者の魔力が宿る。

一般的には剣の能力を高めたりする事が可能で、ブルードラゴンは、ナイフにその力を持たせるのはもったいないと言いたかった。

それに魔獣最上位のプライドもあり、もっと良い物の守護者になる事を求めた。

シャオ「あ～でもなあ～他に良い物が無いし、俺、このナイフが一番しっくりくるんだよね。」

シャオは笑顔でブルードラゴンを見た。

ブルードラゴン「フハハハ。マアオヌシガソレデイナラワシハハントイセン。ソレニオマエサ

ンハ、ケンシデハナイミタイダカラナ。」

ブルードラゴンも了解し、シャオは魔力を高めた。

ナイフについている1つの宝石。

そこに向かって魔力が集まった。

魔界への小さな門のような雰囲気がある。

その魔力の集まる場所へ向けて、ブルードラゴンの魔力が流れた。

武器の守護者にする為には、その守護者自身の意志も必要だ。

術者と魔獣、2つの魔力がナイフの形状を変え行く。

そして次の瞬間、ナイフが光に包まれ、そしてすぐに光りは消えた。

ブルードラゴンの姿も、すでにその場には無かった。

シャオ「ふう。。。ドラゴンナイフの完成だ。」

そのナイフからは、冷気が漂っていた。

それから数日後、ローランドの元に、またもやカンチュウでの敗戦が伝えられていた。

ローランドは普段の笑顔を崩し、少し感情的になっていた。

ローランド「シャナクルを殺れなかった？ドラゴンが加担したと？いったいどうなっているんだ？」

ゲパルト「わかりません。それで聖騎士団は壊滅、エリート部隊のファルコンも戦死。更にはトムキャットが裏切って向こうについたとも。」

ローランド「戦力は圧倒的にこちらが勝っていたはずなのに。ドラゴンとは。。。シャナクルめ。私の予想を超える。」

ゲパルト「いかが致しましょうか。」

ローランド「ふう。」

ローランドは息を吐き、平静を取り戻し笑顔でゲパルトを見た。

ローランド「まあいいです。それでも戦力はまだこちらが上です。ただ、もう失敗は許されません。」

ゲパルト「左様で。」

ローランド「まずはエリート部隊2000人はイーグルに任せる。そして第二第六部隊2500は第六部隊としてラビットに。イーグルにはとりあえず、エベレストの死守を命じてください。」

ゲパルト「御意！」

ローランド「そして、このところの相手の動き、こちらに侵攻してくる様子は全くない。守る必要はおそらくありません。シャナクルを殺るのは最後にし、まずは外堀を埋めます。私自ら全戦力をあげて。」

ゲパルトはローランドの言葉に驚いた。

ゲパルト「ローランド様自らですか？海上の戦闘になるとこちらの被害がかなりのものになる可能性があります。それにもしもの事があっては。」

ローランド「大丈夫だ。タイナンから入るつもりはない。」

東の大陸から中央大陸の東に船で向かう場合、全てはタイナンへ向かう事になる。

何故なら、その他海に面した陸地は、岩等が多かったり遠浅だったり、船では近づけないからだ。

しかしそれは赤道の帯の中での事。

黒の霧がかかる、人の住まない地なら、船でつける事も可能だ。

ローランド「敵もまさか黒の霧の中をやってくるとは思うまい。こちらも過酷な侵攻になるが、私と精鋭部隊なら可能だ。」

ゲパルト「わかりました。確かにそれならトキョウも軽く落ちる事でしょう。」

ローランド「ゲパルト、おまえはこの地に5部隊と共に待機。タイナンを攻略した後、中央大陸にきてもらう。」

ゲパルト「御意！」
こうしてローランドは、自らの出陣を決めた。

その頃トキョウでは、ローラシアからの行軍など予想する余地もなく、ただ平和な日常が流れていた。そんな中、ヒサヨシだけは1人部屋にこもり、現在の状況を分析していた。

ヒサヨシ（シャオはなんとか生き残ったか。ここで死なれたらちょっと辛かったし、まあ助かったな。そやけどこれ以上勝たれると、力のバランスが悪くなるな。このへんでローランドにも頑張ってもらわな。お互いつぶし合う。それがわしらのイニシエにとって一番や。そして。。。）

チューレン「ヒサヨシ様、何を考えてらっしゃるのですか？」
いつのまには部屋に入ってきていたチューレンに声をかけられ、ヒサヨシは少し驚いた。

ヒサヨシ「入ってくるんやったら、ノックしてくれや。」

チューレン「ちゃんとノックしましたよ。ヒサヨシ様が真剣に何かを考えておられましたから、気がつかないみたいですね。」

ヒサヨシ「そうか。気がつかんかったか。」

チューレン「どうしましょうか。アイ様、シャオ様、アサリ様、アサミ様、皆いい人ですからね。」

チューレンはヒサヨシの心を見透かしているようだった。

ヒサヨシ「そやな。。。」

ヒサヨシには、受け継ぐ者という肩書きが、少し重く感じられていた。

数日後、ヒサヨシの妖精リュウイーは、ローラシアから船が出たことを察知していた。

ヒサヨシにもすぐにそれは伝わった。

しかしそれから何日経っても、南の大陸の北、大海の中間で見張りをしている妖精には、その姿をとらえる事ができなかった。

ヒサヨシ（どうゆうこっちゃ？まさか黒の霧の中を？まさかな。そやけどもしそやったら。。。）

ヒサヨシはこの推測を皆には話さなかった。

逆にこの地を離れる事にした。

ヒサヨシ「わしちょっとタイナンに行ってくるは。もしかしたら海から侵攻してくる可能性もあるからな。準備や。」

ヒサヨシの言葉を誰も疑う事は無かった。

ヒサヨシは立ち去る時、コンドーに耳打ちした。

ヒサヨシ「何かあったらイニシエに戻れ。」

コンドー「。。。」

コンドーはヒサヨシを無言で見送った。

ヒサヨシがトキョウを出て数日後の朝、日がまだ出ていない時間から、町のあちこちで炎が上がっていた。

リュウ「まさか北側から敵襲とは。考えられない。」

ローランド率いる精鋭部隊が、既にトキョウの町に展開し、そして屋敷を取り囲んでいた。

リュウ「くっそう！！むざむざやられてたまるか！！」

リュウは魔力を高める。

しかし次の瞬間には精鋭部隊の1人に斬られていた。

リュウ「無念だ。。。」

リュウは倒れた。

雄志軍の他の面々も例外無く斬られていた。

そこへ新撰組がローランドの前に出た。

コンドー「ヒサヨシ殿の言っていた事はこの事か。」

トシゾー「なんだ？あいつ知ってのか？」

ソーシ「あの人腹黒いからって、僕たちやばい？」

サイトー「やるだけやるしかなさそうですね。」

ピンチな状況でも、4人の会話には緊張感は無かった。

その会話を、屋敷の影でミサは震えながら聞いていた。

ミサ（ヒサヨシさんがしていた？どういう事だろう？）

ミサはローランドを見て、自分は戦力にならない事を悟り、震える体でその場から離れた。

コンドー「みんな。史上最大の強敵だ。心してかかれよ。」

トシゾー「面白い。新撰組の力を見せてやろうぜ。」

ソーシ「力見せないから逃がしてくれないかなあ〜」

サイトー「自力でなんとかするしかないようですね。」

そんな4人に、精鋭部隊が襲いかかった。

コンドー「はやい！！なんじゃこいつら。こんな使い手がこの人数。無理無理！！」

トシゾー「確かにな。でも無理でもなんとかしないと、っと。やべ！！」

ソーシ「トシさん、死んでも助けませんよ。」

サイトー「死んだら助けようがないでしょ？！」

軽口をたたいてはいるが、4人に余裕は無かった。

そこにローランド自らのテラメテオが襲いかかった。

コンドー「おいおい、手加減しようよ〜！」

コンドーは何とかそれをかわした。

ソーシ「日頃シュウカの野郎にいじめられてる成果ですね。」

サイトー「ボサッとしないで！！」

テラメテオの火球が、コントロールされているらしく、再びこちらに戻ってきた。

トシゾー「俺に任せろ！！」

トシゾーは火球の前に出て、炎の刀でそれを防いだ。

コンドー「流石炎の刀！」

ソーシ「炎には炎ですね。」

サイトー「刀のおかげです。」

トシゾー「誰も俺を誉めねえのか！！」

そんな事を言いながらも、4人は逃げる為に南に南に場所を移動していた。

ローランド「あの4人なかなかやりますね。それにあの刀。マジックアイテムですか。イージス！後は頼みますよ。私は王に会ってきます。」

イージス「オッケー！！」

ローランドは勝利を確信し、後は精鋭部隊隊長イージスに任せて屋敷に入っていった。

イージスはローランドの側近であり友人で、その力はローランドと並ぶと言われていた。

ただ、魔法よりも剣を好んで使うところが違った。

イージス「俺が相手する！！」

イージスが目をつけたのは、ソーシだった。

ソーシ「ふうん。僕の相手をする。みなさん、手出し無用です。」

ソーシから殺気が漂っていた。

トシゾー「ソーシが本気になった。あの相手、かなりの使い手だ。」

コンドー「そんな事はどうでもいい。早く退路を〜」

サイトー「ソーシさんの戦い。ゆっくり見たいですが。。。そんな場合じゃないですね。」

各々自分の事で手一杯だった。

イービス「俺の名はイービス。おまえさんは？」

イービスは友達に話すように、軽い口調で尋ねた。

ソーシ「キサマに名乗る名前はない！！誰がソーシだなんて言うか！！」

イービス「ああ、ソーシって名ね。」

ソーシ「何故知っている！！」

ソーシは本気でビックリしていた。

トシゾー「アホだ。。。」

ソーシ「超能力者が相手か。面白い。本気で行くよ。」

イービス「ああ、本気で来い！！」

ソーシは再び殺気を放った。

イービスも真剣に剣を構えた。

周りの人間が手を出す雰囲気では無かった。

手を出したら、たとえ味方でも殺られる。

そんな雰囲気が漂っていた。

2人は向かい合ったまま動かなかった。

気がつくと、周りの者達も動きを止めていた。

コンドー「逃げるチャンスじゃね？」

コンドーは小声でトシゾーとサイトーに言った。

トシゾー「おっさんだまってな。」

サイトー「ここで逃げるなら、死んだ方がましです。」

コンドー「はい。すみません。」

2人の言葉に、コンドーは小さくなった。

ソーシとイービス。

2人は動かない。

お互い隙が見あたらない。

上位の剣士同士の戦いでは、このような事が時々ある。

動かない。そして動けない。

魔法剣士であるイービスには、魔法で何かができたかもしれない。

しかしこれだけの剣士と戦えるうれしさから、魔法は使わないで戦いを楽しみたかった。

トシゾー（長くなりそうだな。とりあえず、新撰組メンバーにはこの期にこっそり退却してもらおう。）

トシゾーはこっそり新撰組の面々に指示を出していった。

そしてこっそりとメンバー達はこの場を去った。

ここに残るのは、新撰組の上位4人のみ。

サイトー「そろそろです。退却準備をしましょう。」

サイトーはコンドーとトシゾーに小声で声をかけた。

トシゾー「そうだな。ほらよ！！」

トシゾーはそう言うと、ソーシとイービスの間に、石を投げた。

石が地面に落ちる。

その瞬間、ソーシとイービスの距離が一気に近づいた。

お互い剣で斬りつける。

一瞬時が止まったような錯覚をトシゾーは感じた。

刀と剣がぶつかり合った。

力は五分だった。

その間に大きな魔力の固まりが出来た。

コンドー「行くぞ！！」

コンドーの言葉と同時に、大爆発が起こった。

その爆発は、辺りの町の建物を飲み込んだ。

イージス「互角か。俺と互角の剣士。初めてだな。」

イージスはもう目の前に姿の無いソーシを、嬉しそうに見送った。

ソーシ「くっそう！！なんで逃げるんだよ。」

トシゾーとサイトーが、ソーシの腕をつかんで逃げていた。

トシゾー「バカか？せっかくの逃げるチャンスじゃねえか。あのままやって、たとえ勝ったとしても、その後逃げれないだろ？」

サイトー「そうそう。再戦のチャンスは、またありますよ。」

コンドー「とにかく俺達は、このまま一気にイニシエに戻るぞ。」

こうして新撰組の面々は、イニシエに戻る事になった。

そしてその後、アキラはローランドに殺られ、トキヨウの町はローランドの軍門に下った。

それを聞いたヒサヨシは、すぐにシャオ達の元へ向かった。

最後の戦い

ヒサヨシがシャオ達と合流したのは次の日。

ヒサヨシはローランドがトキョウに侵攻してきた事、そしてアキラの死を伝えた。

アイは泣き、他の面々も皆ショックを受けた。

ヒサヨシ「すまん。わしがちょっとトキョウを離れた隙に攻め込まれた。それもトキョウの北、黒の霧の中から来たみたいや。流石に予想でけへんかった。すまん。」

ヒサヨシは何度も謝っていた。

しかしそれを責める事はできない。

そんな方法でトキョウに来ることなど、誰も予想できなかった。

ヒサヨシ「それでローランドが来てる事もあったし、こっちの戦力を分けるのは得策やない。そやからわしはここにきたんやけど。。。。」

シャオには、あまりにあっさりと逃げてきたヒサヨシに、少し疑問も感じたが、ヒサヨシの言うことも正しいと思った。

シャオ「まあ問題は、この後どうするかだ。トキョウを取り戻しに行くのか。それとも。。。。」

シャオのその言葉にも、皆どうして良いのかわからない。

沈黙の中に、アイの嗚咽だけが響いた。

シャオはただアイを抱きしめていた。

ヒサヨシ「やっぱりここは、ローランドと直接対決するしかないんちゃうか？戦力はもうこっちにはのこらへん。カンセイの街に退避した、カンセイ軍2000人と、ここにおける面々だけや。」

シャオ「そうだな。ローランドをやれば、もしかするとこの戦いは終わるかもしれない。」

シャオには、泣いているアイの事が気がかりで、今話す事は辛かったが、それでも考えを口に出していた。

ヒサヨシ「それでや、決戦の場、ここでは無理や。ここはトキョウの傘下に入ったカンチュウの町や。もう数日でその情報が入ってくるやろ。そしたらここは、敵の領地も同然や。人々はわしらに味方してくれるかもしれへんけど、気持ちの問題や。そこで、今だにトキョウにもローラシアにも属さない地、南のルートの東の玄関口、ファイン国に行こうと思うねん。あそこの王は、ちょっとした知り合いでな。同盟もトキョウ傘下にも無理やったけど、困ってるわしらを見捨てるヤツやない。それにあっちも戦力がほしいはずや。どや？最終決戦の地は、ファインで。」

シャオ「ああ。」

皆の代わりに、シャオが返事を返した。

シャオには、以前から感じていた、ヒサヨシの思い通りに全てが動いている感じが、ますます大きくなっていった。

次の日にはシャオ達はファインに向かって出発した。

2日後にはファインに到着。

そしてヒサヨシの妖精達や、ヒサヨシ傘下の2000人の部隊もファインに入った。

その間にも、ローラシアは中央大陸の街々を占拠していった。

中央大陸の街には、もう大した戦力はない。

逆らう街や国は無かった。

そんな中、ヒサヨシの妖精ツーツが、ローランドと話をしていた。

ツーツ「わたくしは、イニシエの使い、ツーツと申します。」

ツーツは片膝をついて頭を下げた。

ローランド「イニシエ、ですか。その使いがどういったご用件ですか？」

ツーツ「今やこの世界は、ローランド様がほぼ手中にしたと言っても過言ではありません。そ

れでもまだ残された地が、そして逆らう者がいるのも事実。我々は、ローランド様が完全に世界を1つにする事を望んでいます。そして我々はいずれ、ローランド様の傘下に入る事を望んでいます。ローランド様が、イニシエ以外の地、全てを治める王となられた暁には、イニシエも傘下に入る事を望みます。だから是非、全ての国を傘下に治めていただきたい。そしてそれまでは、イニシエを戦場にしないでいただきたいをお願いに参りました。」

ローランド「ふむ。それはそれは。進んで傘下に入っただけなら、それはお約束いたしましょう。」

ツーツ「ありがとうございます。ローランド様が世界の王になられる日を、心よりお待ち申し上げます。」

ローランド「それではイニシエの長、だれだったかな？」

ツーツ「シュウカでございます。」

ローランド「シュウカ殿に、確かに承ったとお伝えください。」

ツーツ「はっ。それではわたくしはこれで失礼させていただきます。」

ツーツはそう言うと、スッとその場を後にした。

ローランド「どう思いますか？ゲパルト。」

ゲパルト「何か裏があるように思われますが。。。」

ローランド「どちらにしろ、まあかまわないさ。まずはイニシエ以外を、そしてシャナクルを倒します。」

ゲパルト「はい。」

ローランド「もうすぐだ。」

そう言ったローランドは、青い空を見上げた。

ファインでもヒサヨシの妖精はいろいろと準備をしていた。

テンハウとチーハウは、進入路にトラップをしかけ、奇襲のシュミレーションをしていた。

ショウスウの具現化した扉から、色々なトラップを取り出しては、セットしてゆく。

ショウスウの扉は、妖精界に繋がっているらしく、いろいろな物が出てきた。

ちなみにヒサヨシがチャイルドの街を焼き尽くした時は、テンハウとチーハウにより、あらかじめ沢山の爆発物をセットし、そしてそれを一斉に爆破する事により、一瞬に街を焼きつくしたのだった。

リュウイーは情報収集と伝達に飛び回り、コクシとサンゲンは国境の見張りをしていた。

1週間後には、ローランドが中央大陸をほぼ手中に収めていた。

その頃ファインには、新撰組の面々が入ってきていた。

最終決戦はいよいよ目前だった。

ローランドと精鋭部隊2000人、エリート部隊2000人、各6部隊10000人が、ファインへと向かっていた。

その情報は既にシャオ達の耳に入り、それぞれが待ちかまえた。

ローランドは真っ向勝負の構えで、まっすぐと部隊をすすめてくる。

そして、爆発が起こった。

ローラシアの前衛のラビット率いる第六部隊が、爆発に巻き込まれる。

ラビット「魔力は感じませんでした。いったいどういう事？」

魔力による魔法トラップを警戒していたラビット率いる第六部隊だったが、それでも爆発に巻き込まれた。

ラビットはどういう事か、理解できなかった。

これはヒサヨシの妖精が仕掛けた、古の技術による爆発だった。

現在はイニシエにのみ伝わる技術。

シャオ達も驚いた。

シャオ「これは、古の魔法か？」

そんな中、テンハウとチーハウが追い打ちをかける。

テンハウ「ここでできるだけ戦力を削るぞ！」

チーハウ「アイアイサー！」

2人は更に古の技術で敵を攻撃した。

ラビット「皆さん気をつけてください。魔法とはどうやら違う爆発。マジックシールド展開！」
ラビットはそれに対処するが、その被害は莫大で、他部隊にも及んでいた。

第九部隊隊長のカオス、第七部隊隊長のマーシャルもその被害に遭っていた。

カオス「ヴァっ！」

マーシャル「いったい何処から？ぎゃああ〜」

それを見た第五部隊隊長エーテル、第三部隊隊長ウィン、そして第一部隊隊長キングは冷静な対応で回避を試みた。

エーテル「落ち着いてください。爆発物が潜んでいるなら、先に爆発させてしまえばいいのです。」

ウィン「ふっ！雑魚を盾に、進むもよし。」

キング「先の道は私が切り開こう。逃げ遅れた者は知らんからな。ははは〜」

そう言った3人は、第六部隊がまだ残るエリアを含む前方に、エネルギーブラストを放った。

逃げ遅れた者達を巻き込み、大きな爆発が連鎖して、シャオ達へと続く道で次々と爆発が起こる。その爆発はやや後方を進む各部隊にも被害を広げ、そして爆発が止まった。

キング「よし。おそらくトラップは全て排除できたであろう。進め〜！」

キングの声に各部隊は再び前進を開始した。

キング「第七第九部隊の残存兵力は、第六部隊に合流しろ！」

ラビット「おそらくトラップはもうありません。人の動きのみ注意してください。」

かなりの被害がでたものの、その後の対処は早く、既に何事も無かったかのように行軍してくる。テンハウと、チーハウの奇襲も、既に衆知され、シールドも展開されていた。

テンハウ「ここまでだな。一旦引いて、後は影に紛れるぞ！」

チーハウ「オッケー！」

テンハウとチーハウは一旦引いた。

シャオはブルードラゴンを呼びだし、その背に乗り空へと上がる。

最後方にアイ、その前にアイがサポートする形で、シュータ、ムサシ、アサリ、アサミが並んだ。

その前に、ヒサヨシと指揮下の部隊、そして妖精達が待ちかまえた。

ラビット「シャナクルの魔法に気をつけてください！」

イーグル「ドラゴンは我々が何とかする。各部隊は地上の奴らをたのんだ。」

キング「ふん。何故イーグルがエリート部隊を指揮してるんだ？」

ウィン「おそらく敗戦の中で、少しは対応策があると判断されたのでは？」

エーテル「ドラゴンを相手にするのもあれですし、まあ良いじゃないですか。」

第一部隊の隊長であるキングにとっては、第二部隊隊長であったイーグルが、エリート部隊を率いている事に少し納得していなかった。

シャオ「先手必勝！！」

シャオはドラゴンのブレスに合わせて、魔法を放った。

ローラシア部隊前方広範囲を結界が包む。

中では氷の矢が吹き荒れた。

ラビット「アイスブリザード！しかもこれだけの広範囲。対応できない。」

シャオは上級魔術で、まずは数を減らす事に終始した。

シャオ「まだまだ！」

何度も魔法を放ち、部隊の数を一気に減らしてゆく。

キング「考えられない魔力だ。イーグル！ドラゴンを早く何とかしろ！」

上空のドラゴンを何とかすれば、シャオが上空から攻撃する場合、飛翔をコントロールしながらになる。

そうすれば、自ずと魔力は弱くなるし、ドラゴンのブレスや魔力の助力も無くなる。

キングは、まずはそこからなんとかせねばと判断した。

イーグル「ブルードラゴンは、水属性だ。ライトニング系魔法で集中して攻撃しろ！」

イーグルはエリート部隊に指示を出した。

エリート部隊は上空に展開し、ライトニング系魔術で攻撃する。

しかし、ライトニング系上級魔法は、上空からの攻撃が基本で、シャオに上空をマジックシールドで守られては、なかなか致命傷は与えられなかった。

イーグル「ちっ！時間がかかるな。皆ライトニングボルトで対応。確実に少しずつダメージを与える！」

イーグルとエリート部隊が苦戦する中、地上では既に両勢力が入り交じっていた。

ヒサヨシ「あれだけやってもまだこれだけのこっとるんか。しんどいのお〜」

チューレン「それになかなかの使い手の集まり。精鋭部隊を相手するまでに、余力を残しておかなければなりません。」

タアスーシ「しんどいのお〜」

ヒサヨシも妖精達もかなりの使い手だが、流石に数で圧倒的に負けているので苦戦していた。

アイ達は、アイが魔法障壁や魔法防御等、結界で1対1の状況を作り出し、シュータ達を補佐していた。

アサリ「次です！」

アサミ「次から次へと。。。」

ムサシ「まだまだいけるで〜！」

シュータ「はあはあ。。。」

シュータは辛かった。

シュータの能力は、短期には強いが、長期戦には向いていない。

少しずつ疲労感が見えてきていた。

新撰組の面々は、多対一はなれたもので、真ん中で暴れている。

シャオの容赦ないサポートも、楽勝で受け入れていた。

シャオ「あいつらすげえな。これならもっと強力な魔法でサポートできるな。」

シャオはアイスレインを放った。

ローラシア各部隊は、かなり数を減らしていた。

ローランド「なかなか相手もやりますね。」

ゲパルト「左様でございますな。」

イージス「俺、見てるだけでつまんねえんだけど。精鋭部隊は任せるから、俺も行って来るぞ！！」

ローランドの作戦は、最初は数で相手を疲れさせ、後で精鋭部隊で片を付ける作戦だった。

しかしイージスは、見ているだけは性に合わないらしく、ローランドの作戦を無視して、戦場へと向かった。

ローランド「全く。昔からの友だから楽をさせてやろうと思っても、イージスはお気に召さなかったようですね。」

ゲパルト「しかしまあ、彼ならそう簡単にはやられますまい。」

ローランドとゲパルト、そして精鋭部隊は後方で待機を続けた。

イージス「おまえの相手は俺だ！」

イージスは新撰組のソーシに向かっていった。

コンドー「やっかいなヤツがきたな。」

トシゾー「あれはソーシ、おまえにまかせるよ。」

サイトー「確かに、相手になるのはソーシさんだけですな。」

ソーシ「あんちくしょうのこんちくしょう！！相手してやらあ〜！！」

ソーシとイービスの剣がぶつかる。

辺りに爆風が広がった。

イービス「剣の腕は五分と見た。しかし俺はそれだけじゃねえぞ！！」

今日のイービスは、剣だけでの勝負ではなく、魔法も使ってきた。

ソーシ「うわっ！こいつ！きたねえ〜ぞ！！」

イービス「今日は勝たねばならないんでな。お遊びは終わりだ。」

ソーシが押され始める。

他の新撰組メンバーも自分のポジションを死守するのが一杯で、助ける事もできない。

トシゾー「ソーシ！ちっ！雑魚がうじゃうじゃと！！」

サイトー「僕も一杯一杯です。くっ！」

コンドー「やばい！なんとかならねえか？くっ！ならねえ〜！！」

イービス「終わりだ！！」

イービスの魔法がソーシを襲う。

そして魔法が命中したソーシは、一瞬動きを止めた。

トシゾー「危ない！！」

トシゾーがかばおうとした時、ソーシはイービスの剣に貫かれた。

イービス「なかなか楽しかったぞ。」

そう言ったイービスは、ソーシから抜いた剣で、トシゾーを切った。

トシゾー「グッ。。。あつ。。。」

ソーシとトシゾーが倒れた。

コンドー「雑魚はあらかた片づいた。おまえらソーシとトシを頼む。サイトー2人でやるぞ！！」

」

コンドーは、新撰組メンバーにソーシとトシゾーを頼むと、サイトーと共にイービスに向かい合った。

この時、ヒサヨシ傘下の部隊と、敵の各部隊はほぼ壊滅していた。

上空では、ライトニングを浴び続けたドラゴンが、ナイフへと形を変えていた。

ブルードラゴン「ワシハソロソロゲンカイダ。アトハナイフニモドッテホサシヨウ。。。」

ナイフはシャオの手元に戻った。

シャオは飛翔を発動する前に、アイスブリザードで残りのエリート部隊を結界に閉じこめる。

そして地上に落ちる寸前に飛翔を発動し、再び上空へと昇った。

シャオ（はあ、はあ、きついな。）

イーグル（俺にシャナクルの相手はきつい。一度引くか。）

イーグルは、アイ達の方へと向かった。

シュータはラビットの相手をしていた。

限界で魔力は見る見る小さくなっている。

アイ「シュータ先生。下がってください！」

しかしアイの言葉は、シュータには届いていなかった。

そこへ、隙をついてやってきたイーグルが、シュータを襲った。

シュータはただ襲い来る剣をまともに受けて、そして倒れた。

アイ「先生！！」

イーグル「今度はこの鬱陶しいマスタークラスの白魔術師だ！」

イーグルはアイに襲いかかった。

トムキャット「シャナクル様に、アイ殿は任されているのでな。」

トムキャットがイーグルの前に立ちはだかる。

イーグル「裏切りものが！」

しかしイーグルとトムキャットの力関係は、明らかにトムキャットが上。

イーグルは無駄な戦いを避けた。

イーグル「おまえの相手は、他に任せる。」

イーグルはそう言い残し、後方へと引いていった。

ヒサヨシの妖精達は健在だが、かなりの疲労があった。

その動きは少し重い。

イーダスの相手をしている新撰組も防戦一方だ。

更にはアイ達もかなり疲れていた。

ローランド「そろそろだな。精鋭部隊よ。一気に敵を殲滅せよ！」

ローランドの声に、今まで静観していた精鋭部隊が、戦場へと赴いた。

その動きは、各部隊やエリート部隊をものぐスピードだ。

シャオは上級魔法で迎え撃った。

シャオ「テラアイスレイン！！」

無数の氷の矢が、強大な魔力を伴って精鋭部隊を襲う。

しかし、そのほとんどはレジストされ、そしてシールドにより防がれていた。

シャオ「複数対象の魔術では、殺れないか。」

シャオは再び魔力を高めた。

地上は、精鋭部隊の参入で、トキョウの面々は次々とやられていった。

コンドー「ダメだ。相手できない。引くぞ！」

サイトー「はい。」

コンドーが地面を地の刀で斬りつけ、爆発を起こし、サイトーの風の刀で風を起こした。

イーダス「煙幕？逃げるか。」

イーダスは追うこともなく、それを見送った。

そしてアイの方を見る。

イーダス「トムキャット、一度やりたい相手でもあった。勝負だ。」

イーダスはトムキャットの方へと向かった。

アサリ、アサミ、ムサシ、トムキャット、そしてアイは、ラビット、キング、ウィン、エーテルを相手にしていた。

そこにイーダスが来たことで、一気に押され始める。

イーダス「トムキャット勝負！」

イーダスは戦いを楽しんでいるようだった。

トムキャット「この者の相手は、私がする。他は何とかしてくだされ。」

トムキャットとイーダスの剣と魔法が交錯した。

アサリもそろそろ限界だった。

魔力は絶大だが、無駄な動きが多かった。

アサリは最後の力を振り絞り、ラビットに向かった。ラビットはギガメテオで応戦する。

それはアサリをまともに捕らえたが、アサリは怯まずラビットを斬りつけた。

ラビットの体が崩れる。

それに重なるように、アサリも倒れた。

アサミ「アサリ！」

アサリにとどめをさそうとしていたエーテルの前に経つアサミ。

そしてエーテルの剣を受け止めた。

キング「おまえの相手をしているのは俺だ。」

アサミの相手をしていたキングが、アサミを後方から襲う。

ムサシ「アサミは俺が守るんじゃ！！」

キングの剣がアサミをかすめる。

そしてムサシの剣が、キングをとらえた。

キング「うっ！」

キングは倒れた。

ウィン「そして美味しいところは私のものです。」

そんなウィンにアイがシンボルロッドで、背後から突き刺した。

シンボルロッドが、鞘から抜かれている。

アイが、初めて殺意から行動した。

ウィン「ヴア。。。まさか。。。」

ウィンは左胸を貫かれていた。

アイは泣いていた。

その頃ヒサヨシは、妖精とのコンビネーションで、精鋭部隊を相手していた。

シャオの補佐もあったが、妖精は次々にやられてゆく。

ヒサヨシ「あかん。わしも本気ださなやばいやんけ！まだローランドはなんもしとらんのに！！」

ヒサヨシはそう言いながら、魔力を高めた。

ヒサヨシ（一発勝負や。はずしたらこの戦い負ける。）「チューレン！みんなでなんとか精鋭部隊を抑えてくれ！！」

ヒサヨシはそう言うと、結界で精鋭部隊を包んだ。

ヒサヨシ「魔の結界や。滅びの結界ほどやないけど、強力やで。シャオ！！中に強力な魔法頼むは！！」

ヒサヨシの声に、シャオは結界内に魔力をぶち込んだ。

シャオ「ライトニングブリザード！」

ライトニングブリザードは、広範囲を対象とした、ライトニングとブリザードの複合魔術だ。

その威力はそこそこのものだが、結界によりエリアを限定される事により、威力は絶大だ。

ヒサヨシ「やったか？」

しかし、かなりの数がそれを防いでいた。

シャオ「流石に精鋭部隊。全滅とはいかないか。」

ヒサヨシ「少し引いて、戦力を集中させるで！！」

シャオとヒサヨシはアイ達と合流して、精鋭部隊を迎え撃つ。

そこヘイグルもやってくる。

イーグル「そろそろ限界だろ！！今なら俺でも殺れる！」

シャオ達の中で、戦えるのはシャオとヒサヨシ、トムキャットとアイ、そしてアサミとムサシ、だけだった。

それをイーグルとイーグルと多数の精鋭部隊が襲う。

明らかにシャオ達は不利だった。

アイは初めて人を殺した事で動揺し、魔法に迷いがでていた。

サポートがうまくいかない。

ムサシ「アイ！！しっかりしろ！！」

アサミ「ダメだよ～！！」

精鋭部隊の1人の剣が、ムサシをとらえた。

ムサシ「まだまだ～！！」

振り向きその者を切ったムサシの背中からは、大量の血が流れていた。

アサミ「大丈夫？」

ムサシ「これくらい平気や！！」

そうは言ったムサシだが、その視線はうつろだった。

シャオは限界に近い。

ヒサヨシも先ほどの結界で、かなり消耗している。

アイは動揺し、トムキャットはイージスに完全に抑えられていた。

ローランド「そろそろ決着をつけるか。」

ローランドはそう言うと、ゲパルトと共に、シャオ達に向かった。

ローランド「シャナクル！！終わりだな！！」

ローランドはシャオ達に向けてテラメテオを放った。

これだけの魔法、完全に止められる者は、シャオ達の中にはもういなかった。

巨大な火球が、シャオ達を飲み込もうとする。

やばい！皆思った。

その時だった。

二枚の扇子が火球の前に現れる。

その扇子が、魔法防御を展開した。

テラメテオはそれにぶつかると、次の瞬間には消えていた。

ローランド「何だ？」

驚いたローランドは辺りを見回した。

すると右前方、シャオ達のかかなり後方に、1人の姿をとらえた。

ローランド「誰だ？」

シュウカ「は〜い。シュウカちゃんで〜す！！」

眠そうな目をしたその男、イニシエのシュウカだった。

ヒサヨシ「シュウカ、きとったんか！！」

シュウカ「ま〜ねえ〜そいじゃ〜最後の仕上げしますかあ〜しんど。。。」

シュウカの扇が、風に乗って舞い上がると、広げた状態から閉じた状態になる。

その途端、先から凝縮された魔力が精鋭部隊を次々と攻撃した。

凝縮された魔力は、虚をつかれた精鋭部隊を次々と打ち抜いた。

扇子は黒の魔力を集めながら、移動し攻撃を繰り返す。

更には、シュウカの操る魔力の糸が、同時に攻撃する。

糸の攻撃はさほど強力では無いが、少しずつダメージを加えていった。

ヒサヨシ「シャオ！ローランドをやれるか？」

ヒサヨシの問いに頷いたシャオは、ローランドへと向かった。

ヒサヨシも後に続く。

ローランド「シャナクル。早々に決着をつけてあげます。そしてあの者も。」

ローランドはシュウカをチラッと見た。

ゲパルト「私も久しぶりに本気でやります。」

最後の戦いが始まった。

シャオ（もう魔力が限界だ。あれを使って一発で決める。）

シャオが使おうとしている魔法。それは聖騎士団から逃げる際使った、魔力をすべて解放する魔法。

人は魔力の70%くらいまでしか使えない。

魔力を全て使い切る事は、生命力を全て無くす事になり死に至る。

だからあるところでリミッターがかかり、それを抑える。

それがだいたい70%あたり。

そのリミッターをはずす魔法。

それを使って、シャオは最後の魔法にかけようと決めた。

シャオ（なんとかして隙をつくらないと。。。）

シャオはローランドの攻撃をかわしながら、隙を探っていた。

ヒサヨシはゲパルトと剣を交えている。

ヒサヨシはかわすので精一杯だった。

ヒサヨシ（きついのお。こいつ強いは。）

ローランド「無駄です。もう決着はついています。」

ローランドは剣を抜き、シャオに襲いかかった。

ローランド「魔法使いは、サポートがいなければ剣には勝てませんよ！！」

ローランドの剣がシャオを襲う。

シャオはためらわず、自らも間をつめた。

ローランドの剣が、シャオの腹の辺りを貫いた。

ローランド「さらばだシャナクル。」

そういうローランドに更に体を近づけ、シャオはローランドに触れた。

シャオ（ゼロレンジからの魔法だ。防ぎようがないだろ。。。）

シャオはローランドに魔力を流し込んだ。

ローランド「何？」

シャオの魔法。

それは白魔術。

白魔術は基本的に、エネルギーブラスト以外、攻撃系の魔法はない。

しかし、逆スペルと言われるものが存在する。

シャオは治癒回復の逆スペルを発動した。

ローランド「なっ！なんだ？うがぁ～！！」

ローランドの体を激痛が襲う。

体から血がにじみ出た。

シャオ（やったか。。。）

シャオは、ローランドと共に倒れた。

アイ「シャオ！！」

アイの悲痛な叫び声が、辺りに響いた。

シュウカ「まだだな。。。」

シュウカはローランドを見ていた。

その姿は、ゆっくりと立ち上がった。

ローランド「はあはあ、かなりやばかったですね。。。しかし私の勝ちです。」

シャオの魔法が完全に成立する前に、シャオの魔力はつきていた。

かなりのダメージは与えたものの、ローランドを死に至らす事はできなかった。

ヒサヨシ「やばい！！わしも限界や。シュウカ！！なんとかなるか！！」

シュウカ「あ～きついな。。。でもやるしかないか。。。」

シュウカとムサシ達は、精鋭部隊はなんとか、少なくとも戦闘不能までにしていった。

ムサシ「わしももうあかんわあ～」

アサミ「私も。。。」

しかしムサシもアサミも限界で、重なるように倒れた。

今立っているのは、アイとトムキャット、ヒサヨシとシュウカ、イーグルとイーグス、そしてローランドとゲパルトだった。

ローランドが更にシャオに剣を突き刺した。

何度もシャオを貫いた。

その時、まぶしいばかりの光が辺りを包む。

それはアイからだった。

持っているシンボルロッドを膨大な魔力が包む。

その魔力の大きさは、誰もが信じられないくらいの大きさだ。

アイはうつろな目でシャオを見ていた。

イーグス「これは。。。」

トムキヤット「信じられない。」
皆動きを止め、ただアイを見た。
アイの魔力は、更に大きくふくらむ。
そしてその魔力が一気に凝縮されると、シャオへと向かった。
それは一瞬。
誰も動けない。

シャオはその魔力を受けると、光に包まれた。
先ほどの光よりも更にまぶしい。
辺りの景色が、全て白くなった。
皆眩しさのあまり目を閉じた。
ゆっくりと光が収まってゆく。
目を閉じていた者も、ゆっくりと目を開けた。
するとそこには、シャオが立っていた。

ヒサヨシ「蘇生？んなあほな。」

シュウカ「ゼロレンジからでも、あそこまでの傷、なかなか蘇生できないんだけど。。。愛の力？ああ、洒落ね。。。」

イーガス「すごいな。。。」

皆それぞれに驚いていた。

ローランド「信じられません！！しかし復活した以上、もう一度倒すまでです。」
皆が動きを止めている中、ローランドだけがシャオに向かった。

シャオはあっさりと攻撃をかわす。
ローランドは連続で剣を振るった。
しかし一切当たらなかった。
シャオが不意にローランドに手のひらを向ける。
魔力は感じられない。

それでも瞬間に膨大な魔力が、ローランドへ向けて放たれた。

ローランド「ノータイムでこの魔力！！バカな～！！」

ローランドはマジックシールドで防ごうとしたが、それをあっさりと突き破り、ローランドをとらえた。
その姿は一瞬でけしとんだ。

イーガス「ローランド！！」

ただ見ていたイーガスが、シャオに向かう。
しかしそれも、シャオの放つ膨大な魔力に飲み込まれ、その姿を消した。

ゲパルト「我々の負けですな。」

イーグル「ああ。。。」

そういった2人は、剣を足下へと落とした。
2人の背中から、シュウカとヒサヨシが剣を突き刺した。

シュウカ「後は仕上げだけ。。。」

ヒサヨシ「そやな。。。」

こうしてローランドとの戦いは終わった。
ヒサヨシの妖精スウアンの癒しの風が、何人かの命を救っていた。

平和への船出

ローランドとの戦いの直後は大変だった。

ひとりでも多く助けたい、その思いで、動けるものは頑張った。

その甲斐あって、主要メンバーは生還できた。

そして数日後、主要メンバー達は、今後の事をファインの王宮の庭で話していた。

ヒサヨシ「ローランドが死んだ今、また世界がバラバラになる可能性がある。シャオ、とりあえずはおまえが帰ってきたって事で、世界をまとめる。その方向でわしの妖精がすでに動いてる。」

シャオ「俺が王か。。。もうなんかやる気ねえなあ〜」

世界が1つになる事で、もう王という立場に魅力がなかった。

ヒサヨシ「まあ名前だけでも頼むは。いまだけや。それで世界が落ち着いたら、誰かに譲ればええ。」

シャオ「じゃあ、ムサシ、おまえに譲るよ。」

ヒサヨシ「そうやな。これでおまえも金にはこまんやろ？」

ムサシ「わしが王かいな！！ふ〜む。ええかもな。」

ムサシは結構乗り気だった。

アサミ「じゃあ私が、王妃って事？ふふふ。。。」

アサミとムサシはすっかり仲良くなっており、アサミはそんな事を言った。

ムサシ「えっ？あ？ええんか？わしメツチャうれしいやんけ〜！！」

ムサシはアサミの言葉をすっかり真に受けて、大喜びした。

ヒサヨシ「ほなら、ムサシとアサミはトキョウに戻って、これから世界をまとめてもらうか。」

アサリ「ではわたくしもアサミと一緒にいきます。」

何とか一命を取り留めたアサリも、アサミについていく事になった。

ヒサヨシ「それでや、まあこれから色々あるけどその前に、みんなには一度イニシエにきてもらいたいんや。わしやシュウカの事、そしてこの世界の事をみんなに知ってもらいたいんや。」

ヒサヨシはチラッとシュウカを見てから、皆を見回した。

シャオ「イニシエか。。。確かに色々興味があるな。。。」

シャオは何かを考えているような感じだった。

ヒサヨシ「そやろ？まあ仰天するもんも見せたるで。」

ヒサヨシは皆に笑顔を向けた。

その時、少し離れた場所から「ダメ！！」と大きな声が聞こえた。

そちらを見ると、そこにはナディアとミサが立っていた。

アイ「ミサ！！」

アイは満面の笑みで、そして目に涙を浮かべながらミサへと走り寄った。

そしてミサに抱きついた。

ミサも笑顔でそれを受け入れた。

しかしすぐに険しい顔になり、ヒサヨシを見た。

ミサ「ヒサヨシさん、あなたはトキョウにローラシアからの侵攻があることを知っていながら、どうしてトキョウを離れたのですか！？」

皆どういう事だと言った感じで、ヒサヨシとミサを交互に見た。

ナディア「ミサは新撰組の方々が話しているのを聞いたんだそうだよ。何かあったら逃げろと言ってたそうだね。」

ナディアもヒサヨシをにらみつけた。

ヒサヨシはやれやれといった感じで、皆に話し始めた。

ヒサヨシ「まあな。もしかしたら攻めてくるかもしれへんとはおもった。それでも確信は

無かったし、最前をつくしたつもりや。新撰組のおかげで、最後の戦いも勝つことができたやん。まあ他にも色々言い訳や話したい事はある。だからこれから、イニシエにみんなできてくれ。全てはそこで明らかにするから。」

シャオ「まあ、全て話すって言ってるし、俺は全て知りたいから行くよ。」

シャオは笑顔で皆を見た。

アイ「私も行く。もしもお父さんを見殺しにしたのなら、その理由が知りたい。」

アイも行く事を主張した。

その後、シャオやアイと共に、皆はイニシエに行く事を決めた。

ヒサヨシ（はあ～皆くるんか。。。お父さんの仇とか言われて、殺された方がマシかもな。。。）

皆がヒサヨシの言うとおりにすると言っているにも関わらず、ヒサヨシの顔はさえないかった。

シュウカ「あ～じゃあ、早速いきまひよ。」

シュウカは皆を促した。

皆それに従って、後をついていった。

イニシエについたのは、既に太陽が沈んだ後だった。

高い壁に囲まれた中に入ると、普通の街があった。

ヒサヨシ「ここの人達は、皆イニシエの為に働いてる。まあ、実際はやってる事が本当はなんなんか、みんなしらんけどな。」

ヒサヨシは話しながら街の中を進んでいった。

街の中をかなり歩いた。

そして入り口から街の一番深いところ、山に面したそこに王宮らしき建物があつた。

まずシュウカが入ってゆき、そしてヒサヨシが皆を手招きしながら入っていった。

王宮の中を進む。

シュウカ「あ～、後はヒサヨシ頼む～」

シュウカはある部屋の前で立ち止まった。

ヒサヨシ「ああ、わかった。みんな！わしらはこっちや。」

シュウカを置いて、ヒサヨシ達は更に進んだ。

そしてある扉の前で立ち止まる。

ヒサヨシ「こっから先は、ほんまやったら誰もいられへん場所や。そやから、これから見る物聞くことは、他言無用でたのむは。」

ヒサヨシの言葉に、皆頷いた。

部屋に入った。

そこには何も無い。

しかし、何か違和感が感じられた。

皆が入るとすぐ、入って来たドアが閉じられた。

シャオ「これは！魔力を抑える牢に感じが似ている。」

シャオはすぐに魔力を高めようとしたが、それはできなかった。

ヒサヨシ「流石シャオやな。ここでは魔法は使われへんで。」

皆すぐにヒサヨシを警戒した。

ヒサヨシ「まあまあ。落ち着いてや。魔法がつかわれへんのは、わしも一緒やん。」

ヒサヨシは少し苦笑いしながら皆をなだめた。

シャオ「ああ。で、ヒサヨシの話、そして見せたい物はココにあるのか？」

シャオがそう言うと、ヒサヨシは黙って何もない壁を指さした。

シャオ「何が？」

シャオがそう応えると同時に、その壁に映像が映し出された。

シャオ「幻影の魔法？」

シャオの質問に、ヒサヨシがこたえる。

ヒサヨシ「ちゃう。これは古の技術や。これからそこに映し出される映像は、遙か昔、アルマゲドン以前のこの地球。まずはそれをみてくれ。」

最初はアルマゲドン以前の、人々の生活が映し出される。

アイ「何これ。こんなに高い建物、どうやって。。。」

アイの質問に、ヒサヨシがこたえる。

ヒサヨシ「昔人間は魔法が使われへんかった。」

ムサシ「魔法が使われへんのに、ますますどうやって作ってんって感じやんけ。」

ヒサヨシ「ああ。そやけど、魔法が使われへんからこそ、人間は別の方法、頭を使って色々楽をする方法を考えたんや。それが科学技術。わしはそのへんわからへんけど、まあ詳しい事はシュウカがしとる。」

ヒサヨシが話す中、映像はアルマゲドンの戦争の状況を映し出す。

アサミ「凄い。どうやってこんな爆発。。。」

ヒサヨシ「そして戦争も、そんな科学技術を使って、今では考えられへんくらい大規模に行われてた。この空を飛ぶ鉄のかたまり。飛行機ゆうねんけど、これで世界中飛び回ってたって話やで。そしてそこから落とされる鉄のかたまり。これが爆弾や。」

シャオ「爆弾？」

ヒサヨシ「そや。わしの妖精が戦いの前にしかけとったトラップ、あれも爆弾の一種や。あれは極めて威力の小さいヤツやけど、この映像でおとされとる爆弾は、その固まり1つで、街1つくら軽く破壊するもんや。人間はそんなもんを使って戦争して、ほんで人類が全滅。それがアルマゲドンや。」

シャオ「そんなバカな事を人間が。。。」

ヒサヨシ「信じられへん？そんなわけないやろ？シャオも大きな魔力と力を持った事で、世界規模の戦争をおこしたやん。」

確かにヒサヨシの言うとおりの、シャオは力を手にしたからこそ、世界統一の戦争を起こしたのだ。

シャオ「それは、世界平和の為に。」

ヒサヨシ「このアルマゲドンの時の人間も、みんな平和を望んどった。それやのにこの戦争や。今よりもあまりにも大きい戦争やけどな。」

皆何も言えなかった。

ヒサヨシ「それでこの戦争の後、なんでかしらんけど、人間は魔法が使えるようになった。生き残ったんはトキョウの地下深くに退避しとった、ごく僅かの人だけやけどな。わしの考えるところ、魔法が使えるようになったんは、人間に頭を使わせないように楽をさせる為。まあ実際魔法が使える事によって、以前の科学技術らしいもんは、この世界には生まれへんかった。」

今映像は、地下の世界で暮らす人々が映し出されている。

ヒサヨシ「それでも魔法が、その域にドンドン近づいていった。シャオ！もしシャオがこの映像のような歴史をしとって、わしら受け継ぐ者の立場やったらどうする？」

ヒサヨシの言葉に、シャオは少し笑顔を浮かべた。

シャオ「ああやっぱりそうか。俺、以前から、ヒサヨシの思惑どおりに事が進んでいるような感じがしたんだよね。」

ヒサヨシは少し驚いたようだったが、すぐに少し微笑んで息を吐いた。

ヒサヨシ「シャオにはわかつとったんか。わしが、シャオとローランドを戦わせて、潰し合わせる事を。わしら受け継ぐ者が、この世界で二度とアルマゲドンを起こさせないようにする方法。それは、力の有るもんを誕生させへん事や。その為に、その芽はつぶせる間につぶす。そやけど、シャオ、そしてローラシアの軍事力、この2つはもうわしの手におわれへんくらい大きかった。」

ヒサヨシはそこまで話すと、天井を見上げた。

シャオ「で、最後の仕上げとして俺達をココで殺るって事か？」

一同ヒサヨシを見た。

沈黙の時間がしばらくつづく。

ヒサヨシは少し笑みを浮かべると、口をひらいた。

ヒサヨシ「そのつもりや。。。」

ヒサヨシはまた上を見上げた。

シャオ「俺は、それで平和になるならかまわないよ。」

シャオの言葉に、皆「え？」とシャオを見た。

シャオ「ただ。。。ヒサヨシやシュウカの立場の者が、私利私欲に動いた時、それを止める事ができる方法はあるの？」

シャオの質問に、今度は皆ヒサヨシを見た。

少しおいて、ヒサヨシは話始める。

ヒサヨシ「受け継ぐ者、本来はわしら中央大陸の1人やった。それを2人増やしたんは、誰かが道を外れた時、残りの2人で修正する為や。」

その言葉に、受け継ぐ者であるナディアが頷く。

ナディア「そうだな。しかし現状、力の差は有るし、私では抑えられない。それにもう1冊は持ち主無しだ。」

ヒサヨシ「そや。それにその方法は、結局機能せんかった。わしが世界を誘導してるん、誰もおさえられへんかったやろ？そしてナディアも、今はわしの手の中や。もしわしが腐っとったら、これでジエンド。わしの天下やったな。」

確かに、ここで皆がやられれば、シュウカとヒサヨシ、2人の思いのまま。

ヒサヨシ「そやからわし、考えてん。少ない人間が、いくら平和な世界を維持しよう思っても無理やってな。それやったら、わしは素直に生きる。それしかないと。」

シャオ「それはどういう事？」

ヒサヨシ「シュウカ！わしはこいつらを殺さへんで〜！」

ヒサヨシはココにいないシュウカに、任務放棄を伝えた。

ヒサヨシ「わしがええヤツやと思った奴は殺さへん。そんなんいややし。わしは素直に生きる事に決めた。それに平和をめざしとる奴殺したらあかんやろ？」

ヒサヨシは皆を笑顔で見回した。

シュウカ（あ〜まあ〜そのとおりだなあ〜）

別室でこの状況を見ていたシュウカも、笑顔で椅子の背もたれに体をあずけた。

ヒサヨシ「そやから今後、みんなでおおすればええか、考えてほしい事もあんねんけどええか？」

シャオ「何かまだあるの？」

ヒサヨシ「ああ。このイニシエ。古の技術ももう無い方がええと思うねん。そやからこの王宮も必要無いと思うねんけどどう思う？」

ヒサヨシは改めて質問の内容を伝えた。

シャオ「確かにこんな科学技術は、無い方が良いかもな。」

アイ「うん。私もそう思う。」

皆の考えは一致した。

ヒサヨシ「それでや。まあこれらは全て破壊する事にしたとして。。。」

シャオ「まだ何かあるの？」

ヒサヨシ「まあな。今世界で流通しとる金、実はココでつくられてんねんけど、どないしょ？」
世界で何故か流通するお金。

偽造も出来ないそれを、ココで作っていると聞いて、皆納得した。

シャオ「そうか。古の技術、そして魔法。それで作られていたのか。納得だな。」

アサミ「それくらいなら残しても良いんじゃない？」

ムサシ「だな。金無いと生きていけないもんな。」

皆の意見は一致していた。

ヒサヨシ「それやと、わしとシュウカは、今度は金製造を受け継ぐ者って事になるんか？」

ヒサヨシがそう話す中、部屋のドアが開いて、シュウカが入ってきた。

シュウカ「あ～これ残すと、その力欲しさに、また争いが起こる可能性もあるけど～」

シュウカは頭をポリポリとかいていた。

シャオ「それもそうだな。まあこの金って、破壊するのも一苦勞な代物だから、これ以上作らなくてもいいんじゃない？念のため大量に作り溜めして、トキョウにでも保管しておいてもいいし。」

シャオの言葉に皆賛成し、イニシエに受け継がれた物は全て破壊する事に決まった。

受け継ぐ者も、今日でその任務を終了する事となった。

数日後、イニシエの街の人々に、他へ引っ越す為の費用としばらくの生活費を持たせ、イニシエから出ていってもらった。

シャオ達もイニシエからかなり離れた場所からイニシエを見る。

シュウカ「このボタンを押したら、ドッカンだ。みんないいなあ～！」

シュウカは皆を見回した。

皆無言で頷く。

これが最後の、古の技術による爆発となり、全ての古の技術がこの世から無くなる。

皆息をのんだ。

そして、シュウカがボタンを押した。

街は一瞬で爆発の中に包まれ、キノコ雲が空へと昇った。

爆風はシャオ達のいる所までにも届いた。

アイ「凄い。。。」

風に吹かれながら、皆キノコ雲が消えて無くなるまでイニシエの街が有った場所を見ていた。

トムキャット「私は東に戻ります。」

シャオ「ああ。ローラシアの領主。よろしく頼む。」

トムキャットは、ローランドの代わりに、ローラシアの領主となる事になった。

これは世界の王、シャオの頼みだったので、トムキャットは断れず了承した。

トムキャット「しかし私が領主など、できるのか不安です。」

シャオ「大丈夫だよ。俺でも王なんてできたんだ。」

シャオは笑顔でトムキャットを見た。

ムサシ「わしは世界の王となる為、トキョウに戻るは。簡単に了解したけど、よう考えたら怖いな。」

アサミ「大丈夫。アサリも私も手伝うし。」

アサリ「そうです。わたくし達もいますよ。」

ミサ「私もね。」

ヒサヨシ「わしも、一旦トキョウに行くは。ショウスウに持たせてる大量の金も持っていかなあかんしな。世界が落ち着くまではな。」

コンドー「我ら新撰組は、トムキャット殿と一緒に東へ渡り手伝います。」

トシゾー「ああ、東に渡った事ねえからな。見てみたいし。」

ソーシ「その後は旅でもしよ～」

サイトー「まあ、落ち着いたらね。」

シャオ「俺とアイ、そしてシュウカとナディアは、魔獣退治にとりあえず南の大陸だな。」

アイ「うん。」

ナディア「早く南の大陸で生活したいしね。」

シュウカ「受け継ぐ者の後始末～」

サスケ「私もシュウカ様についていきますよ。」

コジロウ「そうだね。」

皆それぞれの行き場所を確認した。

1週間後、一同はタイナンの港へと帰ってきた。

ここからはそれぞれの目的地へとゆく。

南の大陸から避難してきた者達も、既に船に乗り込んでいた。

シャオ「魔獣退治はすぐに終わると思うけど、復興作業も手伝うから、トキョウに戻るのは1年後くらいかな。」

ヒサヨシ「まあそれまでに、王はムサシに引き継いでおくで。」

アサミ「シャオと行動を共にしないのなんて、出会ってから初めてかも。」

アサリ「そうですね。少し寂しいですが、またすぐにあえますよ。」

アイ「アサリちゃん、アサミちゃん、元気でね。」

それぞれがそれぞれに別れを惜しんだ。

シャオ達は船に乗り込んだ。

そして2隻の船はゆっくりと出航する。

1隻は東の大陸へ向けて、もう1隻は南の大陸へ向けて。

戦いの無い世界。

その船出のように、皆感じていた。

著者より

「魔法使いシャオ」を読んでくださいまして、ありがとうございます。
この作品は、私の処女作と言えるかもしれません。
よく似た話を書いていて、途中でやめてしまったものを、改めて最初から書きなおしたものです。
話としてはそこそこ楽しめる作品であると思いますが、まだまだ書きなれていなかった頃のもので、展開がチープで軽すぎると自分でも思っています。

1997年 秋華

魔法使いシャオ

<http://p.booklog.jp/book/48814>

著者：秋華

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kitaneko33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48814>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48814>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.